

志戸田繩遺跡

第2・3次発掘調査報告書

2001

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



第2次調査区遺構検出状況全景（南西から）



S G 3 河川跡出土遺物

巻頭図版2



北側掘立柱建物跡群（北東から）



S D302から出土した墨書き器（底部）『福有南』

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが、平成10・11年度の発掘調査を実施した、志戸田縄遺跡の調査成果をまとめたものです。

志戸田縄遺跡は、山形市北西部、JR左沢線東金井駅の西方0.5kmの水田地帯に位置しています。地目は水田・畑地で、稻作・果樹・花木苗栽培が行われています。

この度東北中央自動車道相馬・尾花沢線(上山～東根間)建設工事に伴い、工事に先だって緊急調査を実施しました。

調査では、古墳出現期の土器を多量に出土した河川跡や、墨書き土器を含む溝跡、北側に区画溝を伴って配置された掘立柱建物群も検出されています。これらの遺構・遺物は当時の生活の一端を示す貴重な資料と言えます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産と言えます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫に伝えていくことが、私たちの重要な責務と言えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年10月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木 村 宰

例　　言

- 1 本書は、東北中央自動車道相馬・尾花沢線(上山～東根間)建設工事に係る「志戸田繩遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、日本道路公団山形工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺　　跡　名	志戸田繩遺跡	遺跡番号	平成10年度登録
所　　在　地	山形県山形市大字陣馬字志戸田繩		
調　　査　主　体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
調　　査　期　間	平成10年4月1日～平成11年3月31日(第2次調査)		
現　　地　調　査	平成10年10月27日～平成10年11月27日		
調　　査　担　当　者	調査第一課長	佐藤　庄一	
	主任調査研究員	佐藤　正俊	
	調査研究員	氏家　信行(調査主任)	
	調査研究員	渡部　利之	
	調査員	衣袋　忠雄	
調　　査　期　間	平成11年4月1日～平成12年3月31日(第3次調査)		
現　　地　調　査	平成11年4月19日～平成11年7月22日		
調　　査　担　当　者	調査第四課長	名和　達朗	
	調査研究員	押切　智紀(調査主任)	
	調査員	黒沼　幹男	
- 4 発掘調査及び本書を作成するに当たり日本道路公団東北支社山形工事事務所、山形市教育委員会、東南村山教育事務所等関係機関に協力いただいた。また、出土遺物等について、平川南氏(国立歴史民俗博物館)、水澤幸一氏(新潟県中条町教育委員会)、江川隆氏(山形市教育委員会)から御教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は、渡部利之が担当した。編集は須賀井新人が担当し、全体については名和達朗が監修した。
- 6 委託業務は下記の通りである。

遺構写真実測	株式会社日本テクニカルセンター
遺物理化学的分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
遺物保存処理	株式会社吉田生物研究所
- 7 出土土器、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

S B…掘立柱建物跡	S A…柵(柱)列	S K…土坑
S D…溝跡・溝状遺構	S G…河川跡	S E…井戸跡
S P…ピット	S X…性格不明遺構	S H…墳墓
E B…柱穴掘方	R P…登録土器・陶磁器	RM…登録金属製品
R Q…登録石器・石製品	R W…登録木製品	X O…出土地点不明遺物
P…土器・陶磁器	S…石	

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。なお、2次調査と3次調査の番号が同じ遺構もあるが、本文中では例えば「3次調査のSG2」と扱い、混同しない配慮をしている。

3 報告書の基準は次の通りである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方針は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸はN-20°-Eを測る。南北軸をY軸、東西軸をX軸とし、Y軸を南から、X軸を西からアラビア数字を付した。
- (3) 遺構実測図は、1/20・1/30・1/40・1/60・1/80・1/100・1/125・1/200・1/400・1/500縮図で採録し、各揮団毎にスケールを付した。
- (4) 遺物実測図・拓影図は、土器については1/3を標準として採録し、それ以外の場合は、個々に表示した。器形が想定できるものは、残存1/4以下でも図上復元した。
- (5) 遺物図版については任意の縮尺とした。
- (6) 遺物実測図・拓影図の土器は、土師器・赤焼土器・及び中近世陶磁器については白抜き、須恵器については黒塗りで表示した。土器内外面の網点は黒色処理を表している。砂目は塗付着、粗いドットの網点は藍鉄鋼を表している。
- (7) 本文中の遺物番号は遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
- (8) 本文中のグリッド番号は北西グリッドを使用し、「○-△G」とのみ表記した。
- (9) 遺物について本文中で取り上げる場合は、「第○図△番」を「○-△」または(△)と略記した。
- (10) 出土遺物観察表中の()内の数値は、図上復元による推定値であり、破片での現存値は省略している。なお、残存率を付記しておいた。
- (11) 観察表中の出土地点欄の「F」は覆土内出土を示し、その後に付く数字は上層からの層位を表している。
- (12) 基本層序および遺構覆土の色調の記載については、1998年版農林水産業農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。
- (13) 樹種同定と骨同定の分析結果については、付編にて言及しているので、本文中での詳細な樹種などの記載は避け、理化学的分析に譲ることとした。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の概要	1
II 立地と環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 遺跡の概観	
1 基本層序	7
2 遺構と遺物の分布	7
IV 第2次調査	
1 検出された遺構	8
2 出土した遺物	16
V 第3次調査	
1 検出された遺構	27
2 出土した遺物	53
VI まとめと考察	
1 調査のまとめ	75
2 古墳時代の土器様相	76
報告書抄録	78
付編	
「志戸田繩遺跡から出土した骨の同定」	
「山形県志戸田繩遺跡出土木製品の樹種調査結果(1)」	
「山形県志戸田繩遺跡出土木製品の樹種調査結果(2)」	

表

表1 第2次調查出土遺物觀察表	26
表2 挖立柱建物跡觀察表	38
表3 第3次調查出土遺物觀察表(1)	72
表4 第3次調查出土遺物觀察表(2)	73
表5 第3次調查出土遺物觀察表(3)	74

挿 図

第2次調査

第1図	遺跡位置図	3
第2図	遺跡概要図	4
第3図	遺構配置図	5
第4図	基本層序	7
第5図	S G 3 河川跡	9
第6図	S G 3 河川跡遺物出土状況	10
第7図	S D 2溝跡	11
第8図	S D 2溝跡遺物出土状況	12
第9図	S K 4・5・10・12	14
第10図	S K 22・23・24・25	15
第11図	遺物実測図(1)	17
第12図	遺物実測図(2)	18
第13図	遺物実測図(3)	19
第14図	遺物実測図(4)	20
第15図	遺物実測図(5)	21
第16図	遺物実測図(6)	22
第17図	遺物実測図(7)	23
第18図	遺物実測図(8)	24
第19図	遺物実測図(9)	25
第3次調査		
第20図	S G 2 河川跡	28
第21図	S G 3 河川跡	29
第22図	S G 3 河川跡東側遺物出土状	30
第23図	S G 3 河川跡西側遺物出土状	31
第24図	S K 329・330土坑	32
第25図	S H 410墳墓	33
第26図	S D 302溝跡	35
第27図	S D 302溝跡東側遺物出土状	36
第28図	S D 302溝跡西側遺物出土状	37
第29図	S B 14掘立柱建物跡	39
第30図	S B 32掘立柱建物跡	40
第31図	S B 81掘立柱建物跡	41

第32図	S B 116掘立柱建物跡	42
第33図	S B 125掘立柱建物跡	
	S A 412柵列跡	43
第34図	S B 170掘立柱建物跡	44
第35図	S B 181掘立柱建物跡	
	S A 411柵列跡	45
第36図	S E 7・8・11・12・59 井戸跡	48
第37図	S E 199・208・209井戸跡 S K 198・336土坑	49
第38図	S D 4溝跡	50
第39図	S D 4溝跡遺物出土状況	51
第40図	S X 195・342性格不明遺構	52
第41図	遺物実測図(1)	56
第42図	遺物実測図(2)	57
第43図	遺物実測図(3)	58
第44図	遺物実測図(4)	59
第45図	遺物実測図(5)	60
第46図	遺物実測図(6)	61
第47図	遺物実測図(7)	62
第48図	遺物実測図(8)	63
第49図	遺物実測図(9)	64
第50図	遺物実測図(10)	65
第51図	遺物実測図(11)	66
第52図	遺物実測図(12)	67
第53図	遺物実測図(13)	68
第54図	遺物実測図(14)	69
第55図	遺物実測図(15)	70
第56図	遺物実測図(16)	71

図 版

卷頭図版 1 第2次調査区遺構検出状況全景	図版15 S D302土層断面ほか
S G 3 河川跡出土遺物	図版16 北側掘立柱建物跡群ほか
卷頭図版 2 北側掘立柱建物跡群	図版17 S B81検出状況ほか
S D302から出土した墨書き器 (底部)『福有南』	図版18 S E11完掘状況ほか
第2次調査	図版19 S D4 a-a' 土層断面ほか
図版 1 調査区設定概観ほか	図版20 S X342ほか
図版 2 S G 3 河川跡T2トレンチ深堀り作業状況ほか	図版21 出土遺物(1)
図版 3 S D2溝跡⑦ベルト断面ほか	図版22 出土遺物(2)
図版 4 S D2溝跡RW11(下駄)出土状況ほか	図版23 出土遺物(3)
図版 5 S G 3 河川跡土師器・木製品出土状況ほか	図版24 出土遺物(4)
図版 6 出土遺物(1)	図版25 出土遺物(5)
図版 7 出土遺物(2)	図版26 出土遺物(6)
図版 8 出土遺物(3)	図版27 出土遺物(7)
図版 9 出土遺物(4)	図版28 出土遺物(8)
図版10 出土遺物(5)	図版29 出土遺物(9)
第3次調査	図版30 出土遺物(10)
図版11 調査区空中写真ほか	図版31 出土遺物(11)
図版12 基本層序Dほか	図版32 出土遺物(12)
図版13 S G 3 器台出土状況ほか	図版33 出土遺物(13)
図版14 S K329土層断面ほか	図版34 出土遺物(14)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

志戸田繩遺跡の発掘調査は、日本道路公団の東北中央自動車道相馬・尾花沢線(上山～東根間)の建設工事に伴って行われた。これにより、山形県教育委員会では、平成10年7月に工事予定区内の遺跡の所在や性格を調べる分布調査を実施した。溝状遺構が検出され、土師器の一括出土地点も認められた。その結果を受けて県埋蔵文化財センターが、記録保存する遺跡内の遺構数や深さなどを調べる予備調査(第1次調査)を行った。古墳時代の河川跡からは土師器片が多く出土し、奈良・平安時代の須恵器・赤焼土器片も数点見られた。また、路線内に設けられたトレンチからは河川跡・井戸跡・溝状遺構が検出された。トレンチ内の遺構検出の状況から遺跡範囲が北側と東側に広がった。

2 調査の概要

今回の発掘調査は、遺跡の南東部が工事区となるため平成10・11年度の2回に分けて行われた。

第2次調査は、北西側側道部分1,150m²の調査を先行して実施した。期間は10月27日から11月27日までの実質22日間である。調査はまず、道路の路線図に基づいて調査区を設定して、次いで遺構・遺物の検出面までの深さを再確認するためのトレンチを入れた。その結果に基づいて重機械を用いて表土除去を行った。その後、調査を効率的に進めるため5m×5mを一区画とするグリッドを道路予定のセンター杭を基準として設定し、基準杭とした。グリッド番号は、東西軸は西から東へ、南北軸は南から北へ、1から順にアラビア数字をあてた。次に、ジョレンで繰り返し表土を削る面整理を行い、周りとの土の違いを良く見ながら遺構を検出して、白線をマーキングした。遺構を埋めている土を観察するために、半分だけ掘ったり、帯状にベルトを設定して、移植籠などで注意深く掘り下げをする遺構精査をした。発見された遺構・遺物については、写真や図面などに記録した。遺物の取り上げは、グリッド単位で行い、遺構内出土の場合は遺構毎に番号を付した。11月26日に関係者のみの説明会を実施した。

第3次調査は、路線内に係る残りの本線・側道部分4,550m²の調査を実施した。期間は4月19日から7月22日までの実質63日間である。グリッドは2次調査の基準杭を踏襲し、調査内容は2次調査と同様に実施した。当初調査面積4,000m²の予定で重機械による表土除去並びにジョレンによる面整理を行ったが、北側から検出された溝状遺構が北に延びるために調査区北側550m²について拡張した。その結果コの字状の区画溝が検出された。また調査区南西部において河川跡が検出され、南側残土置場とした部分を除いて数カ所のトレンチを設定して河川跡の流路確認を行った。その結果、南東部方向へ延びる流路を確認した。調査結果を踏まえて、7月19日に現地説明会を実施して、地元の方々の参加を多く得た。7月22日に現地の調査を終了した。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

本遺跡は、山形市の北西部、馬見ヶ崎川の扇状地前縁部に位置している。東に奥羽脊梁山脈の一部の藏王、龍山、雁戸山の山陵が連なり、馬見ヶ崎川水系が東から西に幾筋にも分かれて流れ、流路延長24kmにも及ぶ。また、本遺跡から3km西に須川が南北に流れ流路沿いに自然堤防が形成されている。本遺跡周辺にも自然堤防状の微高地が見られ、遺跡の多くはこの微高地に立地している。遺跡の標高は、102mを測り、遺跡範囲は東西80m、南北200mにわたる。付近は水田の他、果樹、畑作、花木苗栽培に利用されている。検出された遺構の精査を行うと常時地下水がわき出て、昔から豊富な湧水に恵まれていた地域であることが分かる。「ドッコスイ」と呼ばれる井戸を掘っており、本調査でも最近まで使用された井戸跡が確認されている。昭和36年に実施された土地改良事業によって遺構面が削平されている箇所もあったが、多くは残存して、主に古墳時代前期の土師器や、奈良・平安時代の須恵器・赤焼土器、中世の陶磁器や木製品が出土した。また、地山層が灰黄褐色砂質シルトでややグライ化している。

2 歴史的環境

周辺の自然堤防上に多くの遺跡が立地しており、発掘調査の成果が年々集積している。

弥生時代の集落・墓域では、本遺跡の北東側2.5km離れて河原田遺跡があり、弥生時代の住居跡や6基の墓坑などが検出された。土師棺壙が1基、木棺墓もしくは木柳墓が5基確認され、壺や浅鉢、高环などがまとめて出土した。

北東側2.6kmから北北東側4kmまで今塚遺跡や服部遺跡、藤治屋敷遺跡、馬洗場遺跡が位置しており、古墳時代前期の良好な遺構・遺物が確認されている。今塚遺跡では、塩釜式の土師器が出土している竪穴住居跡30棟が検出された。藤治屋敷遺跡では、S G213から古墳時代前期の土師器と共に木製品が多数出土し、二又鋤などの農耕具が出土している。馬洗場B遺跡では、日本海側最北の内行花文鏡(破鏡)が出土しており、その他4世紀前半代の土師器が出土している。また、東側2km離れて国指定史跡嶋遺跡があり古墳時代後期の倉庫跡や住居跡などが確認され農耕遺跡として知られている。本遺跡西側・南側には、古墳時代後期の去手路古墳群や栗園式の土器が出土している塚田遺跡が位置する。当時周辺では、古墳時代全体を通じて集落が点在していたと思われる。

奈良・平安時代では、前述した今塚遺跡で本遺跡と同時期の9世紀代の土器が出土する遺構が確認されている。溝跡から「『口為』仁寿参年六月三日」と表記された木簡が出土している。仁寿3年は西暦853年で土器の編年代と一致する。

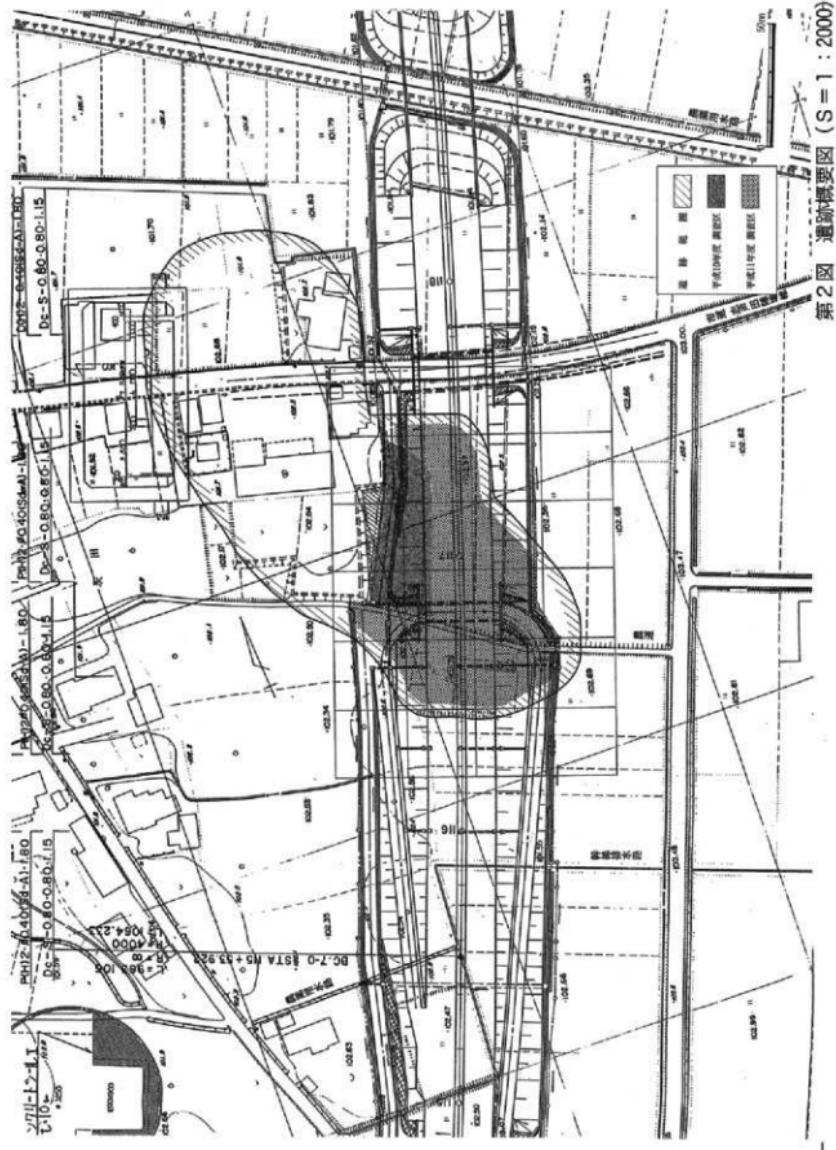
また、本遺跡周辺には椹沢楯、飯塚楯、椹沢楯ノ内遺跡などの中世城館跡がある。中近世を通して交通の要所で周辺に「宿」の付く地名がある。また、本調査で確認された区画溝などの痕跡を昭和初期の字限図で確認したが見あたらなかった。

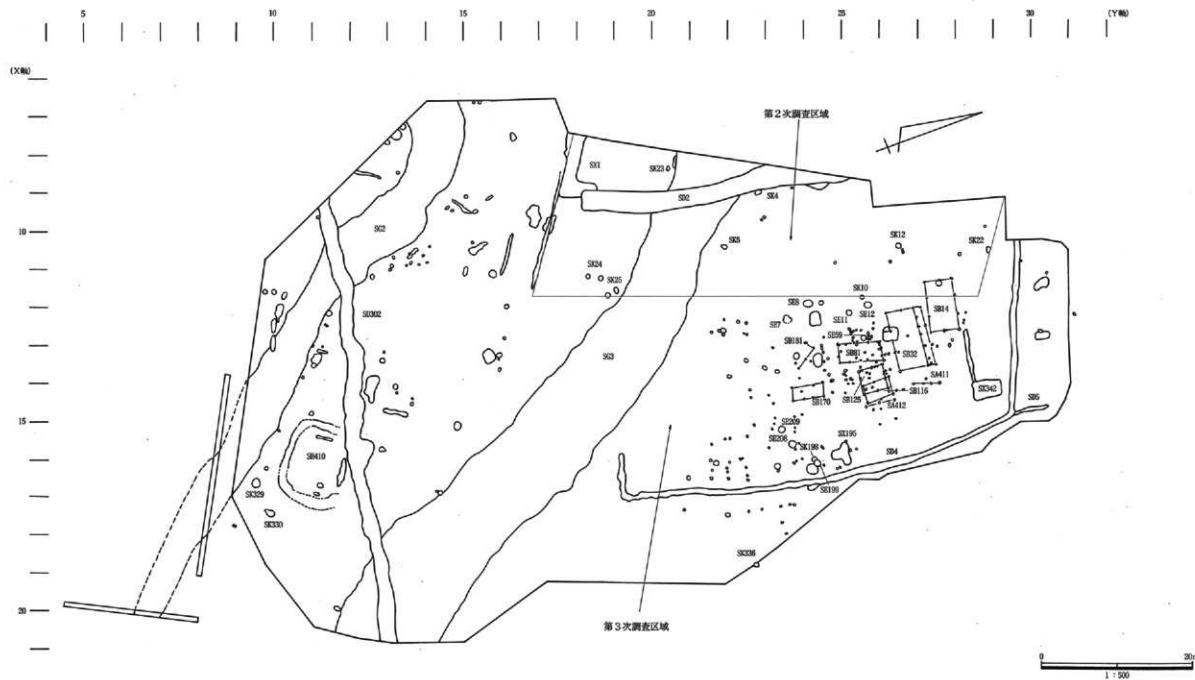


- 1 志戸田廻遺跡
- 2 塚田遺跡
- 3 志戸田遺跡
- 4 陣場遺跡
- 5 江俣遺跡
- 6 横沢橋ノ内遺跡
- 7 去手路古墳群
- 8 中野館遺跡
- 9 腹部遺跡
- 10 見輪遺跡
- 11 今堀遺跡
- 12 河原田遺跡
- 13 鳥遺跡 (国指定史跡)
- 14 梅野木前2遺跡

第1図 遺跡位置図 (国土地理院発行2万5千分の1地形図「山形北部」を使用)

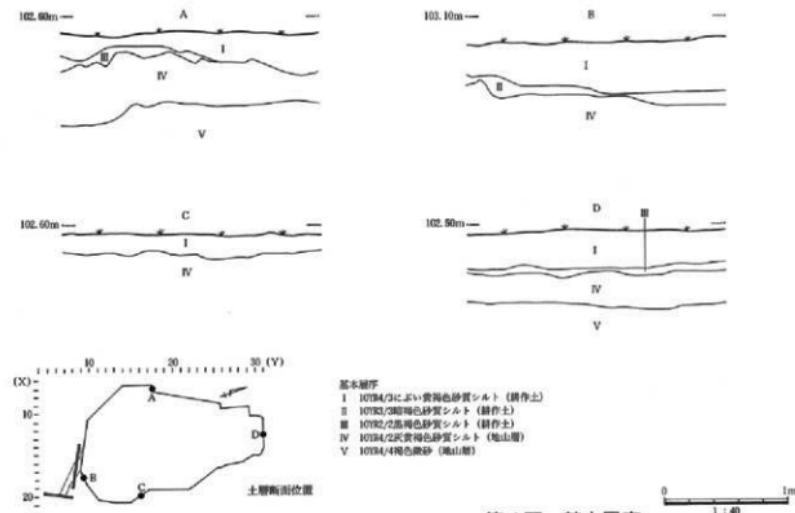
第2図 遺跡概要図 (S = 1 : 2000)





第3図 遺構配置図

III 遺跡の概観



第4図 基本層序

1 基本層序

基本層序は、1層目がにぶい黄褐色砂質シルトの耕作土、2層目が暗褐色砂質シルトもしくは黒褐色砂質シルトの耕作土である。3層目が灰黃褐色砂質シルトのややグライ化した地山層で、その下層に褐色微砂が広がる。表土下層に黒褐色の遺物包含層が入る所もある。古墳時代の土師器が出土する。

2 遺構と遺物の分布

調査で検出された主な遺構は、掘立柱建物跡7棟、柵列跡2基、井戸跡8基、河川跡2条、溝状遺構29条、墳墓1基、土坑30基、その他多数の性格不明遺構やピットが検出されている。これらの遺構は、古墳時代・平安時代・中世に大別される。古墳時代は、南側に河川跡が検出され、塩釜式段階の土師器が多数出土している。特に中央部を東西に貫流するSG3において、やや西側に偏って土器出土量が多い。今回の調査では路線内の調査に限られているが、北西方向に遺跡範囲が広がるものと思われ、集落が西側に展開することが予想される。

平安時代の遺構は、SD302のみである。オリーブ褐色微砂の覆土中に9世紀代の須恵器・赤焼土器が出土している。「王」と墨書きされた須恵器壺が出土している。なお、今塚遺跡においても4点の「王」と書かれた須恵器が出土している。

中世は、本遺跡の大半を占めており、掘立柱建物跡を中心として、コの字に区画する溝を巡らした屋敷跡と推測される。また区画溝から多数の塔婆などの木製品と12世紀後半代の内面に劃花文のある青磁碗破片が出土している。その他、屋敷に付設された深さ1m内外の井戸跡が検出された。

IV 第2次調査

1 検出された遺構

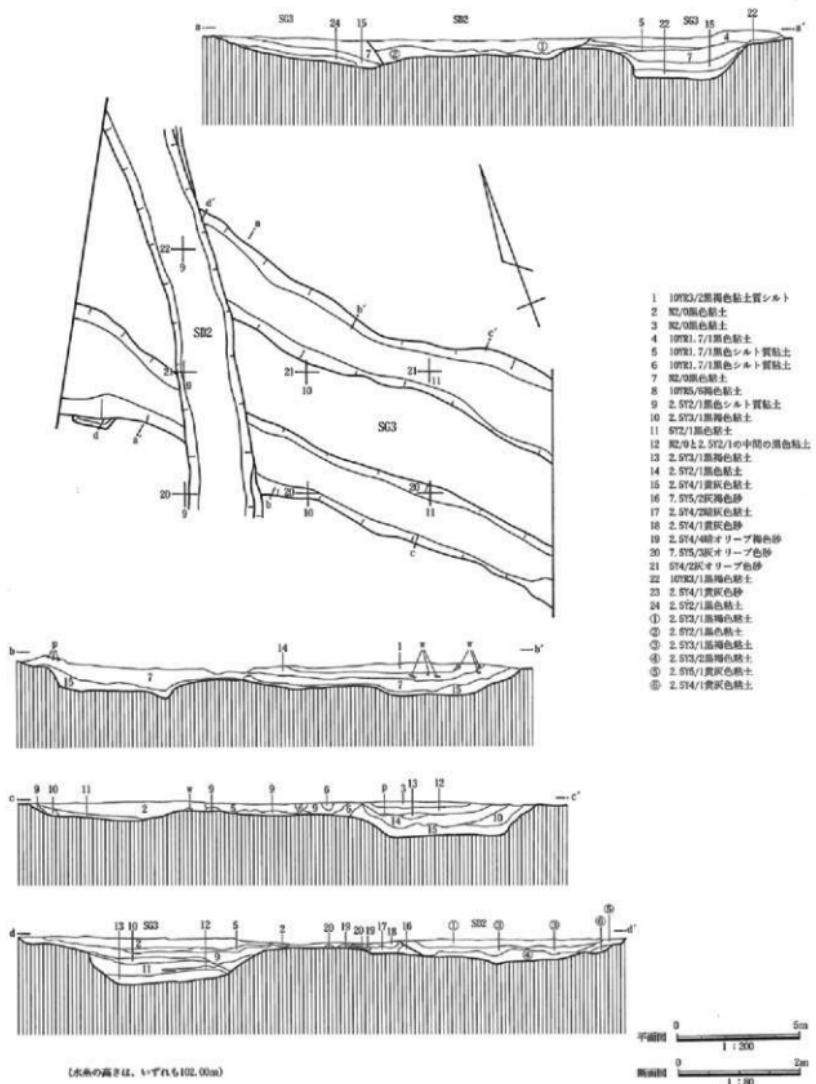
S G 3 (遺構：第5・6図、遺物：11-1～15-38)

12-21～9-23Gで検出された。西側をS D 2から南北に切られ、上層はは場整備のために削平を受けている。調査区南側で検出され、東西に貫流する河川跡である。幅7～9m、現存長21mで深さ60cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、中央部が盛り上がり中州状になっている。底面直上に植物の腐植物と河床礫が多量に確認された。覆土上層は黒色ないし黒褐色土で粘性が強い。中層に黄色系の砂層を挟んでいる。下層は灰白色の砂粒の混入している黒褐色粘土が堆積している。覆土中にも腐植性の未分解有機物が混じっている。

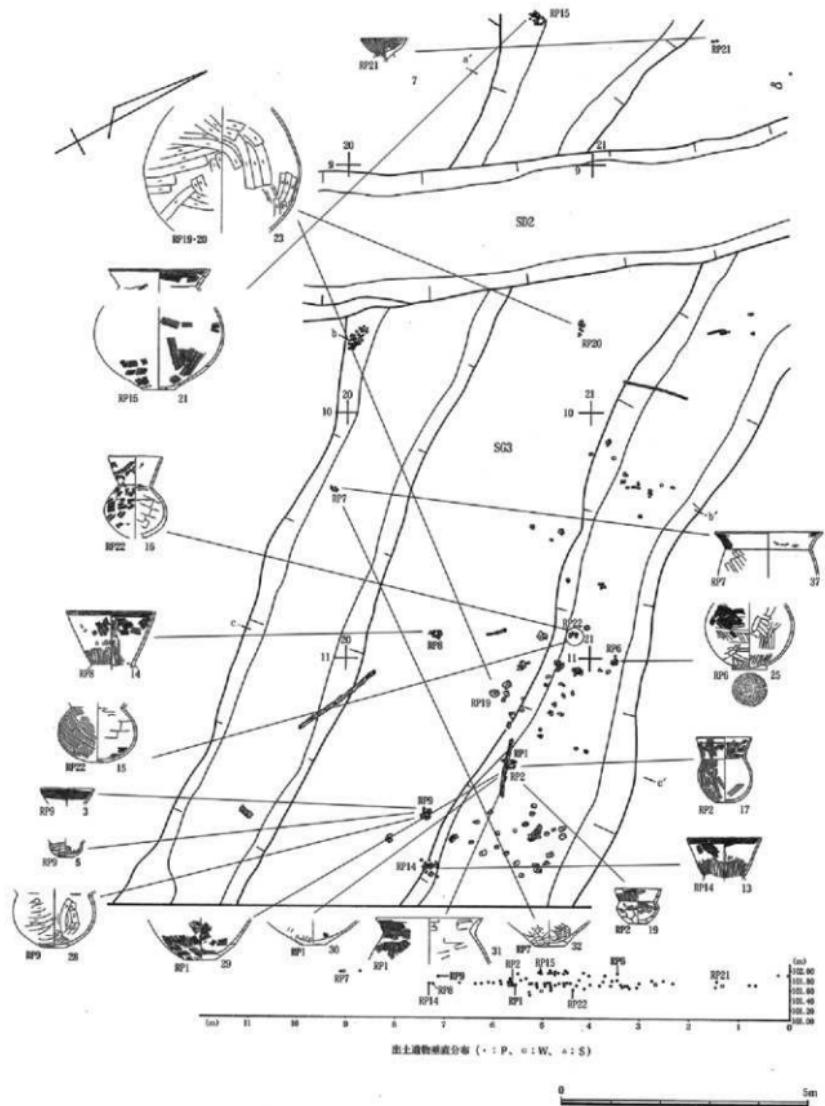
遺物の大半が古墳時代の古式土師器で、登録遺物は11点である。古式土師器が662点、須恵器7点、赤焼土器3点、近世陶器5点、棒状や部材と見られる不明木製品5点が出土している。遺物は1・2層目で多く出土され、古式土師器の器種は壺・器台・壺・甕がある。特に器台が4点出土して、外面ミガキ調整を行い、赤彩を施している。口唇部が外反し(11-7)脚部に透孔(11-9・10)を穿っている。また、小型または中型の壺があり、体部中位から外反する器形で口頸部が長いもの(11-14)や体部上位から屈曲するもの(12-17)がある。大型で口縁部が複合状になるもの(13-24)もある。甕の大方の器形は体部が球胴形で胴張りのもので、やや体部が膨らむものもある。土器様式の層位間の違いが余り認められず、時期差の無い廃棄と考えられる。土器様相は、器台の円孔の有無や小型化になる点や壺の体部が球胴形から扁平に変化する点から辻編年のIII-3～4(辻 1995)に該当すると思われる。なお、1層目の黒色粘土層より上層に黄色褐色微砂が残存する所があり、近世(18世紀後半)の国産陶磁器小片が確認されている。3次調査でS G 3上層の調査で出土した近世の農具(エポリ)との関連で、当地区の近世灌漑地業に係わるものと思われる。

S D 2 (遺構：第11・12図、遺物：15-39～18-54)

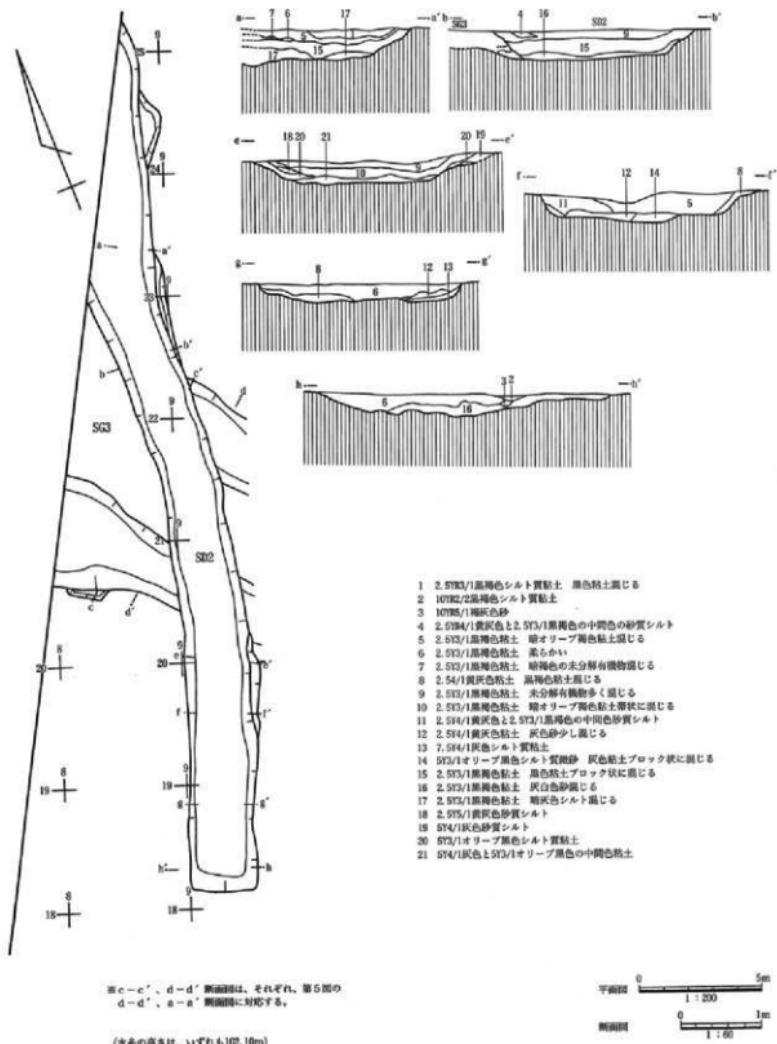
9-24～10-19Gで検出された。調査区の設定で北西部が未調査である。南側でS G 3を切る。南北に直線的に延びる溝跡である。幅2.2～3.3mで、現存長で36m、深さ40cmを測る。壁の立ち上がりがやや緩やかで、底面はほぼ平坦である。覆土上層は、黒褐色粘土ないしシルト質粘土で泥炭層である。下層は黄灰色ないし灰色粘土である。主体となる遺物は下駄などの木製品・刀子のような金属製品である。流れ込みと思われる磨石1点や古式土師器30点、須恵器2点の他、石鉢1点や漆器1点、下駄7点、刀子1点が出土している。遺構が北西部に延びていることから、3次調査で検出されたS D 4と同一遺構の可能性がある。漆器は漆器皿(16-46)1点のみで、内外面に黒色漆が塗られている。出土した下駄は、すべて差歛下駄である。使用した際の指圧痕が、明確に残っている。(16-47)齒部、(16-48)台後部のみの資料に炭化している部位があり、若干の被熱を認める。先端部が欠損している刀子と組になるような刀鞘が3次調査S D 4で出土している。



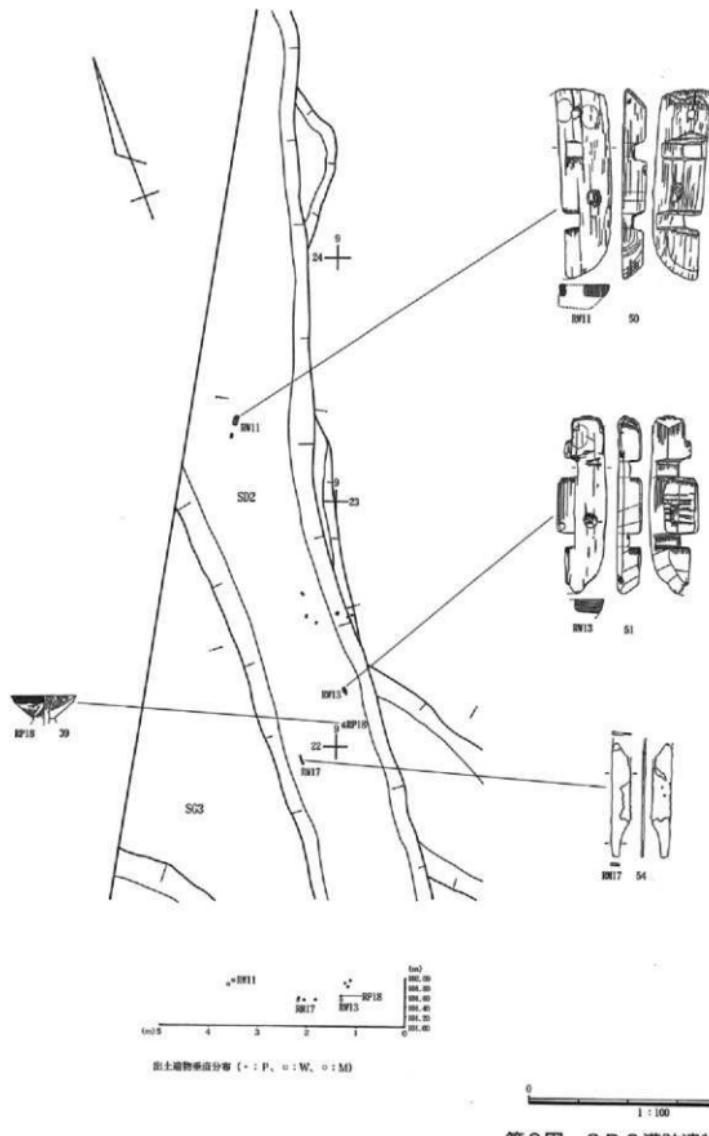
第5図 SG3河川跡



第6図 SG3河川跡遺物出土状況



第7図 SD2溝跡



第8図 SD 2 溝跡遺物出土状況

SK 4(遺構: 第9図)

10—23Gで検出された。平面形はやや東側に張り出す橢円形で、長径102cmで短径58cm、深さ7cmと浅い掘り込みで底面がやや窪む。覆土は黒色ないし黒褐色粘土である。出土遺物は古式土師器小破片14点である。

SK 5(遺構: 第9図、遺物: 19—55~57)

11—22Gで検出された。平面形は不整形である。長径81cmで短径67cm、深さ38cmを測る。断面形が下層でやや膨らむフラスコ状を呈する。覆土上層は暗褐色粘土質シルトで下層は黒色粘土質シルトである。出土遺物は、古式土師器16点である。上層包含層で古式土師器が散乱している。

SK 10(遺構: 第9図)

12—26Gで検出された。平面形はほぼ円形である。長径60cmで短径50cm、深さ25cmを測る。断面形はレンズ状で、覆土は黒色粘土で黒褐色砂質土がブロック状に混じる。

SK 12(遺構: 第9図)

11—27Gで検出された。平面形はほぼ円形である。長径82cmで短径75cm、深さ20cmを測る。擂鉢状に掘り込まれ、立ち上がりがやや緩やかである。覆土上層は、黒色粘土を基調とし、下層は黒褐色土を基調とする。

SK 22(遺構: 第10図)

11—29Gで検出された。平面形は、西側がやや張り出す不整方形である。長径88cmで短径40cm、深さ8cmを測る。浅い掘り込みで、底面で若干の起伏がある。覆土は、単層で黒色粘土を基調とする。

SK 23(遺構: 第10図)

9—21Gで検出された。平面形は、南東側に張り出した不整方形を呈する。長径53cmで短径42cm、深さ14cmを測る。南東側が緩やかに立ち上がり、やや北西側に底面が窪む。覆土は、黒色粘土を基調とする。

SK 24(遺構: 第10図)

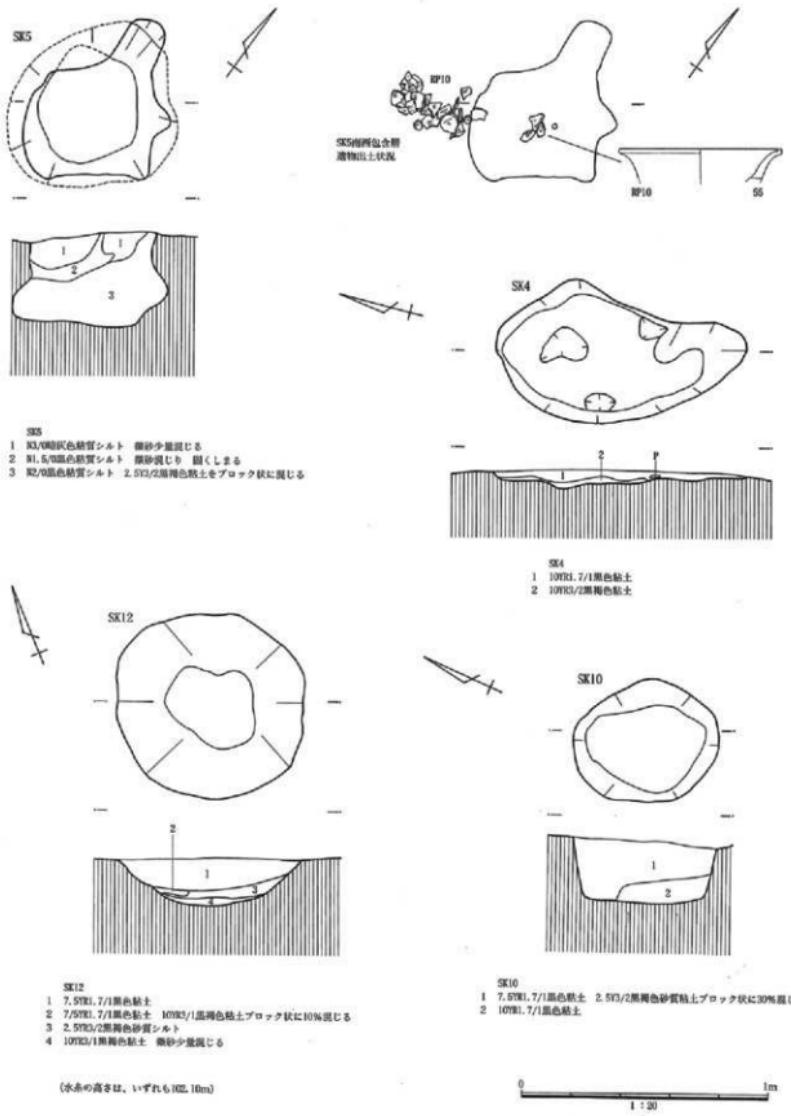
12—19Gで検出された。平面形はほぼ円形である。長径72cmで短径52cm、深さ18cmを測る。壁の立ち上がりが緩やかで、底面に起伏がある。覆土は、黒褐色砂質粘土を基調とする。

SK 25(遺構: 第10図)

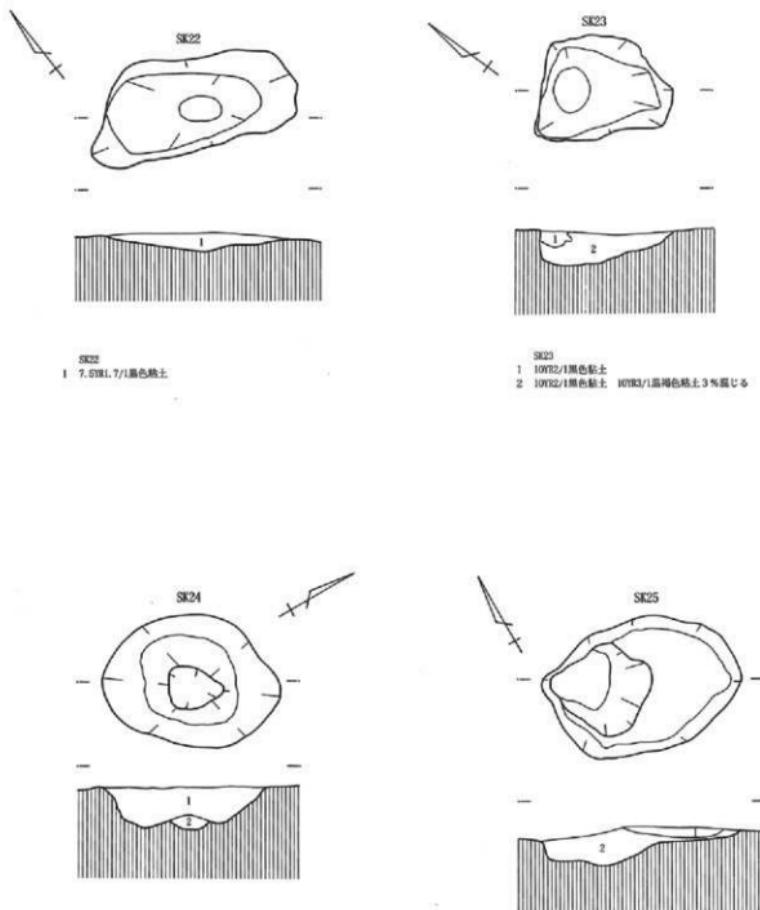
12—20Gで検出された。平面形は、東西にやや長い橢円形である。長径82cmで短径55cm、深さ14cmを測る。壁の立ち上がりが緩やかで、西側底面に窪みがある。覆土は、上層が黒色粘土で、下層が黒褐色砂質シルトを基調とする。

なお、SK 17については、3次調査で全容が判明したSB 14に関連する施設と思われ、遺物以外は3次調査の中で言及した。また、遺物も上層からで少なく、磨石や多条の擂鉢で積極的に土坑の時期決定に係るとは思えず、掘立柱建物跡との関連は、若干の検討を要する。

第2次調査



第9図 SK 4・5・10・12土坑



(水深の高さは、いずれも102.10m)

0 1m
1 : 20

第10図 SK22・23・24・25土坑

2 出土した遺物

ここでは、2次調査で出土した主な遺物について概略していく。なお、詳細な点については、「第2次調査出土遺物観察表」に記載している。

S G 3 (遺物 : 11-1 ~ 15-38)

古式土師器壺については、体部上位で口縁部が屈曲するもの(11-1)、やや膨らむ体部に短い口縁部が付くもの(11-2)、手づくねで体部が直線的に延びる器形(11-4)や内湾する器形(11-5)がある。なお、外反する口縁部のみのもの(11-3)もある。器台は、受部のみで口唇部が直線的に立つもの(11-7)、3方に透孔があり、丁寧なミガキ調整があるもの(11-9・10)がある。高壺は、壺部のみのもので、体部下位で弱く屈曲する器形がある(11-6)。壺は、口頸部が長く、球形の体部が付く器形(11-13・14・15・16)、中型で口頸部が短く、縦長な体部が付く器形(11-11・12・17)がある。また、大型でやや外反する複合口縁をもつ器形(13-24)、大型で縦長な体部をもつもの(13-23)がある。また、小型の半球形に近い体部をもち、口縁部がやや外反する鉢(12-19)、頸部がやや狭く、なで肩の器形(12-20)がある。壺は、口縁部が外傾し、球胴形の体部がつくもの(12-21)、口縁部がやや直立し、体部中位が胴張りのもの(12-18・14-34・35)、口縁部が外反し、なで肩のもの(12-22・15-37)、体部上半に最大径のあるもの(13-28)がある。他にやや内湾する体部をもつ須恵器壺(15-38)、直立する体部をもつ赤焼土器鉢(15-41)がある。

S D 2 (遺物 : 15-39 ~ 18-54)

古式土師器の器台受部で口唇部が鋭いもの(15-39)、須恵器で壺の口唇部が上方につまみ出するもの(15-40)や体部で外面タタキ・内面アテ痕調整を施すもの(15-42)、やや扁平な磨石(15-43)がある。以上は出土状況から流れ込みと思われる。2面に使用痕がありノミ状工具の研磨痕がある砥石(15-44)や直行する体部をもつ石鉢(15-45)がある。漆器は成形がロクロ挽きで黒色漆で全面を塗っている漆器皿(16-46)一点のみである。(16-47~18-53)は差歎下駄である。歎部(16-47)、台後部(16-48)の一部に被熱した箇所がある。

その他歎部が欠損しているが、ほぼ同じ形態をしている。すべて露卵である。平面形態は前台部が方形で台後部がやや尖った半円形を呈する。円形の緒穴を斜めまたは直線的に穿たれている(16-49~18-53)。先端部の欠損した刀子の刀身(18-54)がある。

S K 5 (遺物 : 19-55~57)

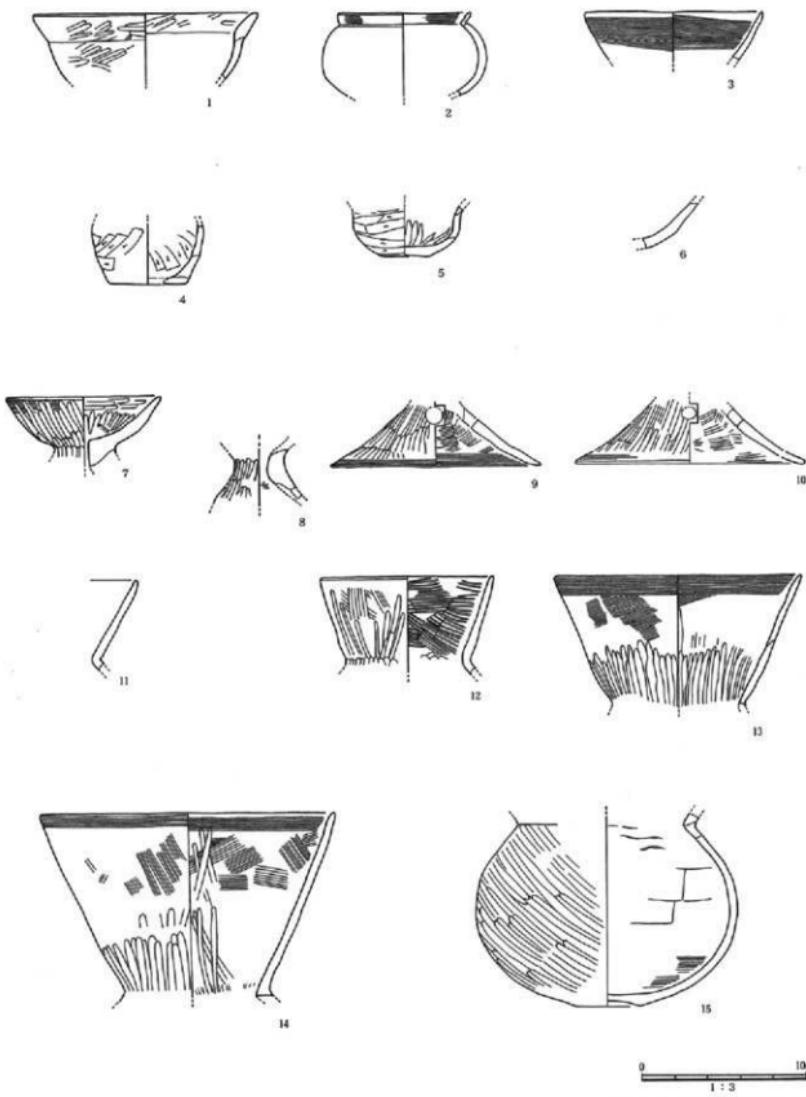
古式土師器壺で口縁部が外反するもの(19-55)、壺で短い口縁部がやや直立するもの(19-55)や口縁部が直立した後外反するもの(19-57)がある。

S K 17 (遺物 : 19-58・59)

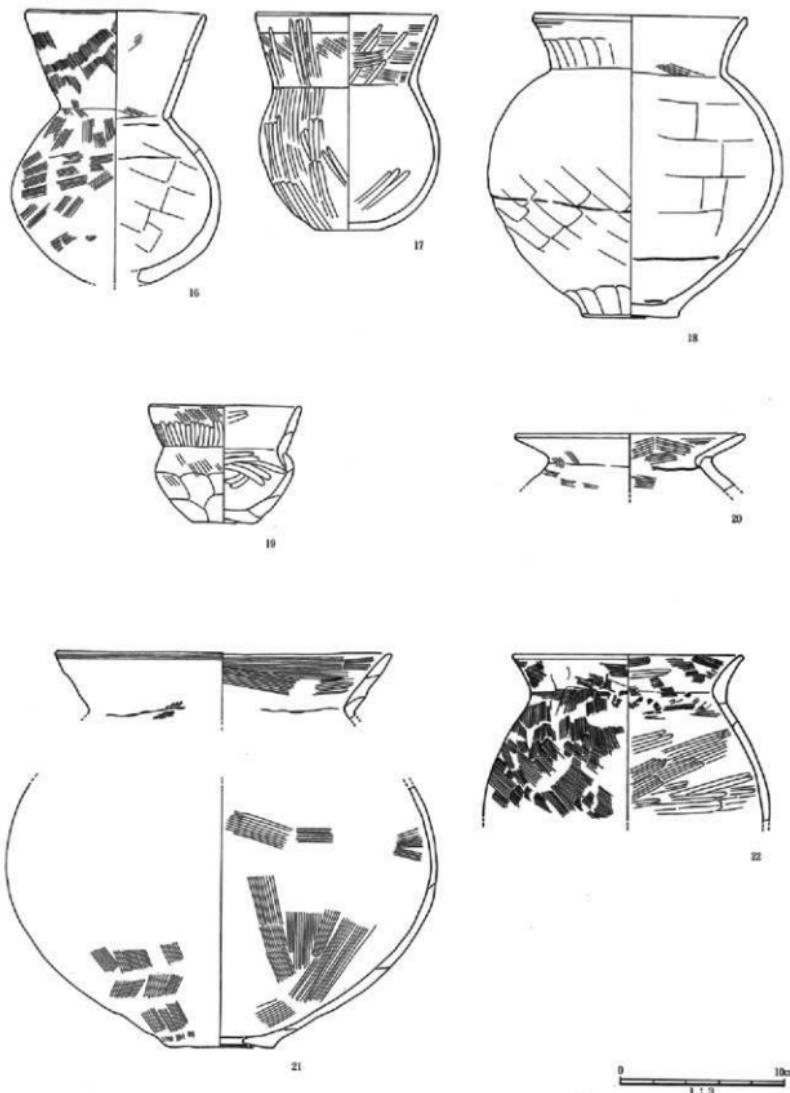
細かい卸目を刻んでいる擂鉢底部から体部までの破片(19-58)や流れ込みで磨石(19-59)が出土している。

グリッド (遺物 : 19-60~65)

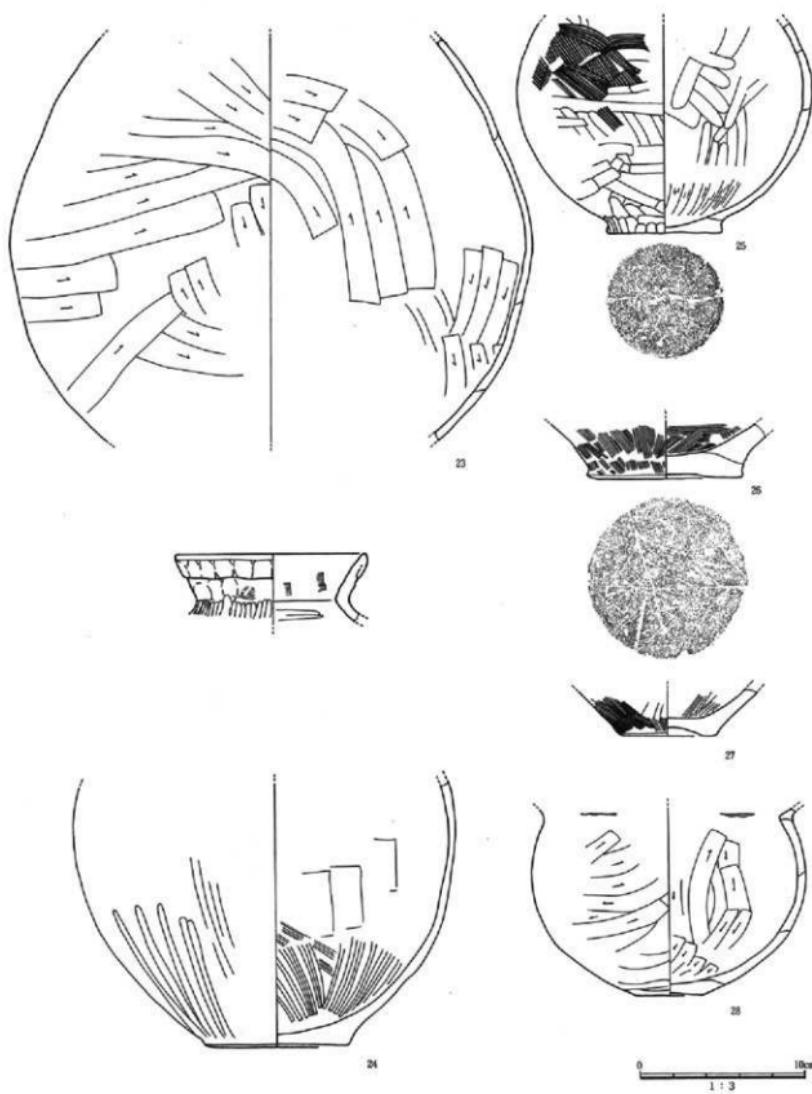
土師器は、体部上位で屈曲する壺(19-60)、透孔が認められない器台脚部(19-62)、頸部に突帯を巡らしている壺(19-63)、外反する口縁部をもつ壺(19-64・65)がある。



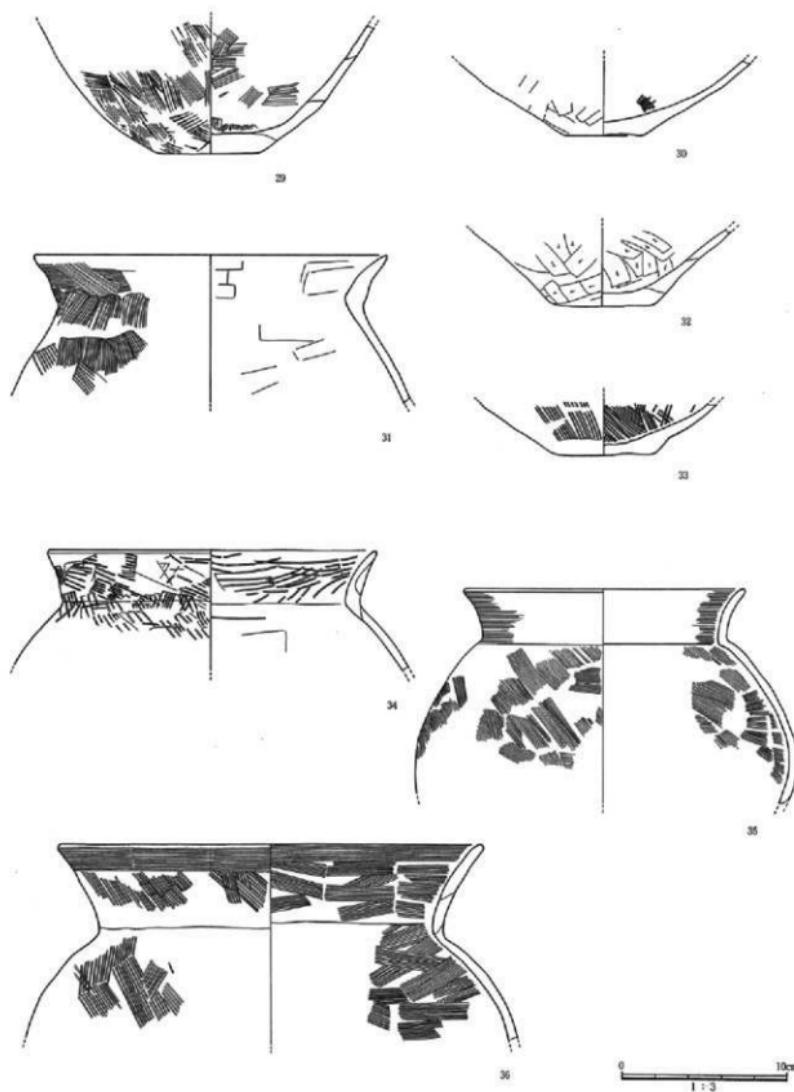
第11図 遺物実測図 (1)



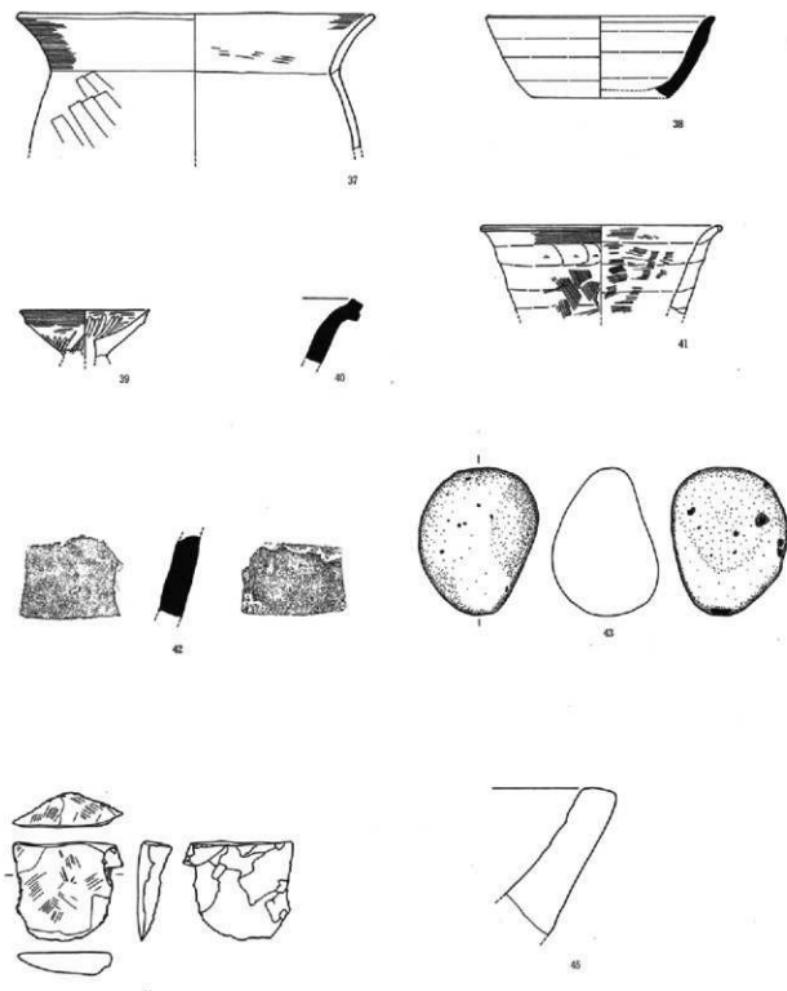
第12図 遺物実測図（2）



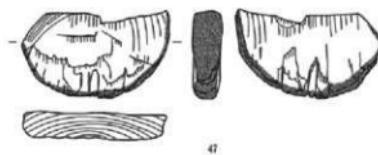
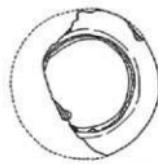
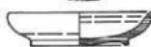
第13図 遺物実測図（3）



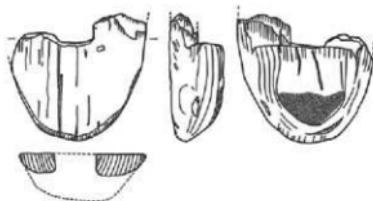
第14図 遺物実測図 (4)



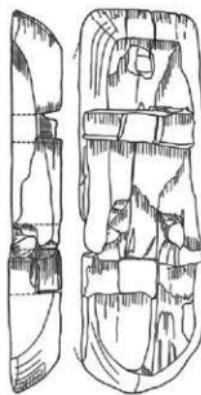
第15図 遺物実測図 (5)



47



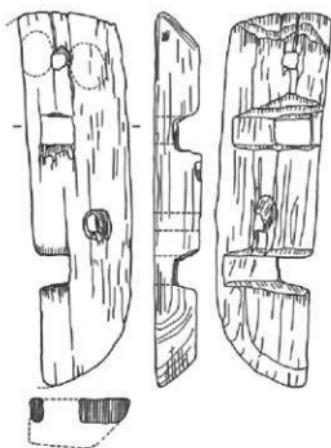
48



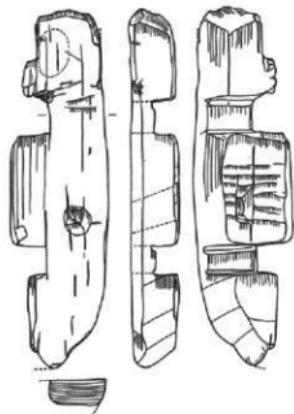
49

6
1 : 3
10cm

第16図 遺物実測図 (6)



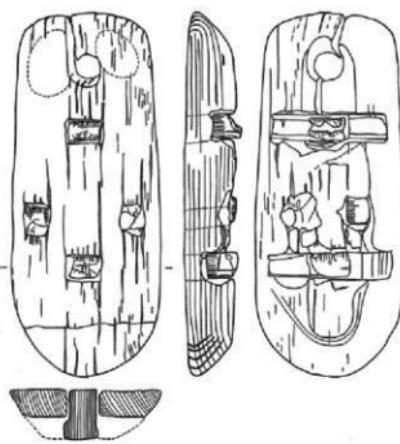
50



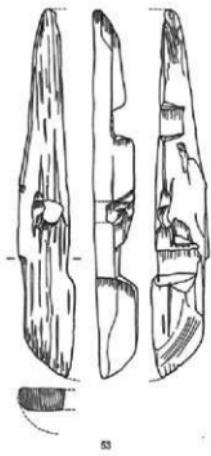
51

0 10cm
1 : 3

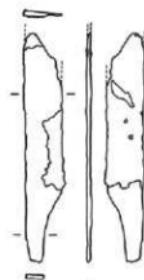
第17図 遺物実測図 (7)



52



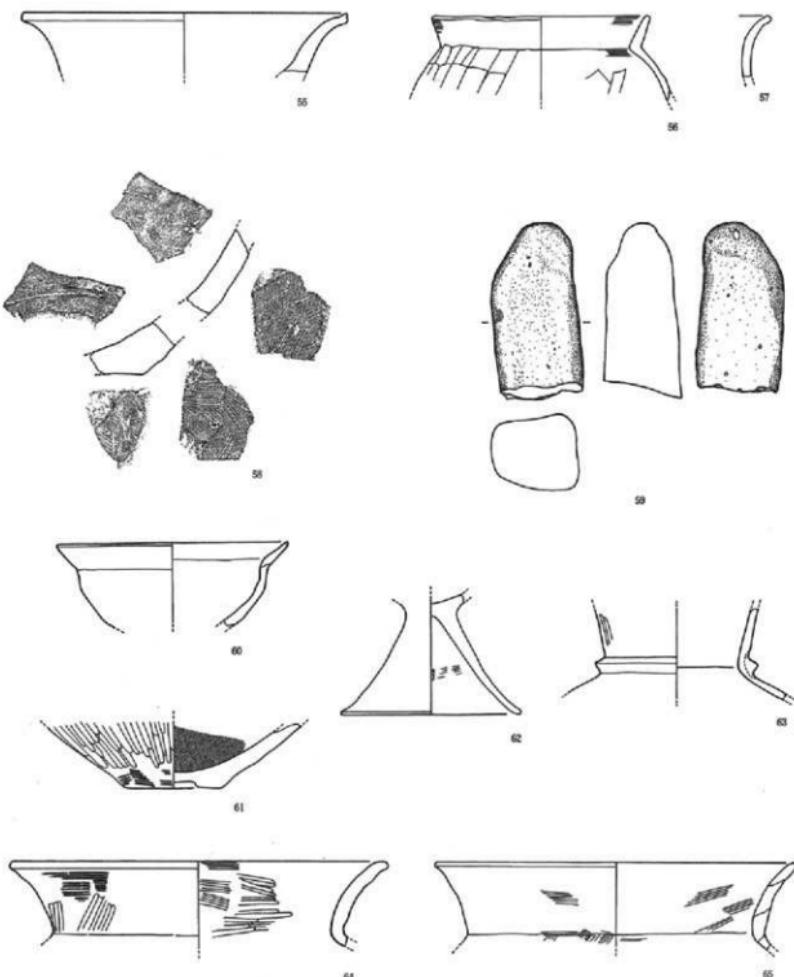
55



58

0 1cm 1:3

第18図 遺物実測図 (8)



第19図 遺物実測図 (9)

第2次調査

表-1 第2次調査出土遺物観察表

測量番号	遺物種別	種 別	器 種	計 測 値 (a/a)				部 位	調 整 技 法		出土地点	登録番号	残 存	備 考	
				口径	底径	高さ	断面		外 面	内 面					
1	土 壁 帽	环	(130)			5		平底	ハラミガキ	ハラミガキ	SG 3 F 1	1/4以下	赤彩、輝付有、粗砂混		
2	土 壁 帽	环	(80)			5		平底	ナデ	ナデ	SG 3 F 2	1/4	赤彩、粗砂混		
3	土 壁 帽	环	(105)			4		平底	ナデ	ナデ	SG 3 F 2	1/4以下	粗砂混		
4	土 壁 帽	环		48	5			ヘラケズリ	ヘラケズリ	SG 3 F 1	1/3	赤彩、織密			
5	土 壁 帽	环		30	4			平底	ヘラケズリ	ヘラミガキ	SG 3 F 2	1/4以下	手すくね、粗砂混		
6	土 壁 帽	高环			6			平底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	SG 3 F 2~3	1/4以下	織密		
7	土 壁 帽	舞台	(54)		7			ナガヨウル-1.0G	ナガヨウル-1.0G	SG 3 F 2	1/3	赤彩、織密			
8	土 壁 帽	舞台			5			平底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	SG 3 F 2	1/4以下	赤彩、粗砂混		
9	土 壁 帽	舞台	(128)		6			ナデ-ミガキ	ナデ-ミガキ	SG 3 F 3	1/4以下	赤彩、粗砂混			
10	土 壁 帽	舞台	(140)		5			ナデ-ミガキ	ナデ-ミガキ	SG 3 F 3	1/4	赤彩、粗砂混			
11	土 壁 帽	直			5			ハラヨウル-1.0G	ハラヨウル-1.0G	SG 3 F 1	1/4以下	粗砂混			
12	土 壁 帽	直	(160)		4			ハラヨウル-1.0G	ハラヨウル-1.0G	SG 3 F 3	1/4以下	赤彩、粗砂混			
13	土 壁 帽	直	(150)		4			ナデ-ミガキ	ナデ-ミガキ	SG 3 F 2	1/4以下	赤彩、粗砂混			
14	土 壁 帽	直	180		5			ナガヨウル-1.0G	ナガヨウル-1.0G	SG 3 F 2	1/2	赤彩、粗砂混			
15	土 壁 帽	直		40	6			ハラミガキ	ハラミガキ	SG 3 F 2	1/3	赤彩、織密			
16	土 壁 帽	直	110		5			丸窓型	丸窓型	SG 3 F 1	1/4以下	赤彩、織密			
17	土 壁 帽	直	110	40	132	6		ナガヨウル-1.0G	ナガヨウル-1.0G	SG 3 F 1	1/4以下	赤彩、織密			
18	土 壁 帽	直	(116)	59	183	7		平底	ナガヨウル-1.0G	ナガヨウル-1.0G	SG 3 F 2	2/3	粗砂混		
19	土 壁 帽	降	93	38	71	6		平底	ナガヨウル-1.0G	ナガヨウル-1.0G	SG 3 F 1	1/4以下	赤彩、織密		
20	土 壁 帽	直	(180)		7			ハケ目	ハケ目	SG 3 F 2	1/4以下	粗砂混			
21	土 壁 帽	直	(204)	(68)	(240)	5		平底	ハケ目	ハケ目	SG 3 F 2	1/2	粗砂混		
22	土 壁 帽	直	(140)		5			ナデ-ミガキ	ナデ-ミガキ	SG 3 F 2	1/4以下	粗砂混			
23	土 壁 帽	直			6			ナガヨウル-1.0G	ナガヨウル-1.0G	SG 3 F 1~2	1/4~3	外表面化物村有、粗砂混			
24	土 壁 帽	直	118	86	(258)	7		平底	ナガヨウル-1.0G	ナガヨウル-1.0G	SG 3 F 2	1/4	粗砂混		
25	土 壁 帽	直		70	6			平底	ナガヨウル-1.0G	ナガヨウル-1.0G	SG 3 F 1	1/4以下	粗砂混		
26	土 壁 帽	直		95	12			平底	ハケ目	ハケ目	SG 3 F 2	1/4以下	粗砂混		
27	土 壁 帽	直		56	7			平底	ハケ目	ハケ目	SG 3 F 2	1/4以下	粗砂混		
28	土 壁 帽	直		40	6			平底	ヘラケズリ	ヘラケズリ	SG 3 F 2	1/4以下	粗砂混		
29	土 壁 帽	直		63	6			平底	ハケ目	ハケ目	SG 3 F 1~2	1/4以下	粗砂混		
30	土 壁 帽	直		48	7			平底	ヘラナダ	ヘラナダ	SG 3 F 1~2	1/4以下	保付有、粗砂混		
31	土 壁 帽	直	(114)		5			ハケ目	ナデ	ナデ	SG 3 F 1	1/4以下	粗砂混		
32	土 壁 帽	直	(60)		6			平底	ヘラケズリ	ヘラケズリ	SG 3 F 1	1/4以下	粗砂混		
33	土 壁 帽	直		60	6			平底	ハケ目	ハケ目	SG 3 F 2	1/4以下	粗砂混		
34	土 壁 帽	直	(202)		5			平底	ハケ目	ナデ	SG 3 F 2	1/4以下	粗砂混		
35	土 壁 帽	直	(170)		6			平底	ハケ目	ナデ	SG 3 F 2~3	1/4以下	保付有、粗砂混		
36	土 壁 帽	直	(260)		6			ハケ目	ナデ	ハケ目	SG 3 F 2	1/3	粗砂混		
37	土 壁 帽	直	(220)		5			ナデ	ナデ	ナデ	SG 3 F 1	1/4以下	粗砂混		
38	須 夏 帽	环	(140)	(82)	50	8		ロクロナデ	ロクロナデ	SG 3 F 2	1/4	粗砂混			
39	土 壁 帽	舞台	(78)		5			ナガヨウル-1.0G	ナガヨウル-1.0G	SD 2 F 3	1/4以下	赤彩、織密			
40	須 夏 帽	直		9				ロクロナデ	ロクロナデ	SD 2 F 2	1/4以下	粗砂混			
41	土 壁 帽	许	(146)		9			ハラヨウル-1.0G	ハラヨウル-1.0G	SG 3 F 3	1/4以下	粗砂混			
42	須 夏 帽	直		15				タクキ目	タクキ目	SD 2 F 3	1/4以下	粗砂混			
43	石 製 品	磨 石	共90	短70	厚64						SD 2 F 1	1/4以下	打抜穴數孔有り		
44	石 製 品	磨 石	共65	短99	厚20						SD 2		欠損有り	2面使用形、とじ状工具調査	
45	石 製 品	石 砧	長90	短54	厚36						SD 2		欠損有り	工具痕若干残る	
46	木 製 品	漆器皿	共68	幅66	高20	厚5	高台村	ロクロ成形	ロクロ虎形	SD 2	2/3		外側黒色漆塗り		
47	木 製 品	下肢	共50	幅87		厚16					SD 2			骨部丸形	
48	木 製 品	下肢	共75	幅80		厚29					SD 2			骨部丸形	
49	木 製 品	下肢	共231	幅77		厚29					SD 2			骨部丸形	
50	木 製 品	下肢	共227	幅61		厚26					SD 2 F 1	1/11		欠損有り	
51	木 製 品	下肢	共216	幅60		厚29					SD 2 F 1	1/11		欠損有り	
52	木 製 品	下肢	共223	幅61		厚32					SD 2			骨部欠損	
53	木 製 品	下肢	共223	幅61		厚25					SD 2			欠損有り	
54	金屬製品	刀子	共140	幅77		厚1.5					SD 2 Y	1/17	先端欠損	調査有り	
55	土 壁 帽	直	(200)		9			ナデ	ナデ	SK 5	BB10	1/4以下	粗砂混		
56	土 壁 帽	直	(130)		4			ナデ	ナデ	SK 5 F 2	1/4以下		外表面多量に保付有、粗砂混		
57	土 壁 帽	直			5			ナデ	ナデ	SK 5 F 2	1/4以下		粗砂混		
58	中世御器	漆鉢			15			ハケ目	跡目	SK 17 F 2	1/4以下		粗砂混		
59	石 製 品	磨石	長106	幅52		厚42					SK 17 F 2			欠損有り	
60	土 壁 帽	直	(154)		4			ヘラミガキ	ヘラミガキ	10~12G	1/4		赤彩、粗砂混		
61	土 壁 帽	直		60	9			ナガヨウル-1.0G	ナガヨウル-1.0G	9~22G	1/4以下		内面保付有		
62	土 壁 帽	舞台	(120)		6			ヘラミガキ	ヘラミガキ	10~11~20G	1/4以下		赤彩、織密		
63	土 壁 帽	直			6			ナデ	ナデ	10~11~20G	1/4以下		粗砂混		
64	土 壁 帽	直	(200)		9			ナガヨウル-1.0G	ナガヨウル-1.0G	10~11~20G	1/4以下		粗砂混		
65	土 壁 帽	直	(220)		9			ハケ目	ナデ	9~22G	1/4以下		粗砂混		

V 第3次調査

1 検出された遺構

古墳時代の遺構

S G 2 (遺構：第20図、遺物：46—38～45)

7—13～20—7Gで検出された。西側でS D302から切られ、調査区の設定で東西流路については不明。幅3.6～7.5mで現存長は80m、深さ105cmである。河川南西部についてはトレンチによる範囲確認のみとした。壁途中に段のある箇所もあるが、やや垂直な立ち上がりである。覆土上層は黒色粘土、下層はオリーブ黒色粘土を基調とする。遺物は、古式土師器120点、土製品1点、上層から須恵器2点、白磁碗1点や染付皿1点、近世磁器1点が出土している。遺物は覆土上層から出土し、河床付近からの出土がなかった。

S G 3 (遺構：第21図～23図、遺物：41—1～45—37)

13—21～19—12Gで検出された。第2次調査で検出された箇所の東側にあたる。調査区中央を東西に貫流する。幅9～14mで現存長60m、深さ90cmを測る。壁の立ち上がりや覆土の状況は2次調査と同様であった。出土遺物の大半は古式土師器で450点を数え、その他覆土中に板状木製品1点が出土している。上層の須恵器小片5点、近世陶磁器16点、近世の金属製品2点、近世の農耕具関係の木製品11点がある。

S K 329 (遺構：第24図、遺物：46—46・47)

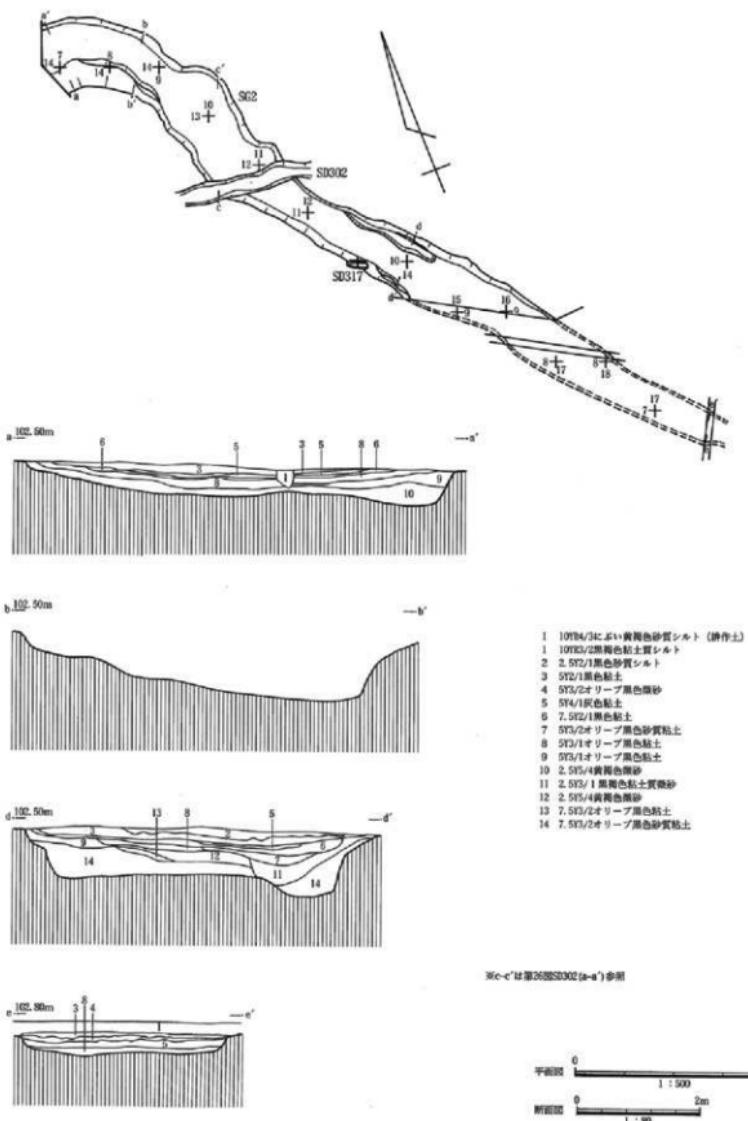
17—10Gで検出された。平面形は北側がやや張り出す円形である。長軸112cmで短軸110cm、深さは40cmを測る。壁の立ち上がりで途中に段をもち、開口部で外側に広がる。覆土上層は、黒褐色砂質粘土を基調とし、下層は黒褐色ないし黒色土でS G 3 覆土同様に腐植物を含む堆積を見せている。出土遺物は、古式土師器30点を数える。古式土師器甕が底面直上から出土している。

S K 330 (遺構：第24図)

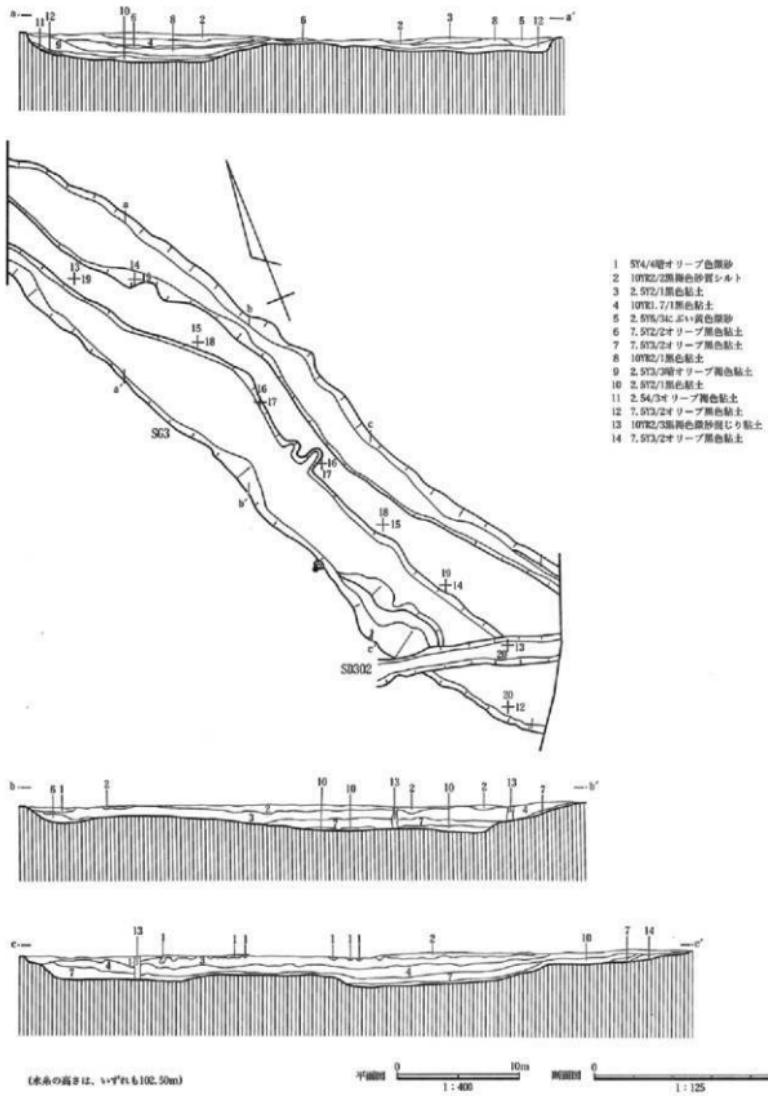
18—10Gで検出された。平面形は南西部が張り出した梢円形を呈している。長軸138cmで短軸90cm、深さ57cmを測る。壁がやや垂直に立ち上がり、開口部が外側に広がる。覆土上層が、黒色ないし黒褐色土でシルト性強い。下層は微砂を多く含む粘土で腐植物が多量に混じる。堆積状況がS K 329とほぼ同じのため同時期の遺構の可能性がある。

S H410 (遺構：第25図、46—48・49)

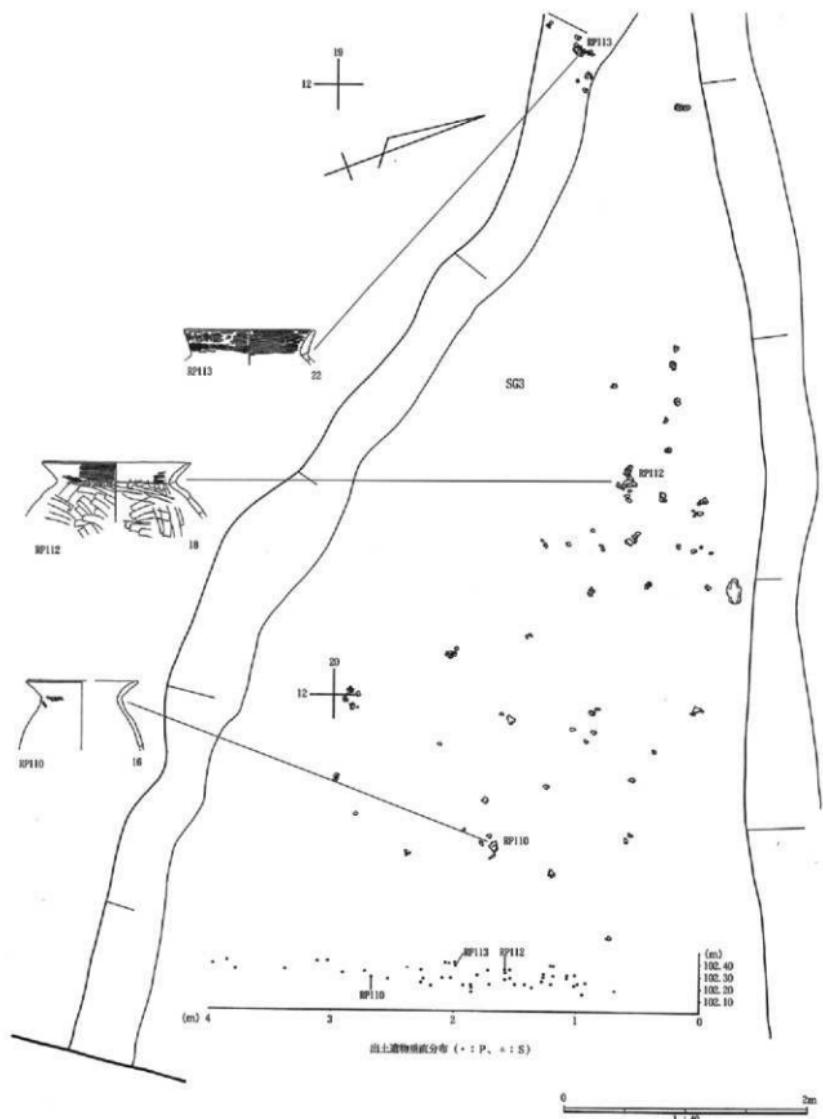
18—10～16—11Gで検出された。ほとんど近年の擾乱により破壊され、わずかに周溝を残すのみである。南側ブリッジの他3箇所の残存があり、南側に向かって隅丸方形に巡る様子が窺える。北側の部分が削平され、主体部も破壊されている。幅0.8～1.6m、深さ10cmを計る。墳墓全体の東西長は10.8mである。上層が削平されており、壁の立ち上がりが不明である。底面は平坦である。覆土はオリーブ黒色砂質シルトでグライ層である。遺物は、南側ブリッジ付近から古式土師器小片が25点、流れ込みの陶磁器小片2点が出土している。



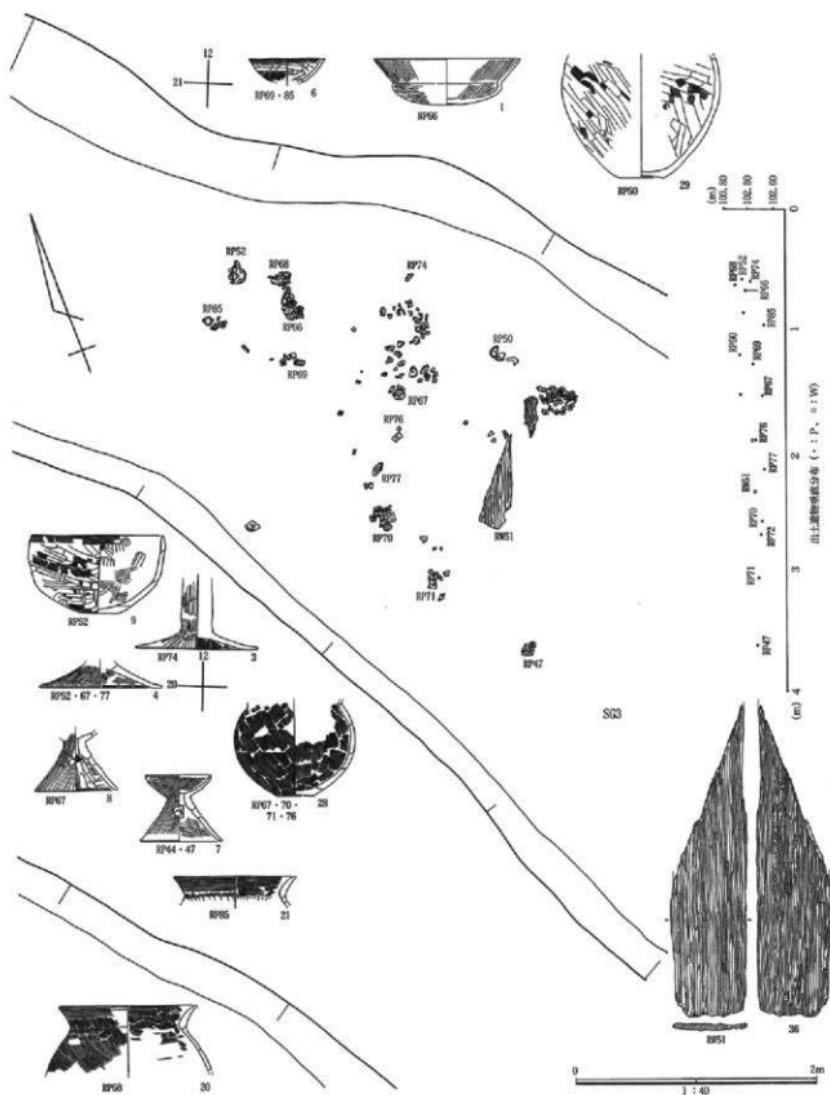
第20図 SG2河川跡

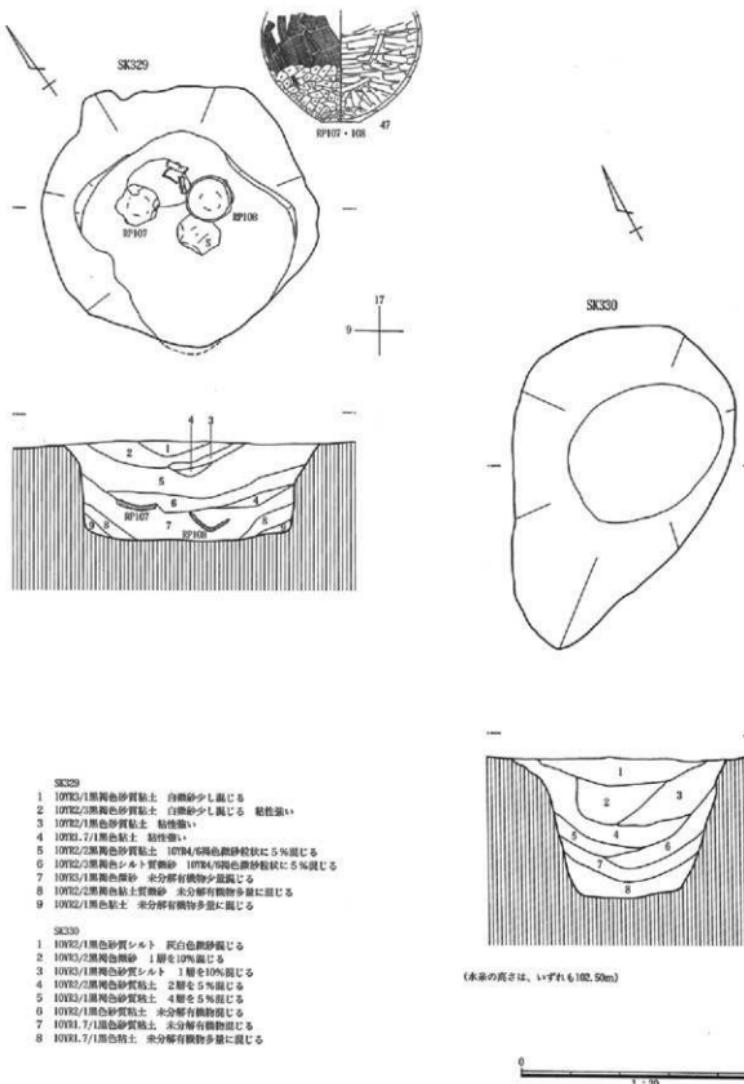


第21図 SG 3河川跡

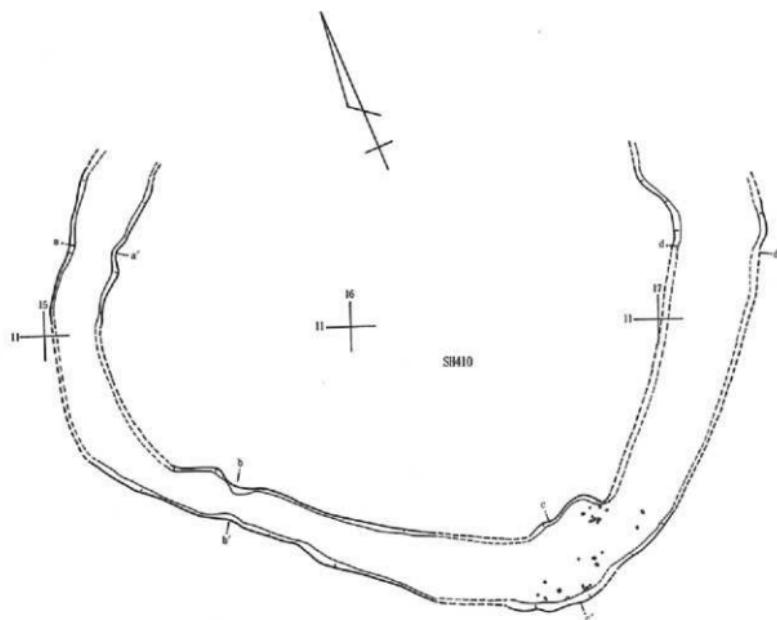


第22図 SG 3 河川跡裏側遺物出土状況





第24図 SK329・330土坑



(水差の高さは、いずれも102.50m)

I ST3/オリーブ黒色砂質シート ST2/黒色シルトブロック状に10%混じる グライ化

0 2m
1:80

第25図 SH410墳墓

奈良・平安時代の遺構

S D302(遺構: 第26図~28図、遺物: 47-52~50-109)

21-14~10-12Gで検出された。東側でS G 3を、西側でS G 2を切っている。東西に貫流する。規模は幅2.4~3.6mで現存長60m、深さ65cmを計る。断面形は、ややU字形で、覆土上層はオリーブ褐色微砂、下層で暗オリーブ色微砂が堆積する。遺物は、須恵器350点、赤焼土器・土師器400点、木製品3点・石製品1点出土している。須恵器坏は、底径がやや小さく体部が直線的に立つ器形(47-52-53)や底径が小さくなる器形(47-54)、体部が直線的に立った後口唇部が外反する器形(47-58~63)がある。底部の切り離しは回転糸切りである。なお、墨書き土器が21点出土しており、その他双耳环や赤焼土器有台坏・皿・鉢、土師器坏・高台付坏・甕、挽物大盤、砥石、近世胸器擂鉢が出土している。

中世の遺構

北側掘立柱建物跡群(遺構: 第29図~35図)

調査区北側に集中して検出された建物跡について概略的に述べていく。

S B14(遺構第29図)

13-28~12-28Gで検出された。棟方向は、磁北から75度西に傾く。規模は、梁行2間×桁行3間の側柱建物である。

S B32(遺構第30図)

14-28~13-27Gで検出された。棟方向は、磁北から80度西に傾く。身舎の規模は、梁行2間×桁行3間で、北側片面のみ庇を付設している。

S B81(遺構第31図)

14-28~14-27Gで検出された。棟方向は、磁北から20度東に傾く。規模は、梁行3間×桁行4間の側柱建物である。柱穴の形状はほぼ円形である。

S B116(遺構第32図)

15-27~14-26Gで検出された。棟方向は、磁北から80度西に傾く。規模は、梁行2間×桁行3間の側柱建物である。

S B125・S A412(遺構第33図)

15-27~15-26Gで検出された。棟方向は、磁北から10度東に傾く。規模は、梁行1間×桁行2間の側柱建物である。東側にS A412が付設される。

S B170(遺構第34図)

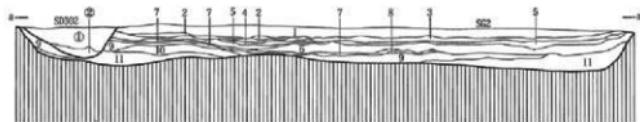
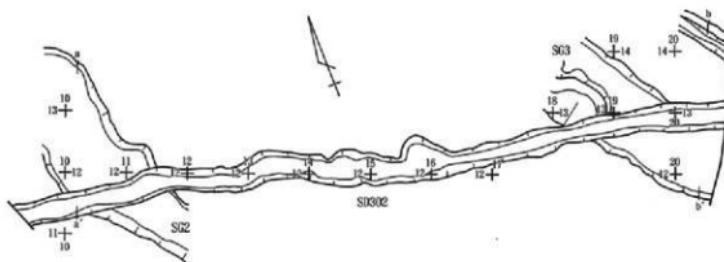
15-25~15-24Gで検出された。棟方向は、磁北から15度東に傾く。規模は、梁行1間×桁行3間の側柱建物である。

S B181(遺構第35図)

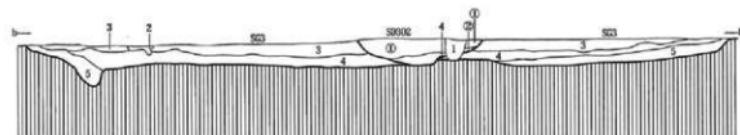
14-25Gで検出された。棟方向は、磁北から75度西に傾く。規模は、梁行1間×桁行2間の側柱建物と推定される。

S A411(遺構第35図)

15-28Gで検出され、棟方向は、磁北から15度東に傾く。S B32に付設かと思われる。



- SD2-SD2'
- SD2/1 黒色粘土 SD4/4縦オリーブ色粘土層状に10% (未分離有機物) 蔑じる (SD2覆土)
 2. SD2/1 黒色粘土 SD4/4縦オリーブ色粘土層状に10% (未分離有機物) 蔑じる (SD2覆土)
 3. SD2/2(2) 黒褐色砂質粘土 SD4/4縦オリーブ色粘土層状に10% (未分離有機物) 蔑じる (SD2覆土)
 4. SD2/2(3) リープ黑色砂質粘土 SD4/4縦オリーブ色粘土層状に10% (未分離有機物) 蔑じる (SD2覆土)
 5. SD4/1 黒色砂質粘土 SD4/4縦オリーブ色粘土層状に10% (未分離有機物) 蔑じる (SD2覆土)
 6. SD2/2(4) リープ黑色砂質粘土 SD2/2(4) リープ黑色砂質粘土層状に10% 蔑じる やや堅い (SD2覆土)
 7. 2. SD3/1 黒褐色粘土混じり無機物 SD2/2(4) リープ黑色砂質粘土層状に10% 蔑じる (SD2覆土)
 8. 2. SD3/2(1) 混成黑色層状 2. SD3/1 混成黑色層状を厚約5cm 蔑じる (SD2覆土)
 9. 2. SD3/1 混成黑色粘土層状 SD4/4縦オリーブ色粘土層状に10% (未分離有機物) 蔑じる (SD2覆土)
 10. 2. SD3/2(2) 混成黑色粘土層状 2. SD3/1 混成黑色粘土層状に10% (未分離有機物) 蔑じる (SD2覆土)
 11. 2. SD3/2(3) 混成黑色粘土層状 SD4/4縦オリーブ色粘土層状に10% (未分離有機物) 蔑じる (SD2覆土)
 - ① 2. SD4/5(1) リープ黑色砂質 SD2/2(4) リープ黑色砂質20%、2. SD3/1 混成黑色粘土10% 蔑じる (SD302覆土)
 - ② SD4/4縦オリーブ色粘土 SD4/5(2) リープ黑色砂質10% 蔑じる (SD302覆土)

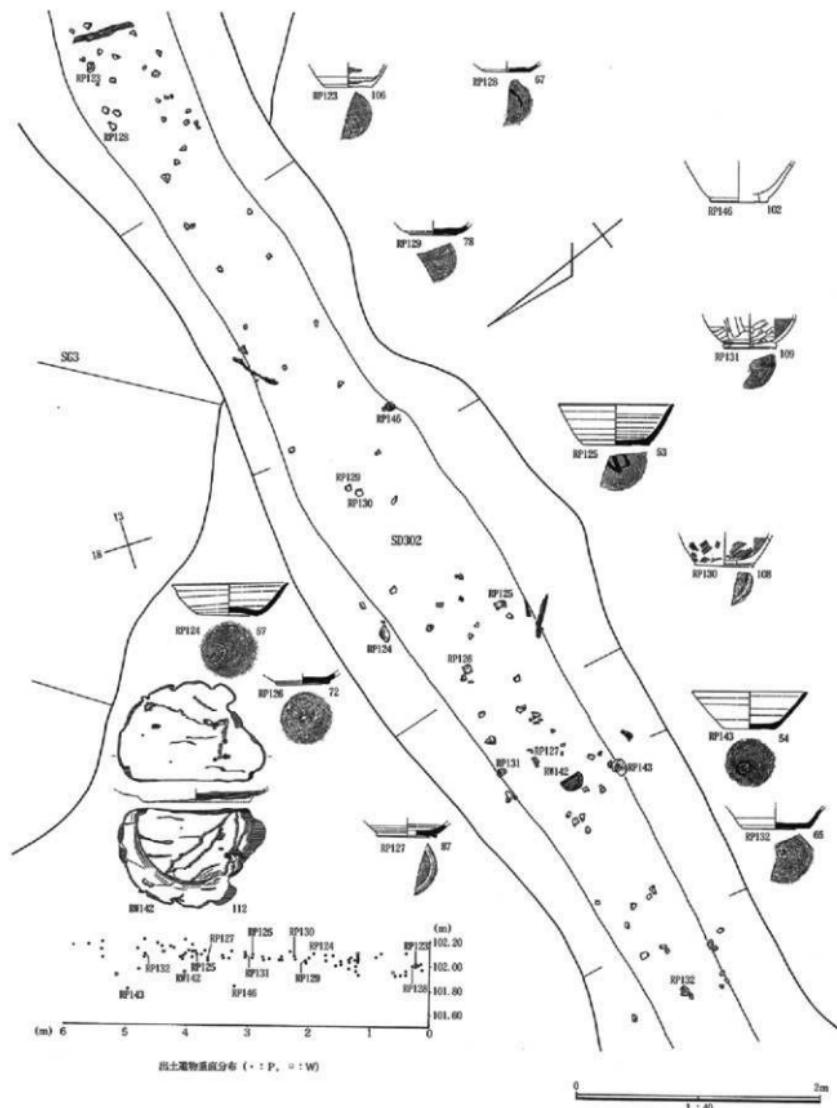


- SG3-SG3'
- SG3/1(1) リープ黑色砂質 10/02/1黒褐色粘土シートブロック状に5% 蔑じる (堅化)
 2. SD4/4縦オリーブ色粘土 10/02/1黒褐色粘土シート状地盤に30%、10/02/1黒色シートブロック状に10% 蔑じる (SG3覆土)
 3. SD3/2(1) 黑色粘土 SD3/2(2) リープ黑色粘土シート状に20% 蔑じる 動性張り (SG3覆土)
 4. 10/01. 1/ 黑色粘土 粘分離有機物少し混じる 動性張り (SG3覆土)
 5. SD3/2(3) リープ黑色粘土 動性張り グライ化 (SG3覆土)
 - ① 2. SD4/4(5) 2/ 黑色砂質 SD3/2(2) 黑色砂質90%、2. SD3/1 黑色粘土10% 蔑じる (SG302覆土)
 - ② SD4/4縦オリーブ色粘土 SD4/5(2) リープ黑色砂質10% 蔑じる (SG302覆土)

(水系の高さは、いずれも102.50m)



第26図 S D 302溝跡



第27図 SD302溝跡東側遺物出土状況

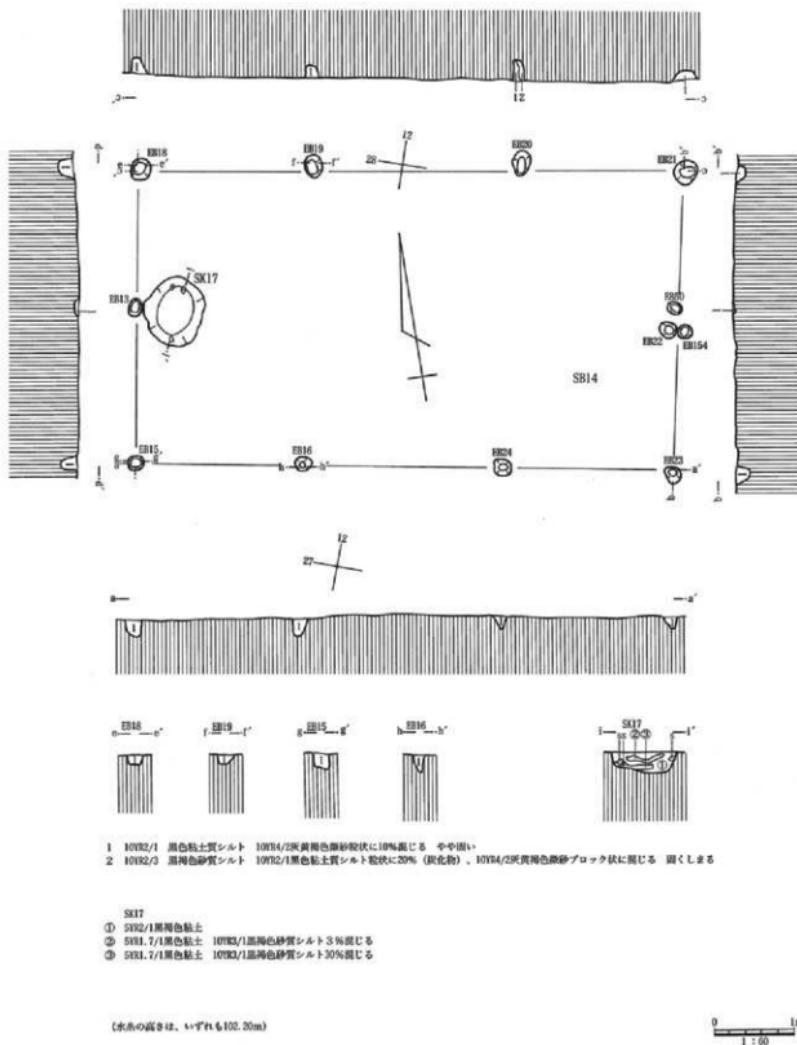


第28図 SD302溝跡西側遺物出土状況

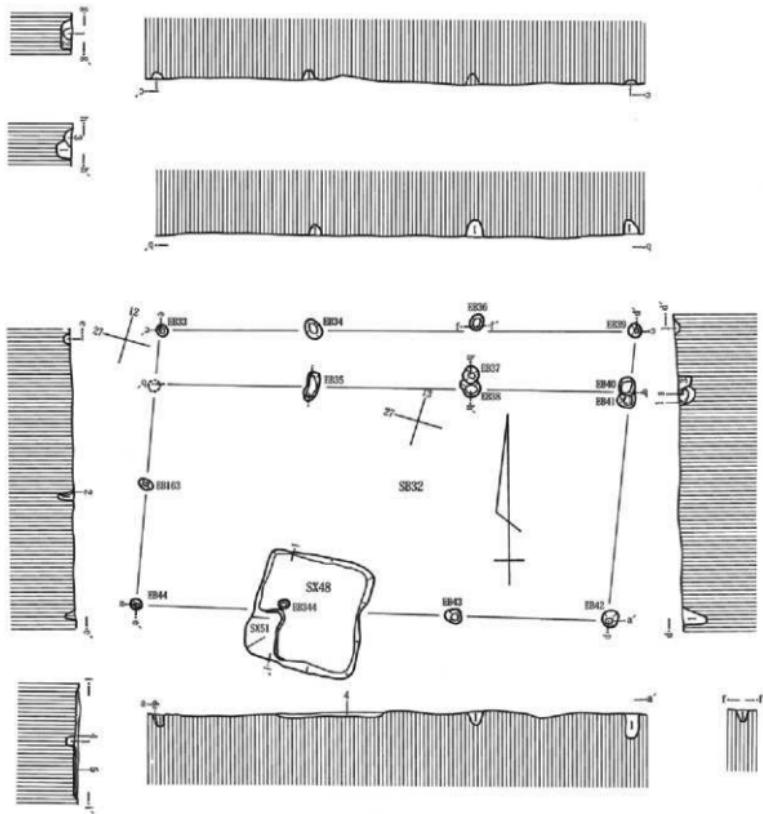
第3次調査

表-2 堀立柱建物跡観察表

	構成図	方向	規模	柱間寸法	掘り方・覆土	備考
SB 14	○-○-○-○ ○ ○-○-○-○	東西軸 N-75°-W	渠行 3.6~3.7m 橋行 6.6~6.8m 23.8m (7.5坪)	東行 EB15-17間1.9m, EB17-18間1.7m EB21-22間1.95m, EB22-23間1.75m 西行 EB16-24間2.5m, EB18-19間2.15m EB19-20間2.6m EB22-23.05m	径20cm前後。 ほぼ円形。 覆土として、アタリ部分は黒褐色砂質シルト、掘り方は暗褐色砂質シルトで固くしまっている。深さは、確認面から4~25cmほどである。	東側EB22を補強する柱穴としてEB50・154を検出している。 EB15・18・19は、2次調査にて確認されている。
SB 32	○-○-○-○ -○-○-○ ○-○-○-○	東西軸 N-80°-W	渠行 4.6~4.8m 橋行 7.8m 35.8m (11.3坪)	渠行 EB40-42間2.9m EB44-16間2.0m EB16-北東隅柱穴間約1.7m EB15-北東隅柱穴間約2.6m, EB18-19間1.5m EB35-38間2.6m, EB38-40間2.5m EB44-34間2.4m, EB43-34間2.8m EB42-43間2.5m 底 EB3-34間2.5m, EB34-36間2.7m EB36-39間2.6m 北東隅柱穴-EB33間0.9m EB39-41間1.0m	径30~40cm。 円形または楕円形。 覆土として、アタリ部分は暗色粘土質シルト、掘り方は暗褐色砂質シルトで固くしまっている。 深さは、確認面から10~40cmほどである。 EB41覆土中に、大きな礫が含まれる。	北西隅の柱穴、東隅柱穴の真中の柱穴は検出できない。 EB38・41ともに柱の差替えがなされる。 EB34は上層を搅乱により破壊されている。
SB 81	○-○-○-○-○ ○ ○ ○-○-○-○	南北軸 N-20°-E	渠行 2.5m 橋行 5.6~5.8m 街行 14.0m (4.4坪)	渠行 EB78-82間, EB87-156間0.9m EB78-90間0.6m, EB83-96間0.6 EB86-156間1.6m 橋行 EB82-84間0.6m, EB86-98間1.1m EB93-97間1.0m, EB82-97間2.0m EB87-91間1.3m EB84-98間, EB91-92間1.5m	径15~30cm。ほぼ円形。 覆土として、アタリ部分は黒褐色粘土質シルト、掘り方は暗褐色砂質シルトで固くしまっている。 深さは、確認面から5~25cmである。	南側西寄り、西側北寄りの柱穴が検出できない。 EB85をEB86が一部壊している。
SB 116	○-○-○-○ ○ ○-○-○	東西軸 N-90°-W	南北 3.2~3.4m 橋行 3.0~3.4m 東西 9.6m (3.0坪)	南北 EB117-124間, EB119-120間1.5m EB121-124間1.7m EB120-121間1.9m 東西 EB117-118間1.2m EB118-146間0.7m EB119-146間1.3m EB121-122間2.0m EB122-123間1.0m	径15~30cm。 ほぼ円形。 覆土として、アタリ部分は黒褐色粘土質シルト、掘り方は暗褐色砂質シルトで固くしまっている。 深さは、確認面から5~20cm。	SB125と切り合っているが、柱穴同士の切り合いもなく新旧関係は不明。
SB 125	○-○-○ ○-○-○	南北軸 N-10°-E	渠行 2.3m 橋行 3.6m 8.3m (2.6坪)	渠行 EB126-147間0.8m EB126-132間2.1m EB131-132間1.5m EB130-144間1.9m EB144-147間1.7m	径10~25cm。 ほぼ円形。 覆土として、アタリ部分は黒色砂混じり粘土、覆土は暗褐色微砂で固くしまっている。 深さは、確認面から8~25cm。	EB130をEB129が一部壊している。
SB 170	○-○-○-○ ○-○-○	南北軸 N-15°-E	渠行 1.7~1.8m 橋行 4.0m 6.8m (2.1坪)	渠行 EB171-172間1.8m EB175-176間1.7m EB171-172間1.2m EB176-177間2.8m EB174-213間1.1m EB174-175間1.5m	径10~30cm。 ほぼ円形。 覆土として、アタリ部分は黒色粘土質シルト、掘り方は暗褐色微砂で固くしまっている。 深さは、確認面から6~18cm。	西側の柱穴列の南寄り1本が確認できない。 小規模な小屋的な建物を想定できる。
SB 181	○-○-○ ○	東西軸 N-75°-W	渠行 1.3m以上 東西 3.15m以上 4.1m以上 (1.3坪)	南北 EB184-186間1.3m 東西 EB182-183間1.5m EB183-184間1.65m	径15~30cm。 ほぼ円形。 覆土として、アタリ部分は黒色粘土質シルト、掘り方は暗褐色微砂で固くしまっている。 深さは、確認面から5~12cm。	上層部分の傾平があるため南東方向に建物跡の範囲が延びる可能性がある。掘立柱建物跡を想定した。



第29図 SB14掘立柱建物跡

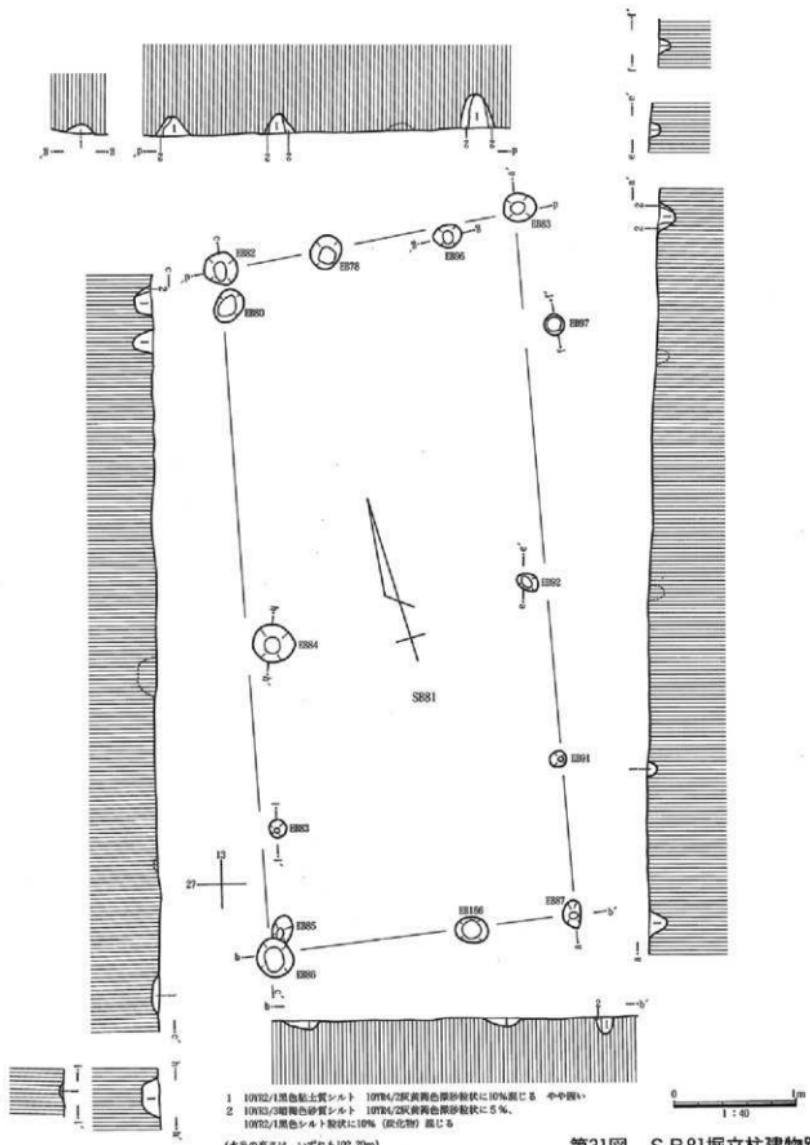


- 1 10Y32/1黒色黏土質シルト 10Y34/2灰褐色漂砂ブロック状に20%混じる 中や弱い
- 2 10Y32/3灰褐色砂質シルト 10Y32/1黒色シルト粒状に10% (鉄化物) 混じる 圓くしまる
- 3 10Y32/2灰褐色砂質シルト 10Y34/2灰褐色漂砂ブロック状に20%混じる 圓くしまる
- 4 10Y32/1黒色砂質シルト 10Y32/1黒色シルト粒状に3% (鉄化物) 混じる
- 5 10Y32/3灰褐色砂質シルト 均質

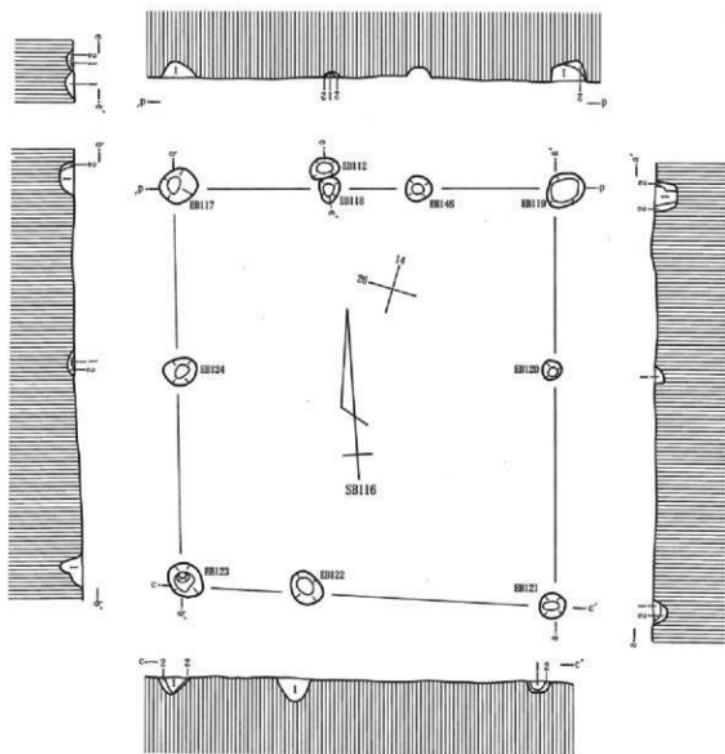
(水深の高さは、いずれも102.20m)

0 2m
1 : 80

第30図 S B 32掘立柱建物跡



第31図 S B81掘立柱建物跡

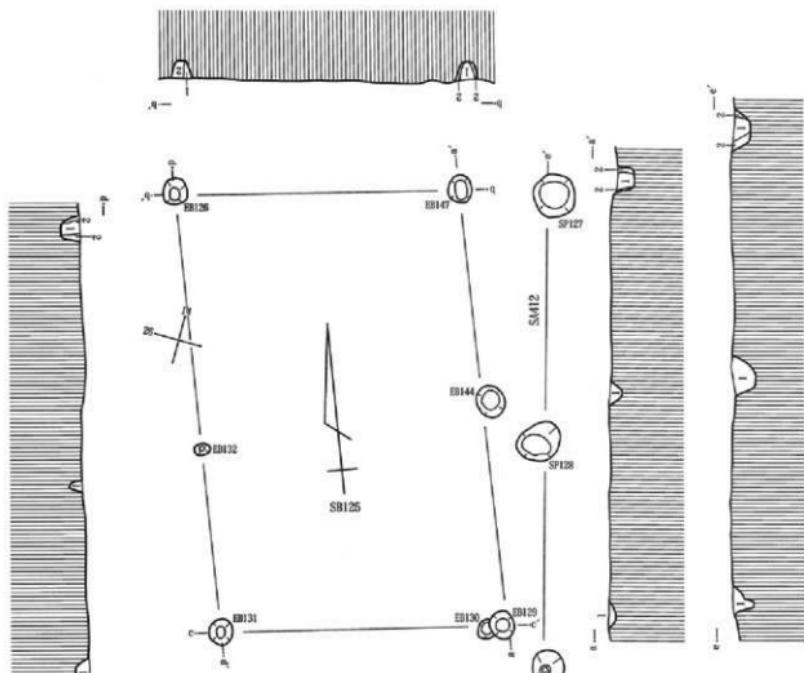


1 10B2/1 黒色粘土質シルト 10B4/2灰褐色細砂ブロック状に20%混じる やや固い
2 10B2/3 灰褐色砂質シルト 10B2/1黑色シルト状に10% (炭化物) 混じる 固くしまる

(水深の高さは、いずれも102.20m)



第32図 S B116掘立柱建物跡

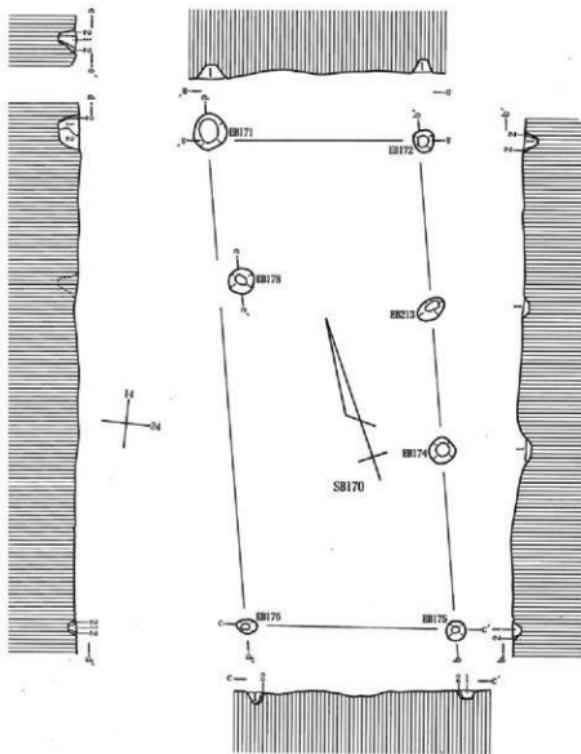


- 1 1092/黒色砂礫じり粘土 1094/2灰黃褐色粗砂ブロック状に30%混じる やや固い
- 2 1093/3暗褐色粗砂 1092/1黑色粘土粒状に5%混じる 固くしまる
- 3 1092/1黒色粘土質シルト 1094/2灰黃褐色粗砂ブロック状に30%混じる やや固い

(水位の高さは、いずれも102.20m)

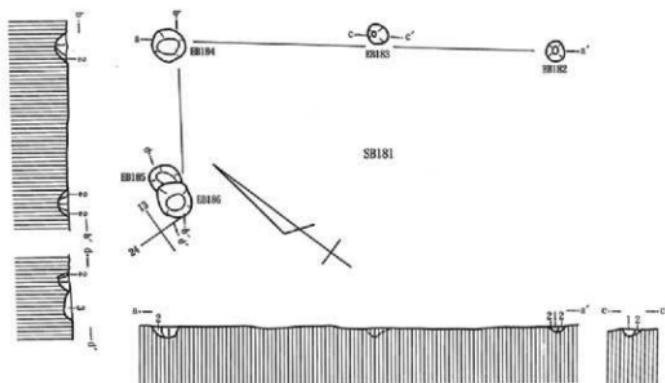
0 1m
1 : 40

第33図 S B125掘立柱建物跡・S A412柵列跡

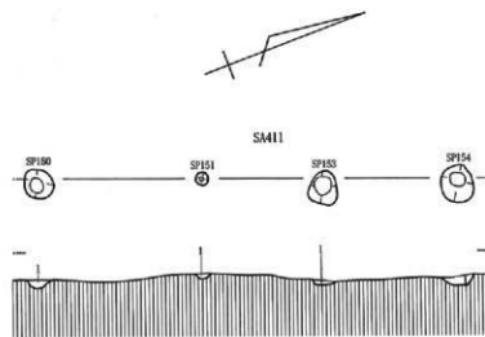


0 1m
1 : 40

第34図 S B170掘立柱建物跡



- SB181
- 1 10B2/1 黒色粘土質シルト 10B2/2 黄褐色膠泥状に5%混じる やや固い
 - 2 10B2/3 黄褐色砂質シルト 10B2/4 黑色シルトに10% (炭化物) 岩になる 岩くしまる
 - 3 10B4/1 黒色シルト 10B4/2 黄褐色膠泥状に10%混じる やや固い



- SA411
- 1 10B2/1 黒色粘土質シルト 10B2/2 黄褐色膠泥状に5%混じる やや固い

(水位の高さは、いずれも102.20m)

0 1m
1:40

第35図 S B181掘立柱建物跡・S A411柵列跡

井戸跡・土坑(遺構: 第36図~37図)

ここでは、中世の井戸跡・土坑の主なものについて述べることとする。なお、井戸跡はすべて素掘り井戸であり、開口部の形状が当時から変化したと思われ、「技術として大差がなく、形は崩壊によって変わるために、形状による細別は原則として行わない」(宇野 1982)こととする。

S E 7(遺構: 第36図)

13-24Gで検出された。平面形は、やや西側に張り出した不整橢円形である。南北長114cmで東側が欠損しているため東西長は不明である。深さは確認面から70cmを測る。底面は、北側に極端に窪み、壁は垂直に立ち上がり開口部で外側に大きく開く。覆土は、黒色粘土質シルトの単層で灰黄褐色微砂をブロック状に含む。調査区内にある井戸跡に共通して見られる堆積状況で、人為的な埋積である。近接する建物はS B181で北東に3m離れる。

S E 8(遺構: 第36図)

13-25Gで検出された。平面形はほぼ円形である。南北長が120cmであり、深さは確認面から50cmを測る。底面が北側で少し窪み、壁がやや垂直に立ち上がる。北側で開口部が少し広がる。覆土は前述した人為的な埋積である。近接する建物はS B181で東に4.5m離れる。

S E 11(遺構: 第36図)

13-26Gで検出された。平面形はほぼ円形である。上層が削平されている。長径76cmで短径70cmであり、深さは確認面から36cmである。壁はやや垂直に立ち上がり、断面形はレンズ状を呈する。覆土は前述した人為的な埋積である。近接する建物はS B81で東に3.5m離れる。

S E 12(遺構: 第36図、遺物: 51-113)

13-26Gで検出された。平面形はほぼ円形である。長径94cmで短径86cmであり、深さは確認面から60cmである。底面はやや南側に傾斜し、壁はやや垂直に立ち上がる。遺物として曲物の底板1点が底面から出土した。覆土は前述した人為的な埋積である。近接する建物はS B81で東に4.4m離れる。

S E 59(遺構: 第36図)

13-26Gで検出された。平面形はほぼ円形である。長径80cmで短径74cmであり、深さは確認面から68cmである。断面形は筒形でロート状を呈する。覆土は前述した人為的な埋積である。近接する建物はS B81で東に0.2m離れる。

S E 199(遺構: 第37図)

17-25Gで検出された。西側でS K198を切っている。平面形は、南北に長い橢円形である。長径96cmで短径84cmである。深さは確認面から50cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、開口部直下で外側に開く。覆土は前述の人為埋積である。近接する建物はS B170で西に7.5m離れる。

S E 208(遺構: 第37図)

16-24Gで検出された。平面形は、やや北側に張り出した不整橢円形である。長径110cmで短径100cmである。深さは確認面から68cmである。壁の立ち上がりが垂直で、開口部でやや内側に入る。覆土は単層で人為埋積である。近接する建物はS B170で西に5m離れる。

S E 209 (遺構 : 第37図)

19-24Gで検出された。平面形はほぼ円形である。長径90cmで短径88cmである。深さは確認面から68cmである。壁が垂直に立ち上がり、底面が平坦である。覆土は単層で人為埋積である。近接する建物はS B 170で北西に3.5m離れる。

S K 336 (遺構 : 第37図)

19-23Gで検出された。調査区を東側に若干拡張した箇所で確認された。平面形はほぼ円形である。長径64cmで短径62cmである。深さは確認面から24cmである。断面形がレンズ状で、覆土が単層で井戸跡と同じ傾向を示す。上層での削平をあまり受けていない浅い掘り込みであることや底面が砂状ではないため土坑と判断した。

S D 4 (遺構 : 第38図・39図、遺物 : 52-114-53-126・54-129-55-133・55-135-56-137)

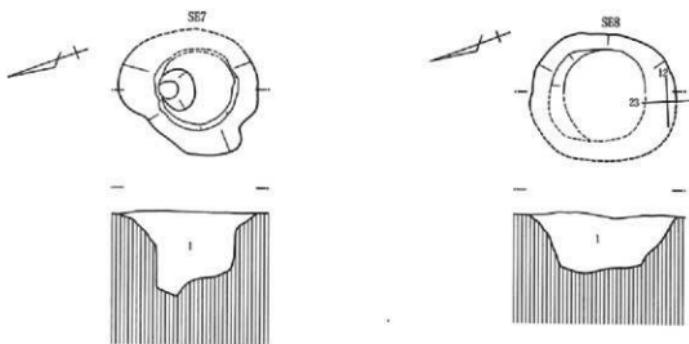
11-30-18-20Gで検出された。北側でS D 5を切っている。南側で上層からS G 3を切っているものと推定される。北側と中央部で西側にL字に屈曲する溝跡である。コの字形に建物跡の東側を区画している。北西側一部が一部側道工事との関連で調査できなかったが、遺構の大部分が検出できたことと木製品などの遺物の分布が東側に偏っていたため大方の内容を把握することができた。幅0.5~1mで現存長82mであり、深さは確認面から5~20cmを測る。覆土は単層で黒色粘土質シルトを基調とし灰黄色褐色微砂をブロック状に混じる。遺物は、輸入磁器2点、須恵器系陶器4点、土製品1点、砥石1点、木製品11点、動物遺体2点が出土している。

S X 195 (遺構 : 第40図)

17-26-16-25Gで検出された。平面形は南側に張り出したT字形である。長径3mで短径2.3mであり、深さは確認面から36cmを測る。覆土は井戸跡同様に黒色粘土質シルトで人為埋積である。

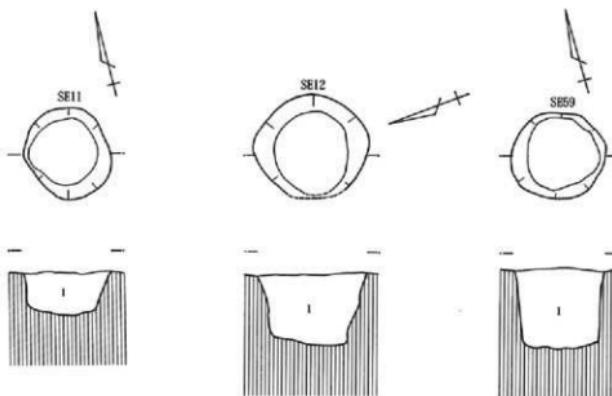
S X 342 (遺構 : 第40図、遺物 : 55-134・56-138・139)

15-29-15-28Gで検出された。南西側でS D 6を切っていると推定される。平面形は隅丸長方形である。長径3.8mで短径2.5mであり、深さは確認面から40cmを測る。北側でやや緩やかに立ち上がる。覆土は単層で黒色粘土質シルトを基調とした人為埋積である。覆土北西側に自然木が堆積する。遺物はすべて覆土中位から上層にかけて出土している。底面から出土している遺物はなかった。遺物は、須恵器系陶器1点、土師器甕1点、木製品1点、焼骨片4点が出土している。人骨は、南壁寄りの覆土内のみで出土している。埋葬に関連した施設なのか、人為埋積の際に入ったものかは不明である。



SE7
1 10782/1黒色粘土質シルト 10784/2灰黄褐色細砂ブロック状に20%混じる

SE8
1 10782/1黒色粘土質シルト 10784/2灰黄褐色細砂ブロック状に20%混じる



SE11
1 10782/1黒色粘土質シルト 10784/2灰黄褐色細砂ブロック状に20%混じる

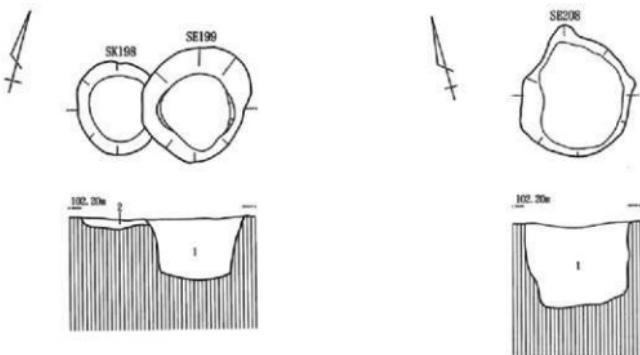
SE12
1 10782/1黒色粘土質シルト 10784/2灰黄褐色細砂ブロック状に20%混じる

SE59
1 10782/1黒色粘土質シルト 10784/2灰黄褐色細砂ブロック状に20%混じる

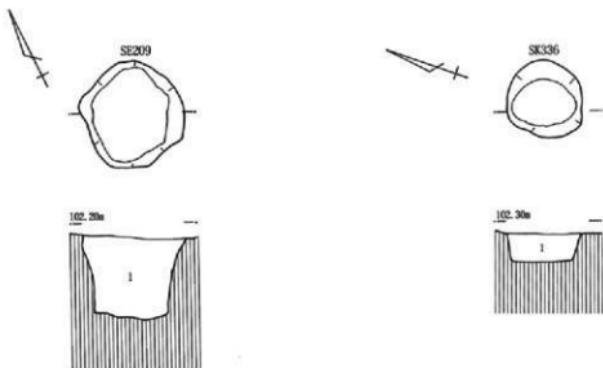
(水位の高さは、いずれも102.30m)

0 1m
1:40

第36図 S E 7 · 8 · 11 · 12 · 59井戸跡



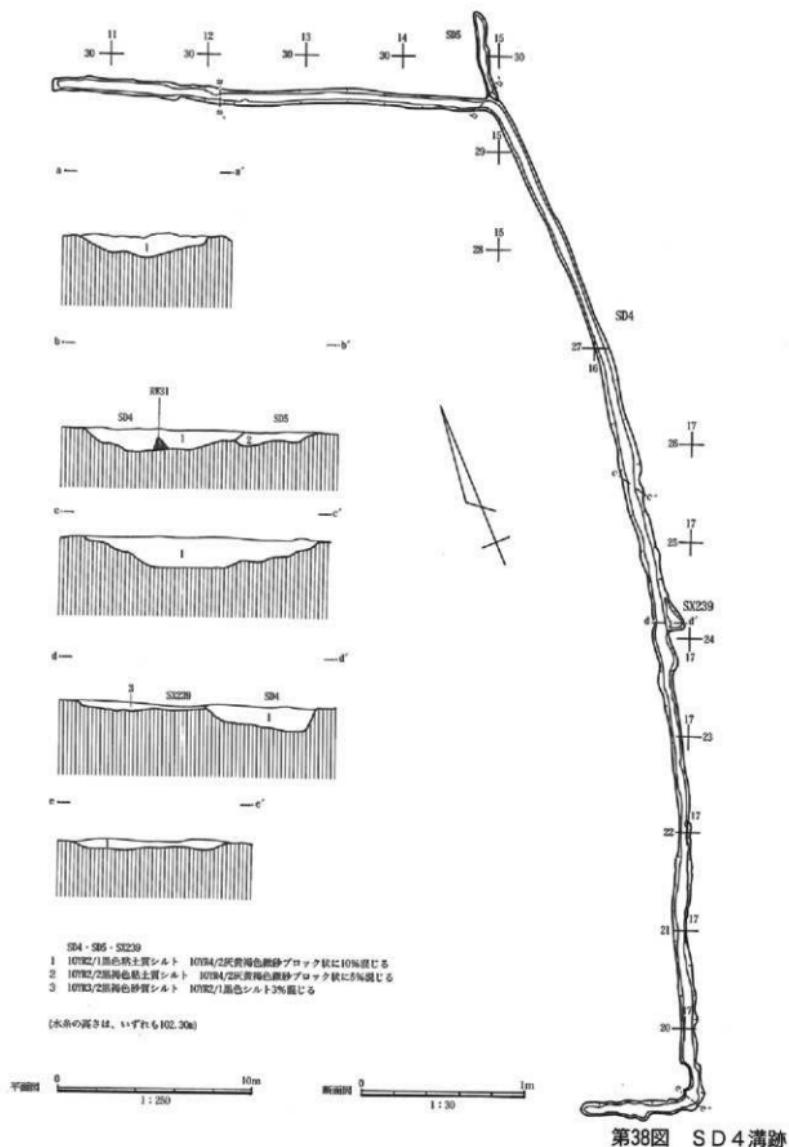
SK198 SE199
 1 10192/1黒色粘土質シルト 10184/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる
 2 10192/2暗色砂質シルト 10192/1黒色粘土質シルト粒状に30% (灰化物) 混じる
 SE208
 1 10192/1黒色粘土質シルト 10184/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる

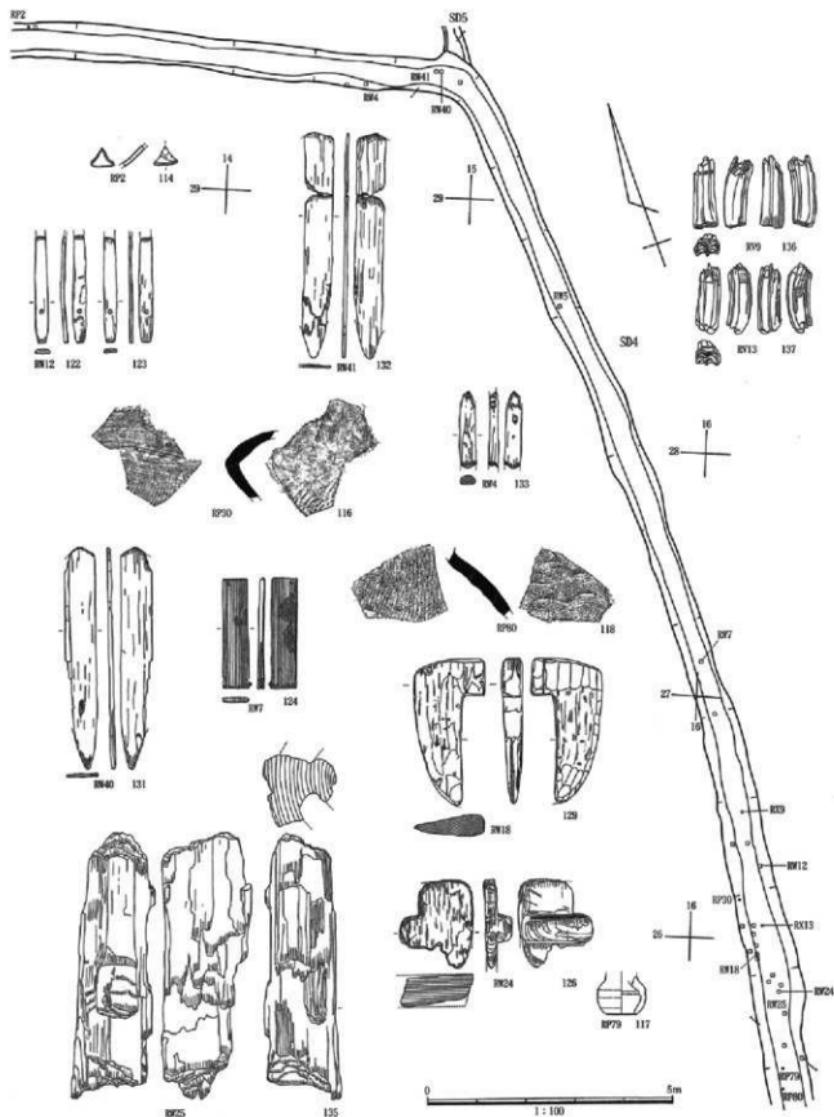


SE209
 1 10192/1黒色粘土質シルト 10184/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる
 SK336
 1 10192/1黒色砂質シルト 10184/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる

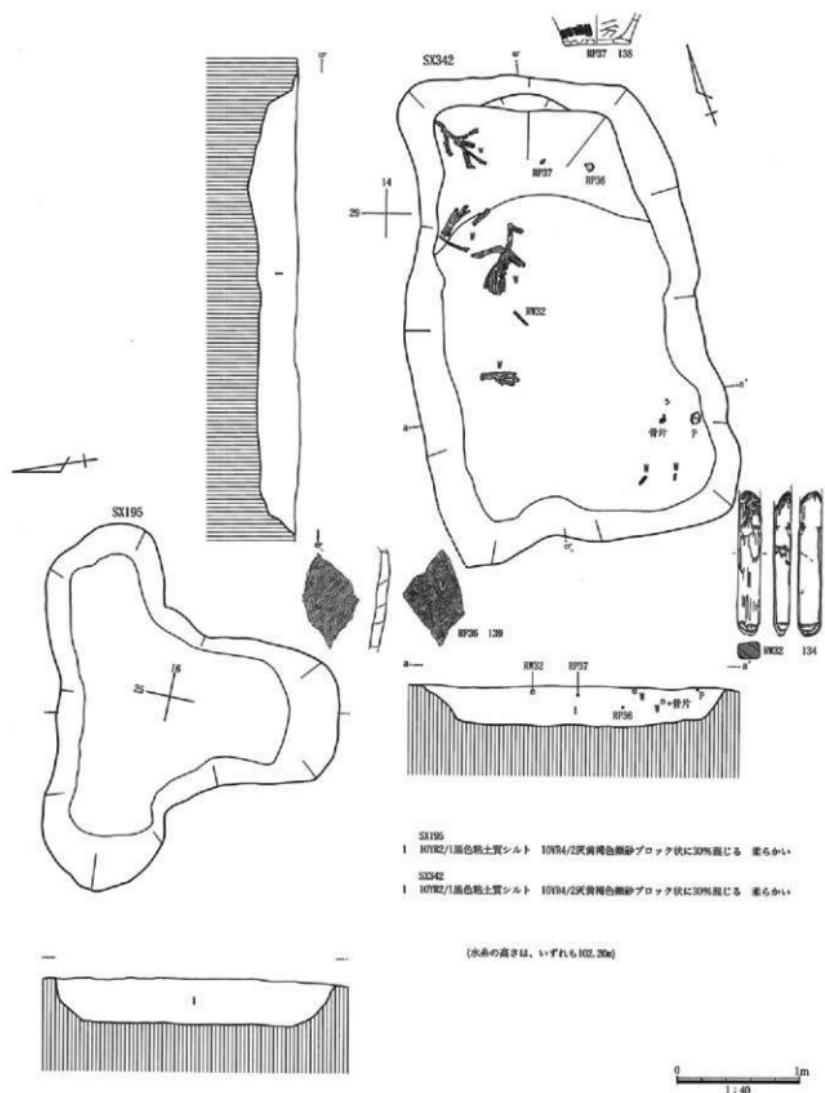
0 1m
1:40

第37図 S E 199・208・209井戸跡、S K 198・336土坑





第39図 SD 4溝跡遺物出土状況



第40図 SX195・342性格不明遺溝

2 出土した遺物

S G 3 (遺物 : 41-1~45-37・53-127)

先に古式土師器について述べる。(41-1)は、壺で扁平な球形の体部にクの字状に開く口縁部をもつ。底部中央に若干の窪みがある。(41-3・4)は高壺で中実棒状脚とハの字に開く裾部をもつ。器台は、口縁部が内湾する(41-5・7)と外反する(41-6)がある。脚部に3方に透孔を施して丁寧にミガキ調整を行っている(41-7・8)。(41-9)は鉢である。底部が平底で、体部から口縁部まで内湾して立ち上がる。(41-2・10~42-14)は壺である。(41-2)は、体部のみであるが小型の直口壺と推定される。(41-14)は底部のみである。(41-10)は、体部中位から屈曲外反する口頸部をもつ壺である。(42-11)は若干膨らむ体部に短い口縁部がつく。短い口縁部が立つ(42-12)もある。複合口縁をもつ(42-13)がある。壺は、口縁部が外傾し、球胴形の体部がつくもの(42-19)、口縁部が外傾・外反し、体部中位が脛張りのもの(42-15・17・18・25)、口縁部がやや直立するもの(43-22)、口縁部が外反し、なで肩のもの(42-16・43-20・21・24)、体部上半に最大径のあるもの(43-23)がある。壺のハケメ調整をするもの以外にヘラ削りやナデによる調整もあり、塩釜式期の最終段階周辺の様相を示す(青山 1998)。(45-36)は、古式土師器と共に伴した板状木製品で、出土時には暗渠により斜めに壊されていた。用途は不明である。その他上層で須恵器壺体部(44-30)、近世陶器瓶底部(44-31)、擂鉢(44-32・33)、金属製品キセル吸い口(44-34)、銅製の半球状製品(44-35)、木製品の田下駄と思われる農具(45-37)が出土している。曲物の底板(53-127)も出土している。近世の遺物は、小破片で図化はしなかったが、外面に二重網目文のある肥前産の碗が共伴している。

S G 2 (遺物 : 46-38~45)

(46-38)は古式土師器壺頸部で、(39)は底部である。覆土中位から上層にかけて古式土師器小片が僅かに出土している。上層および流れ込みの遺物として須恵器壺(46-40)、赤焼土器壺(46-41)が出土している。体部が直線的に立ち、口唇部で外反する。9世紀後半の所産である。その他土製品として土錐と思われる遺物(46-42)がある。中世輸入磁器として(46-43・44)がある。(46-43)は口縁部のみであるが、直立する口縁部をもち、15世紀半ばに端反り碗が出現する前の様相である。碗自体もその時期には少なくなる傾向がある。(46-44)は、染付皿で、高台は小さく低く、高台墨付には細かいヘラ削りがなされ、高台裏には放射状のカンナ削り痕がある。見込みの文様については、あまり残存していないことから不明である。その他产地不明の近世磁器体部(46-45)が出土している。

S K 329 (遺物 : 46-46・47)

(46-46・47)は古式土師器壺の直立する口縁部(46)とやや球形の体部をもつ(47)が出土している。

S H 410 (遺物 : 46-48・49)

古式土師器壺小片が出土しており、直立する口縁部(46-48)と平底の底部(46-49)がある。

S D 302 (遺物 : 46-50~51-112・53-128)

流れ込みで古墳時代後期の高壺(46-51)が出土している。短脚でハの字に開く器形である。(49

—94)は古式土師器甕でクの字に屈曲して口縁端部で外反する。

(47—52~48—83・50—103・104)は須恵器坏である。底部が残存しているものの切り離しは、(47—65)のヘラ切りを除いては全て回転糸切りである。器形的に概略すると、底径がやや小さく逆台形状を呈する器形(47—53・55・64・65)、底径がやや小さく体部が直線的に立ち端部で外反する器形(47—52・56・57・58・48—76)、底径が小さく体部が直線的に立つ器形(47—54・59~63・66・48—77・50—103)がある。(49—84~88)は、須恵器有台坏である。底部切り離しがヘラ切りで底径が小さい器形(49—86・88)、底部切り離しが回転糸切りで体部が内弯する器形(49—84・85)、高台部が低い器形(49—87)がある。墨書き土器は、21点出土している。郷名「福有」が書かれている(47—52)「福有南」がある。郷名のある墨書き土器は、県内では「大山郷」と書かれた一の坪遺跡(河北町)がある。その他、「王」・「物」・「古」・「今」などがある。特に「王」(47—54・56・48—68)が多い。また、口縁部内面に漆が付着しているもの(48—83)がある。(50—99~101)は双耳坏である。把手はすべて体部中位から斜方向に延びている。(49—90~93)は、須恵器蓋である。口縁部が屈曲する(49—90・93)、直線的な口縁部の(49—92)、つまり外面中央部が窪む(49—91)がある。(49—97)は、短頸壺でやや肩の張らない器形である。(49—96~98)は、須恵器甕である。大型で平底の(49—95)、やや頸部が屈曲する(49—96)、頸部から肩部にかけての(49—98)がある。

(49—89・50—102)は、赤焼土器有台坏である。底径がやや小さく、切り離しが回転糸切りの(49—89)、低い高台が付き、直線的に立ち上がる(50—102)がある。また、(50—105)は赤焼土器皿である。低い高台が付き、短く体部から口縁部にかけて直線的にのびる。(50—106)は赤焼土器鉢である。底部切り離しが回転糸切りである。内面に漆が付着している。(50—107)は口縁部が緩やかに外反する土師器甕である。内外面にハケ目調整を施す。(50—108・109)は、土師器有台坏である。2個体とも高台部は低く、内面に黒色処理を施す。(50—109)の底部切り離しは回転糸切りである。

石製品では砥石(51—111)がある。欠損があり、3面に使用痕が認められる。2面に切り離し痕がある。木製品では、挽物大盤(51—112)がある。有台で器厚が厚く、見込み部分窪みが少なく、内面が平坦である。ケヤキ材を使用している。(53—128)は曲物の底板のみの出土である。木釘が残っており、側板と接合していたと思われる。上層で確認された近世陶器攝鉢は、内外面にオリーブ色の施釉がされ、内面に細かい御目がある。

S D 4 (遺物 : 52—114~53—126・54—129~55—133・55—135~56—137)

(52—114・115)は青磁碗の体部である。(52—114)は、透明な青磁釉が掛けられ、貫入が入る。色調は、7.5Y7/2灰白色である。内面に劃花文を施している。(52—115)は、やや不透明な青磁釉が掛けられている。色調は、7.5Y6/1灰色である。内面に飛雲文を施している。釉薬の色調から龍泉窯系統の窯から搬入されたことが想定できる。遺構内からは須恵器甕(52—116・118・120)、壺(52—119)破片が出土している。甕の器面調整が、外面タタキで内面アテ痕である。升川遺跡(遊佐町)出土の須恵器系陶器は古代の手法をそのまま継承しており、本遺跡で12世紀代の輸入磁器を出土することから須恵器甕などは検討を要する。また、土鈴(52—117)と思われる土製品が

出土している。石製品としては砥石(52—121)がある。5面に使用痕がある。

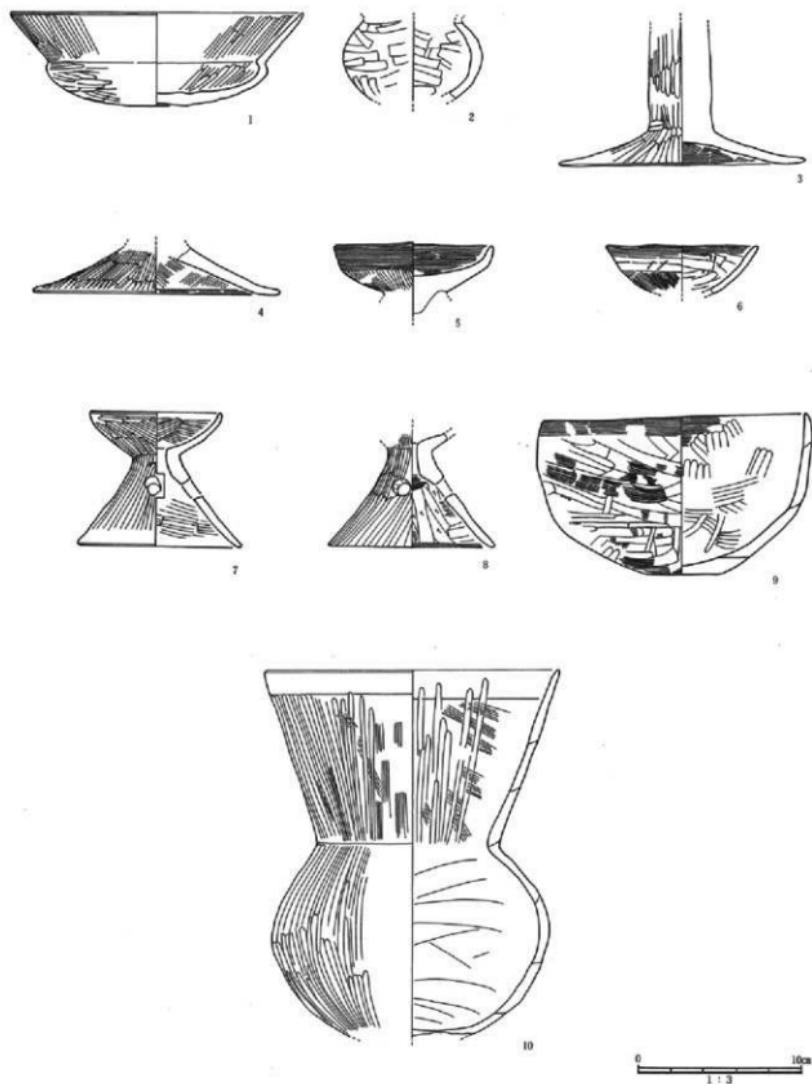
本遺構の中でも多くの出土があった木製品について述べる。(52—122・123)は、扇骨である。2枚は重なった状態で出土した。基部のみの出土で、要に綴じ孔を1つ開けている。綴じ紐等は確認されなかった。スギ材を使用している。(52—124)は、漆刷毛である。1枚の薄い板材を穂先部のみ切れ目を入れて、穂を挟んでいる。穂先部横で三角の切り抜きをいれて綴じたものと思われる。柄部に小孔が開けられている。穂先と柄部に漆が残存している。スギ材を使用している。(53—125)は、直に延びた小刀の鞘である。表面は甲高に削りだし、鞘先は細かな削りで整形されている。裏面は、刀形と合わせて削りだし、中位に小さい孔を開けている。鞘尻には半円形の削形を施し、薄く削り出している。スギ材を使用している。(53—126)は、連歯下駄である。台前部が欠損しているが、形状は長梢円形の台に台形状の歯が2枚付くことが想定される。ケヤキ材を使用している。(54—129)は、鍼状木製品である。鍼身のみで1/2は欠損している。コナラ材を使用している。(54—130～133)は塔婆である。(54—130～132)は、上端が圭頭状をなし、下端が尖頭状に削り出されている。いずれも欠損がある。厚さは3mm代である。(132)に墨痕が確認されたが、釈読はできない。スギ材を使用している。(55—133)は、断面形で長方形にやや厚く整形しているもので、上端・下端ともに欠損している。スギ材を使用している。(55—135)は部材である。2方向のホゾ穴を確認できる。腐植による剥落があるため、工具による面取りの状況が明確ではない。スギ材を使用している。(56—136・137)は馬歛である。出土位置から同一の動物遺体かと思われる。歯根部が欠損しており、表面も腐植が進んでいる。表面に平地の遺跡に特徴的に確認される藍鉄鋼が付着している。塔婆と共に伴することから祭祀的な意味合いが考えられる。

S X 342 (56—138・139)

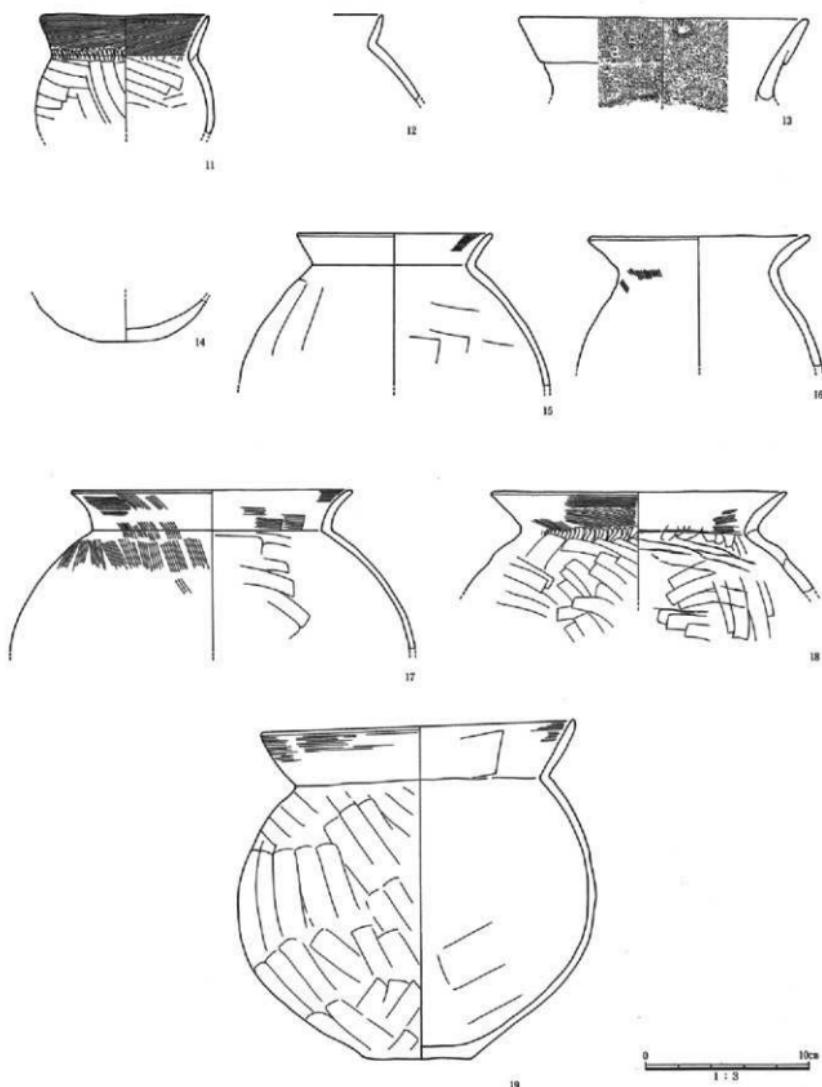
(56—138)は土師器底部である。底部から直線的に立ち上がる器形で奈良・平安時代の所産である。(56—139)は須恵器系陶器である。体部の破片で、細かい条線状のタタキ目を施している。内面に押圧痕が認められる。珠洲系陶器と思われるが、やや生焼で胎土が粗砂混じりの点から須恵器系陶器とした。

グリッド・ピット・トレーナー・出土地点不明遺物 (56—140～148)

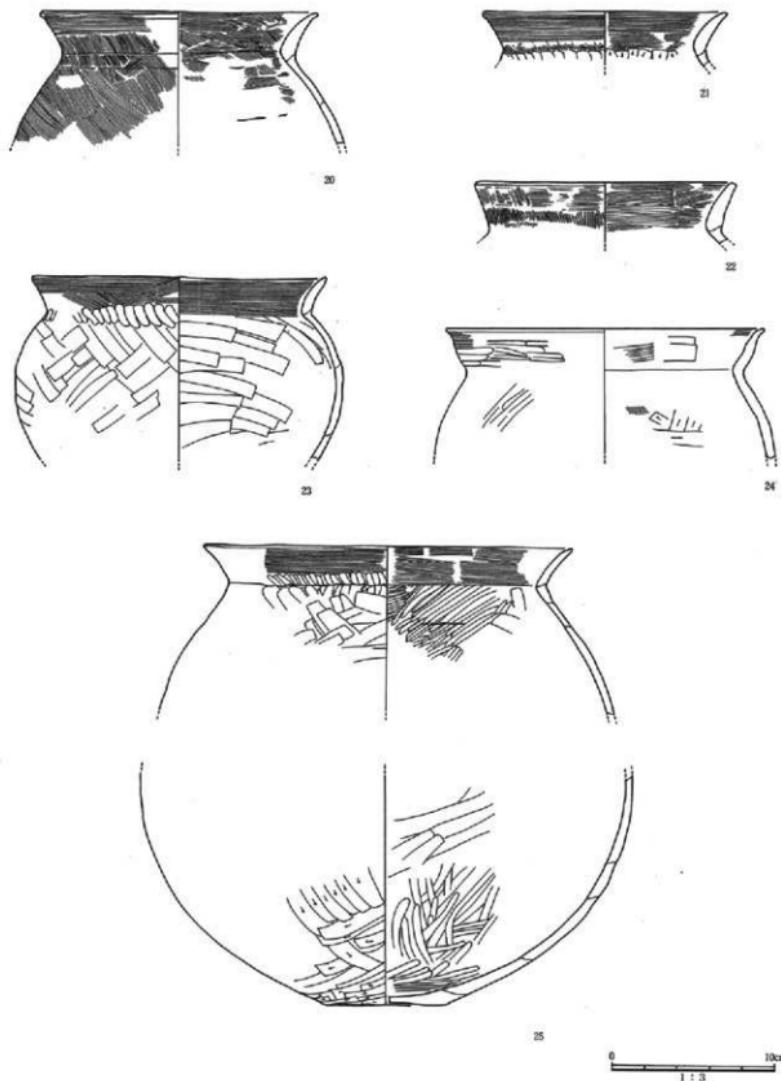
古墳時代では、中空棒状脚をもつ高环(56—140)、短脚の高环(56—141)がある。奈良・平安時代の須恵器杯(56—143)、高台付杯(56—142)、土師器小破片(56—144)、内面黒色処理の高台付杯(56—147)や近世陶磁器(56—145・146・148)がある。底部切り離しは(142)は回転糸切り、(143)はヘラ切り、(147)は菊花状ナデツケ調整を施す。(56—145)は、外面に灰オリーブ色の釉掛けをしている。(56—148)は、肥前産の染付碗である。



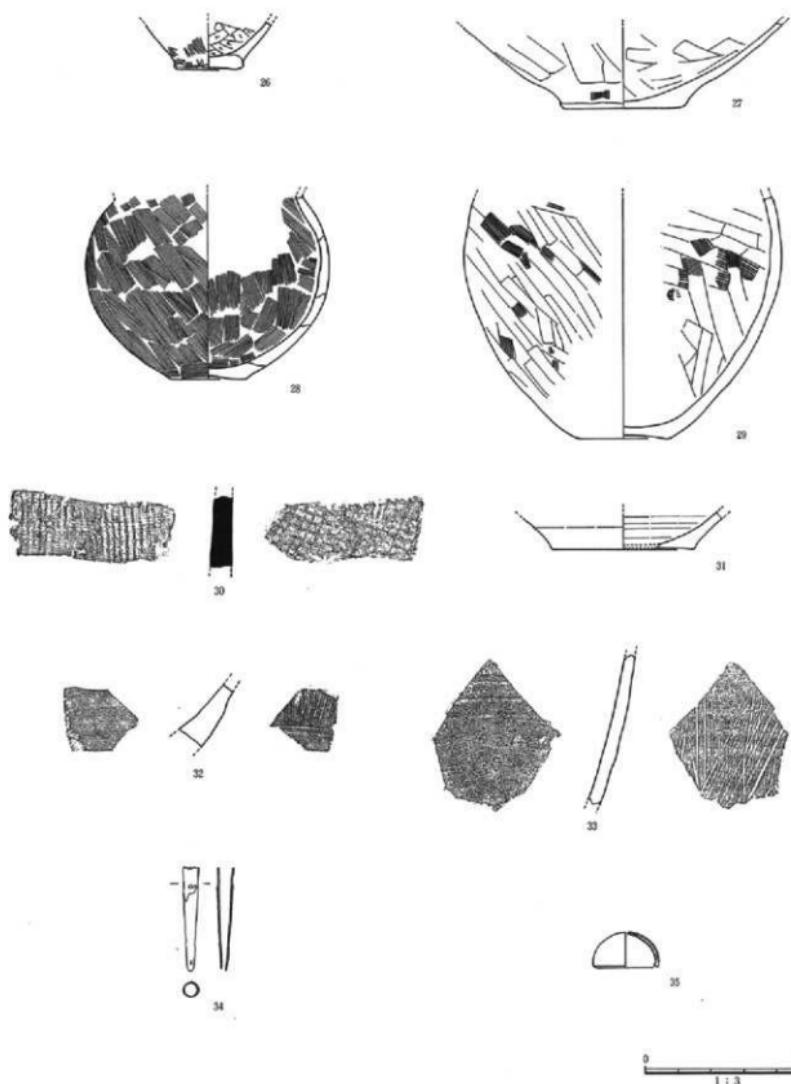
第41図 遺物実測図 (1)



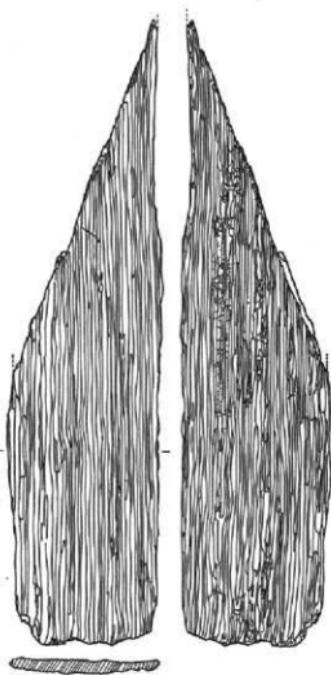
第42図 遺物実測図（2）



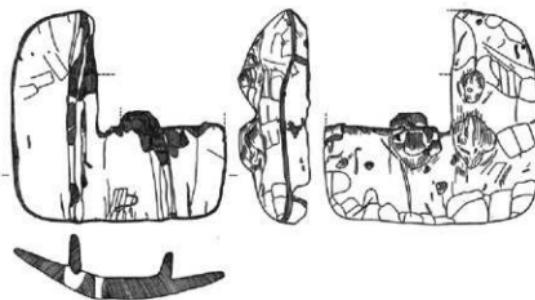
第43図 遺物実測図（3）



第44図 遺物実測図 (4)



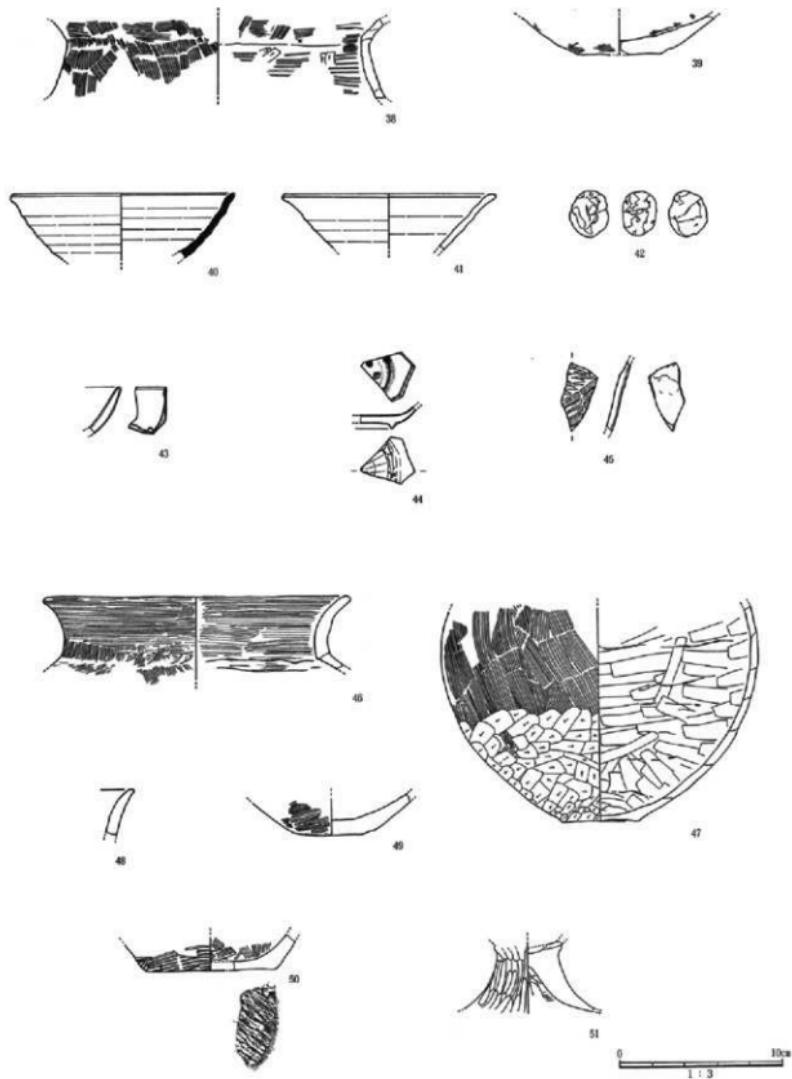
36



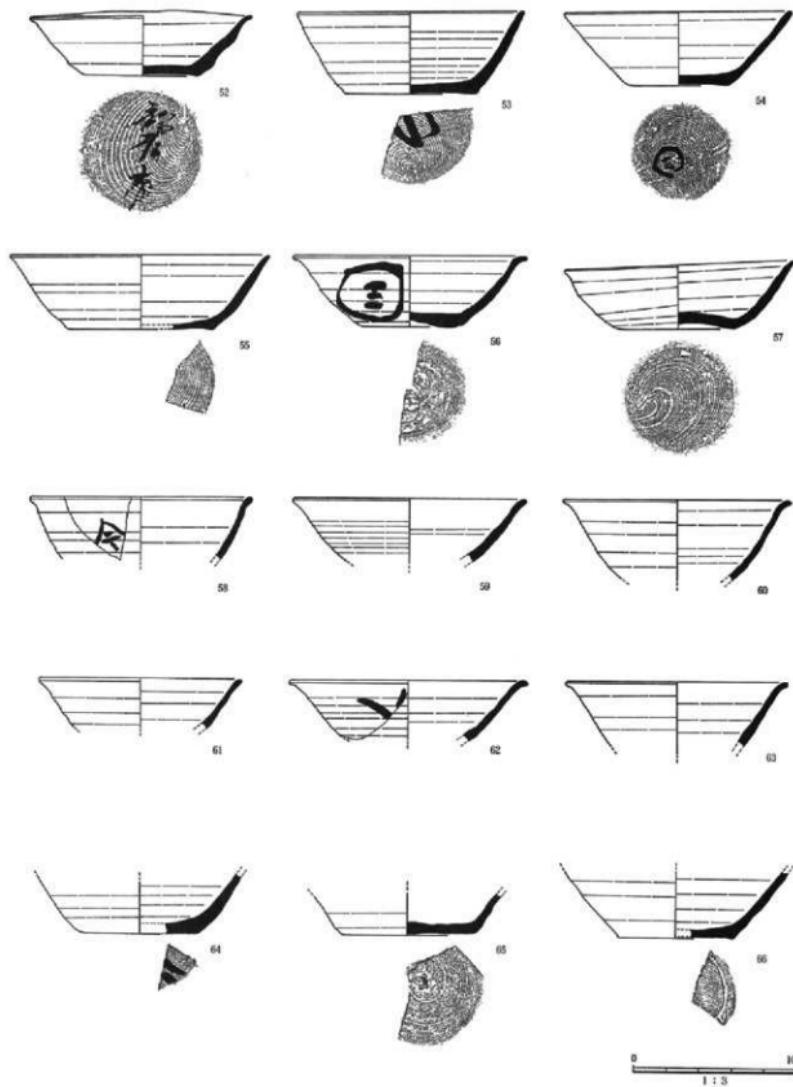
37

0
1 : 6
20cm

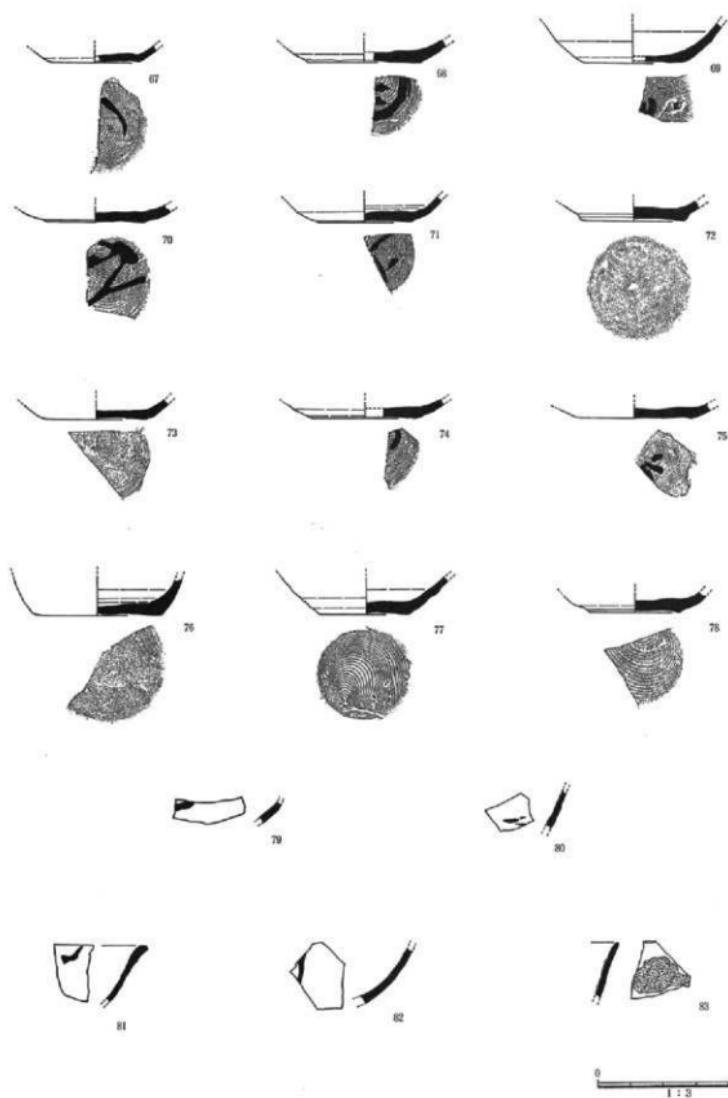
第45図 遺物実測図（5）



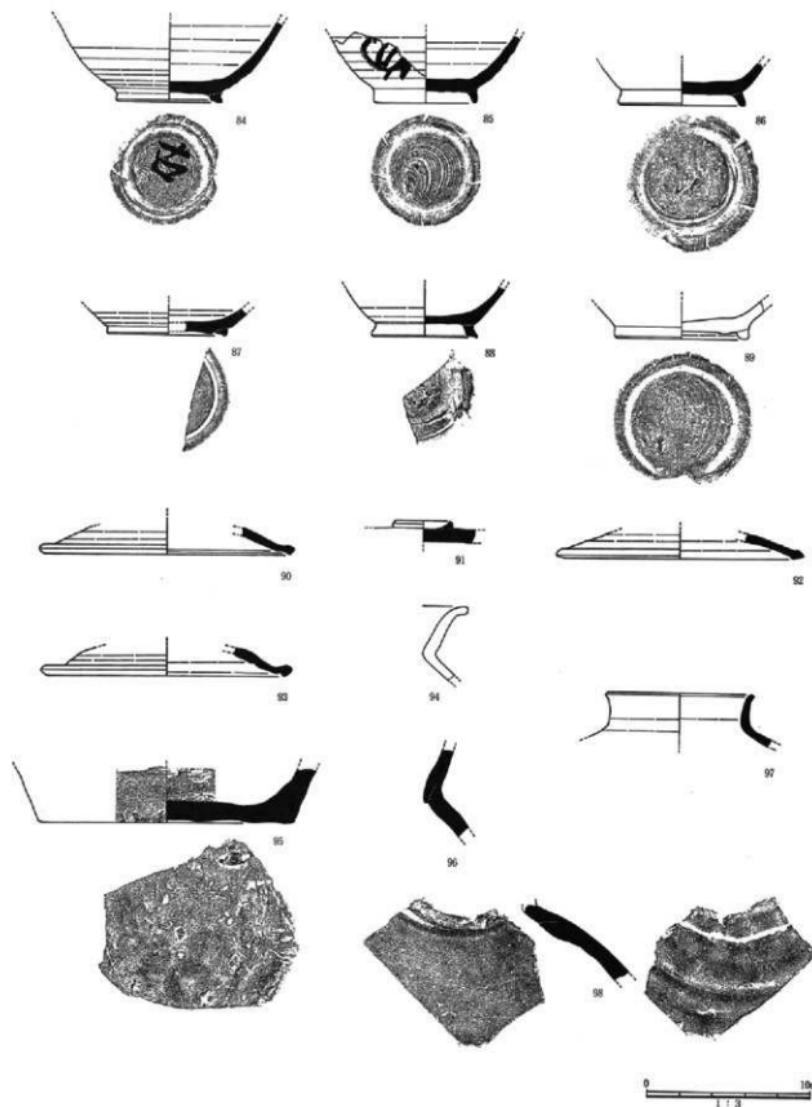
第46図 遺物実測図（6）



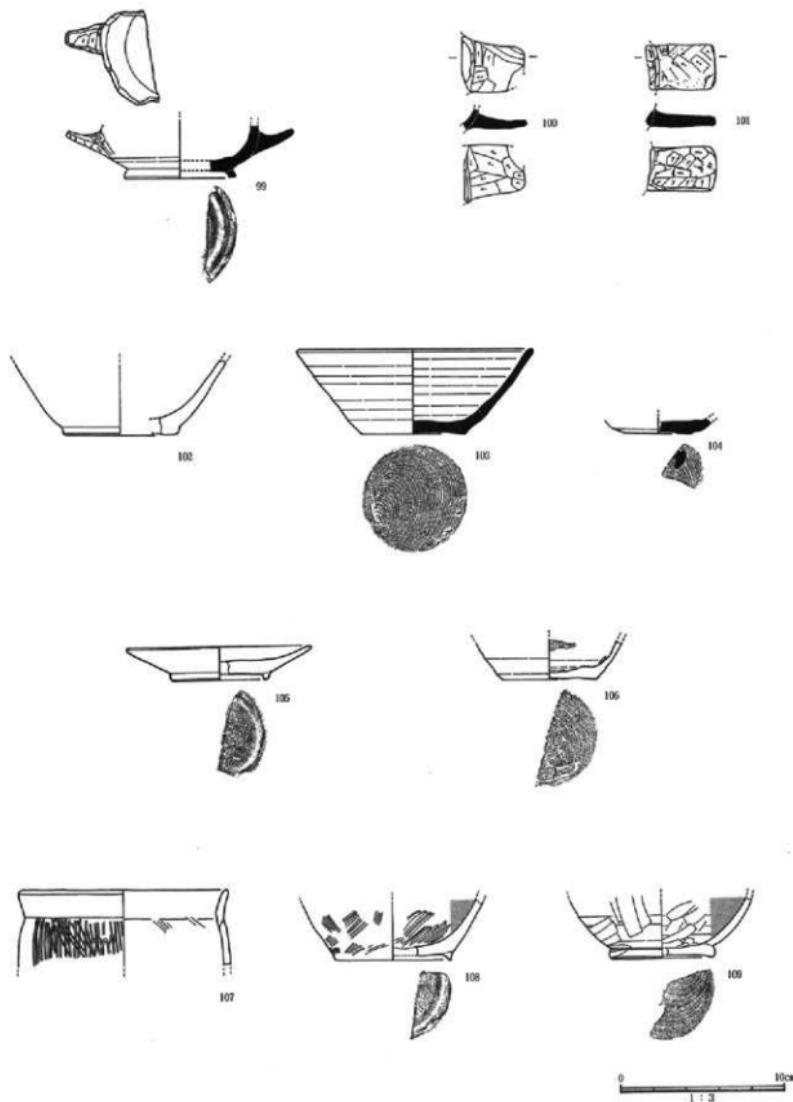
第47図 遺物実測図（7）



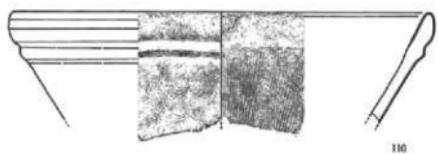
第48図 遺物実測図 (8)



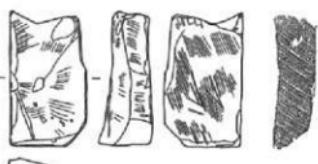
第49図 遺物実測図 (9)



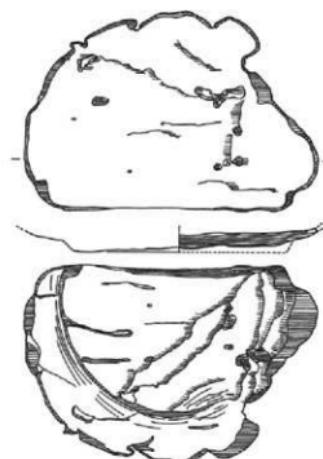
第50図 遺物実測図 (10)



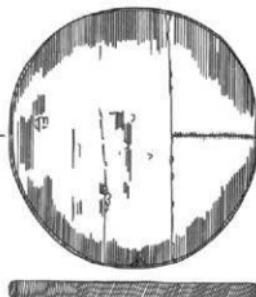
110



111



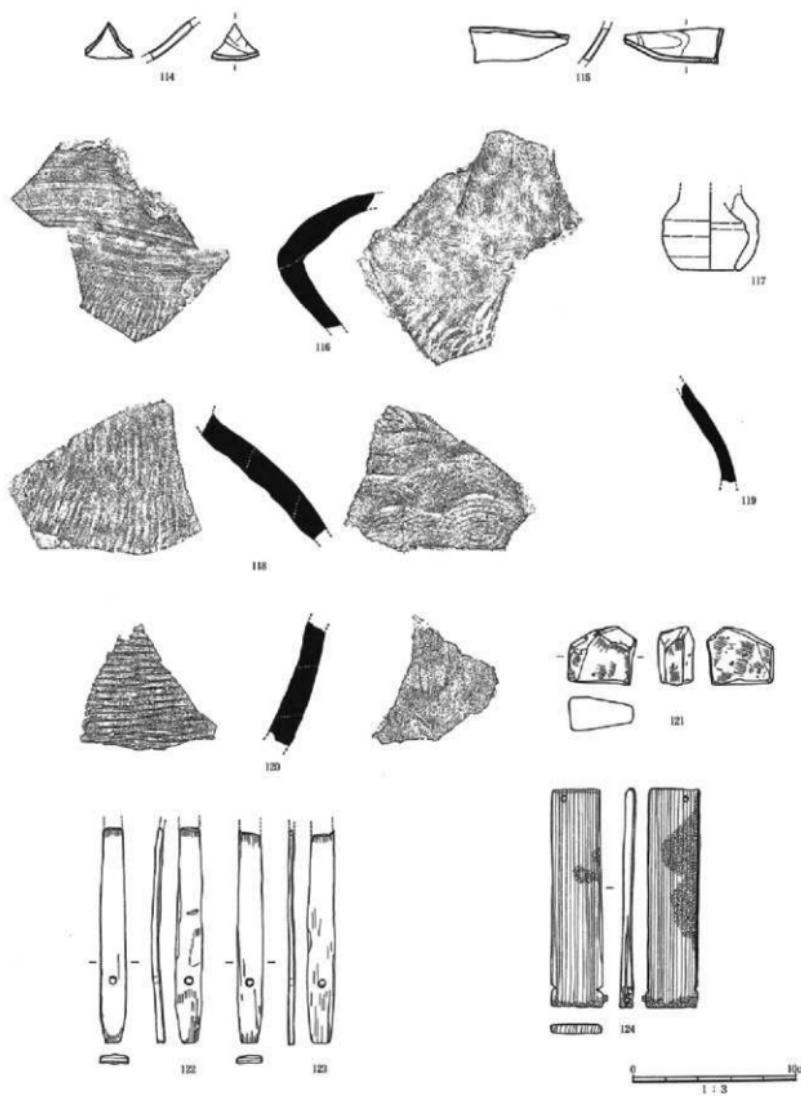
112



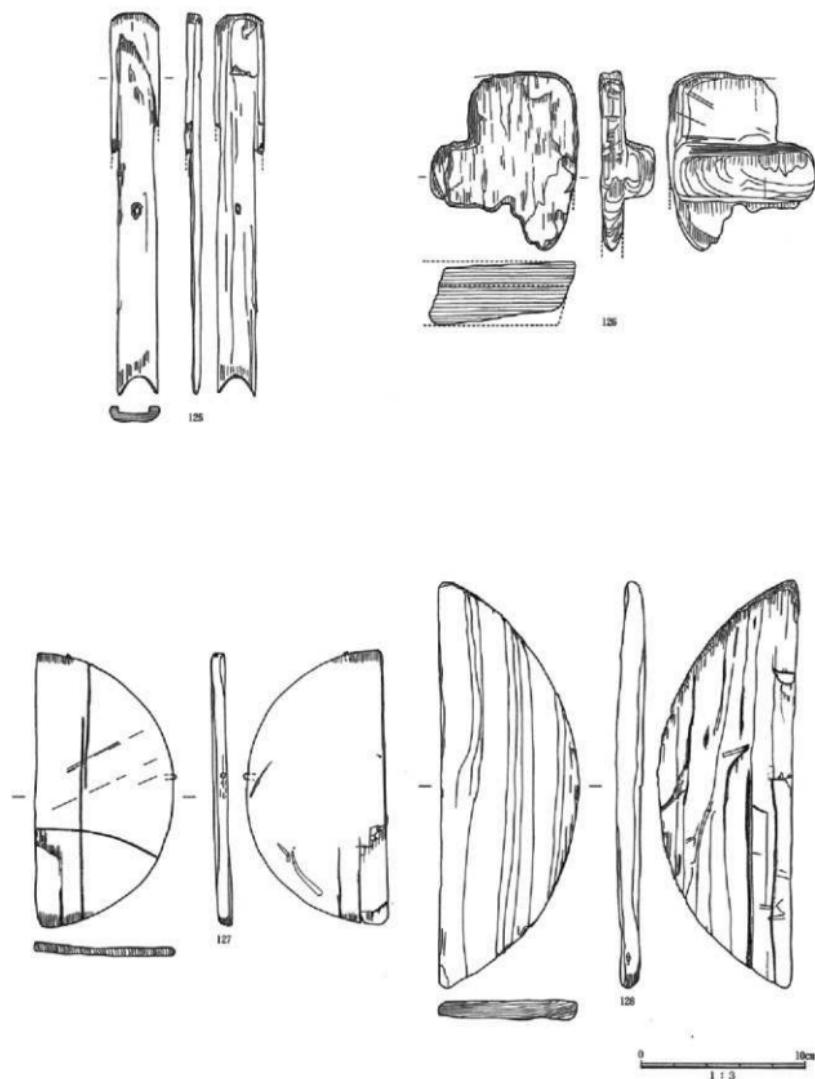
113



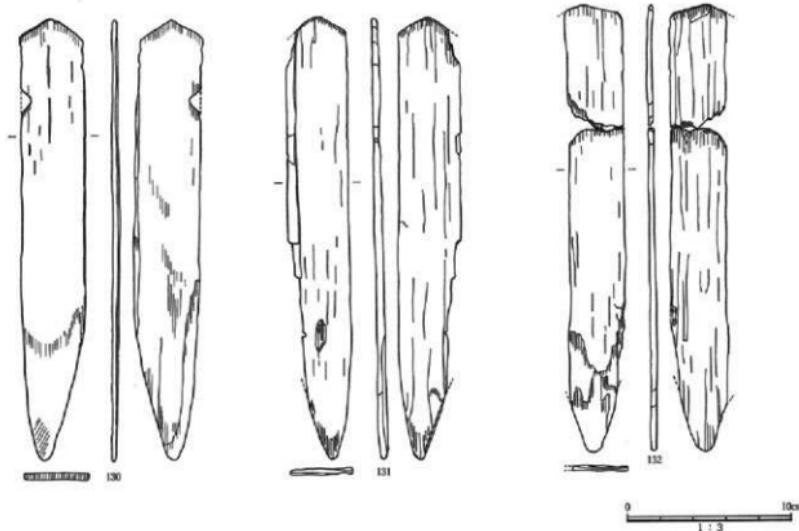
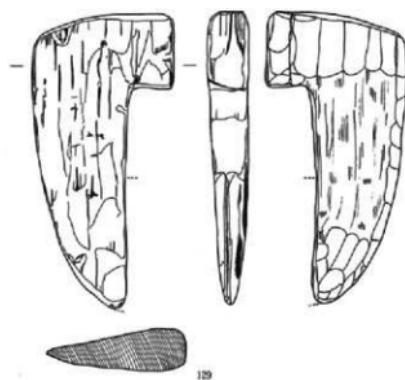
第51図 遺物実測図 (11)



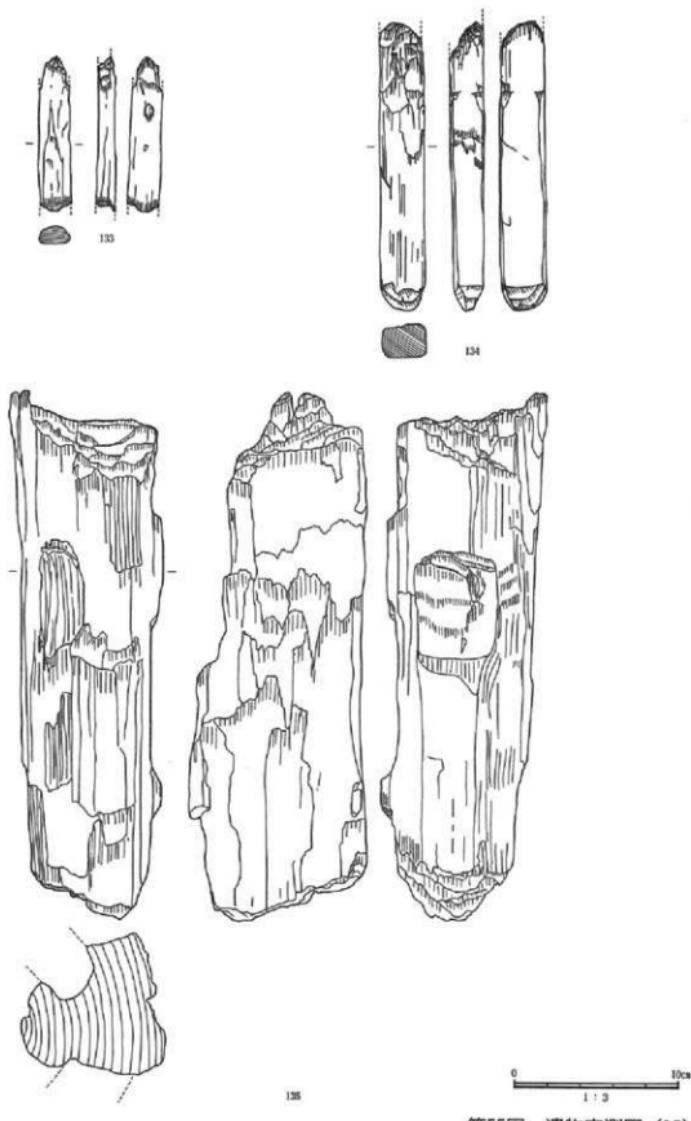
第52図 遺物実測図 (12)



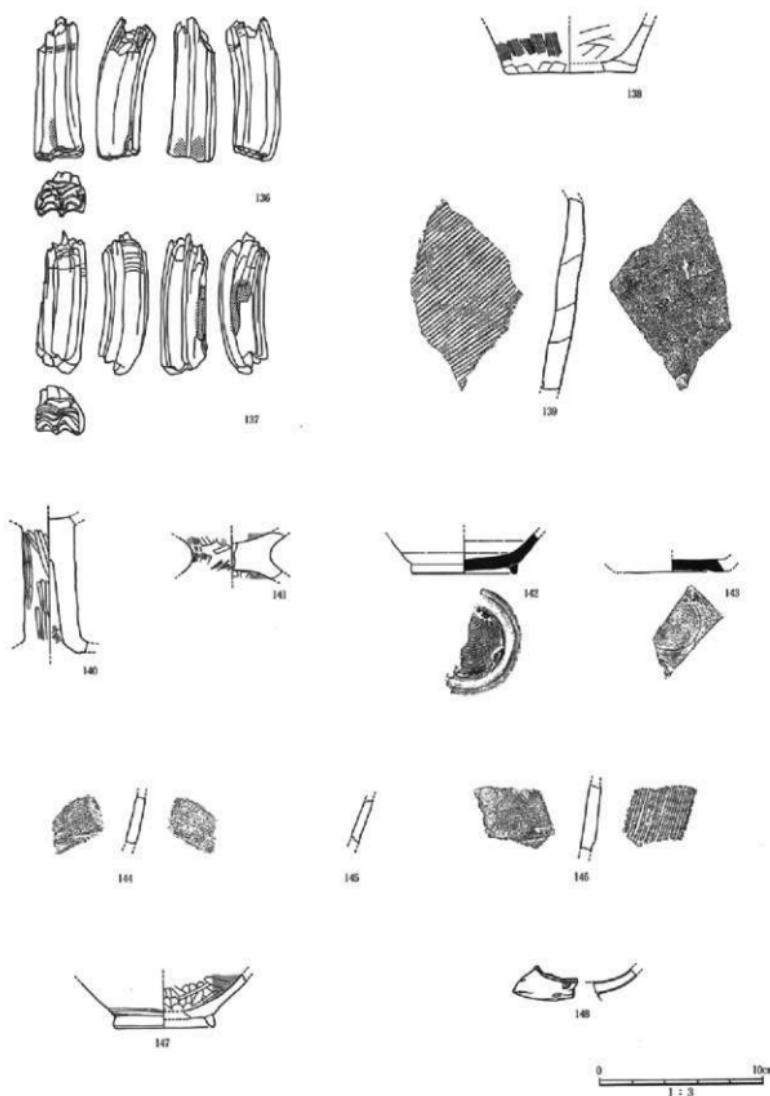
第53図 遺物実測図 (13)



第54図 遺物実測図 (14)



第55図 遺物実測図 (15)



第56図 遺物実測図 (16)

第3次調査

表-3 第3次調査出土遺物観察表(1)

登録番号	種類	器種	計測値 (mm)				底部	調整技法		出土地点	登録番号	残存	備考
			口径	底径	器高	壁厚		外面	内面				
41	土師器	坪	(180)	30	60	4	丸底扁平底	ハケ目ナダ	ハケミガキ	SG 3	IP96	1/2	赤彩、織密
42	土師器	壺			5		ハケケズリ	ハラケミガキ	SG 3 F 2	IP117	1/4以下	粗砂混	
43	土師器	高壺	(150)		7		ハケミガキ	ハラケミガキ	SG 3 F 2	IP974	1/4以下	赤彩、織密	
44	土師器	高坪	(152)		7		ハラケミガキ	ハケ目ナダ	SG 3	IP92- 17-27	1/4以下	赤彩、織密	
45	土師器	盤台	98		7		ハラケミガキ	ナダ	SG 3	IP46	1/3	赤彩、織密	
46	土師器	盤台	93		4		ハケ目ナダ	ハラケミガキ	SG 3	IP54	1/4	赤彩、織密	
47	土師器	盤台	81	100	83	7	ハラミガキ	ハラミガキ	SG 3	IP54- 17	ほぼ完形	赤彩、織密	
48	土師器	盤台	(102)		6		ハラケミガキ	ハラケミガキ	SG 3	IP67	1/2	赤彩、織密	
49	土師器	鉢	160	27	99	6	平底	ハラケ	ハラミガキ	SG 3	IP52	ほぼ完形	粗砂混
50	土師器	盤	160		5		ハラケ	ハラミガキ	SG 3 F 4	IP94	ほぼ完形	赤彩、織密	
51	土師器	壺	103		4		ハラケミガキ	ナダ	SG 3	IP91	1/2	赤彩、織密	
52	土師器	壺			5		ハケ目ナダ	ナダ	SG 3	IP106	1/4以下	粗砂混	
53	土師器	壺	(178)		8		マツツ	マツツ	SG 3		1/4以下		
54	土師器	壺		28	6	平底	マツツ	マツツ	SG 3	IP91	1/4以下	赤彩、織密	
55	土師器	壺	(120)		4.5		ナダ	ナダ	SG 3	IP48	1/4以下		
56	土師器	壺	(136)		5.5		ハラケ日	ハラケミガキ	SG 3	IP110	1/4以下		
57	土師器	壺	(172)		5		ハラケミガキ	ナダ	SG 3		1/4以下	胎内薄く、施燒痕、膨化品力	
58	土師器	壺	(180)		5		ナダ	ハラケミガキ	SG 3	IP112	1/4以下	粗砂混	
59	土師器	壺	150 (65)	208	5	平底	ナダ	ハラケミガキ	SG 3	IP42	ほぼ完形	粗砂混	
60	土師器	壺	(171)		4		ハケ目ナダ	ハケ目	SG 3	IP68	1/4以下	粗砂混	
61	土師器	壺	(150)		7.5		ハケ目ナダ	ハラケミガキ	SG 3	IP85	1/4以下	粗砂混	
62	土師器	壺	(160)		8		ナダハケ目	ナダハケ目	SG 3	IP113	1/4以下	粗砂混、二次加熱	
63	土師器	壺	(181)		5		ナダハケ目	ハラケミガキ	SG 3	IP49	1/4	外縁傾斜着、粗砂混	
64	土師器	壺	(194)		7		ナダハケ目	ナダハケ目	SG 3	IP105	1/4以下	外縁傾斜着、粗砂混	
65	土師器	壺	(226) (75)		5	平底	ナダハケ目	ナダハケ目	SG 3	IP114- 115	1/4以下	粗砂混	
66	土師器	壺		42	5.0	平底	ハケ目	ハラミガキ	SG 3	IP85	1/4以下	織密	
67	土師器	壺		74	5	平底	ハラナダ	ハラナダ	SG 3 F 2		1/4以下	内外面深付着、粗砂混	
68	土師器	壺		46	5	平底	ハケ目	ハケ目	SG 3	IP86- 1-17	4/5	粗砂混	
69	土師器	壺	(54)		6.5	平底	ハラミガキ	ハラミガキ	SG 3	IP50	1/4以下	粗砂混、底部ハラケズリ	
70	須恵器	壺		12			タクナ目	アテ瓶	SG 3		1/4以下	粗砂混	
71	近世陶器	瓶	(88)		5		ロクロナダ	ロクロナダ	SG 3		1/4以下	織密	
72	近世陶器	瓶			16		ロクロナダ	ロクロナダ	SG 3		1/4以下	粗砂混、内面凹凸	
73	近世陶器	瓶			8		ロクロナダ	ロクロナダ	SG 3		1/4以下	粗砂混	
74	金網製品	キセル	長64	共通10	延33				SG 3		欠損有り	匂いなし	
75	金網製品	平網製品	(40)		22	1.5			SG 3		欠損有り		
76	木製品	板状木製品	長73	幅183	4.5				SG 3	IP51	欠損有り		
77	木製品	木下取	長382	幅260	3				SG 3	IP69- 100	欠損有り		
78	土師器	壺			6		ハケ目	ハラケミガキ	SG 2		1/4以下	粗砂混	
79	土師器	壺	(56)		9		ハケ目	ハケ目	SG 2	IP120	1/4以下	粗砂混	
80	土師器	壺	(138)		厚17		ロクロナダ	ロクロナダ	SG 2	IP96	1/4以下	織密	
81	赤陶土器	壺	(130)		厚25		ロクロナダ	ロクロナダ	SG 2		1/4以下	粗砂混	
82	土師器	土塗カ							SG 2		欠損有り	粗砂混	
83	中世磁器	白磁碗			5		施釉	施釉	SG 2		1/4以下	織密	
84	中世磁器	染付皿			4		施釉	施釉	SG 2		1/4以下	織密、高台裏カンナケズリ	
85	近世磁器	瓶			4		施釉	施釉	SG 2		1/4以下	織密、外縁に島形の文様	
86	土師器	壺	(190)		8		ハラケミガキ	ナダ、ハケ目	SK 209	IP107- 108	1/2	粗砂混、二次加熱	
87	土師器	壺		47	5	平底	ハラケミガキ	ハラケミガキ	SH 410		1/4以下	粗砂混	
88	土師器	壺		50	7	平底	ハケ目	ハケ目	SD 302		1/4以下	粗砂混	
89	土師器	壺	(60)		8	側張	ハケ目	ナダ	SD 302	IP156	1/4以下	赤彩、織密	
90	土師器	高壺			12.5		ハラミガキ	ナダハラミガキ					

表-4 第3次調査出土遺物観察表（2）

遺物番号	種類	種類	計測値 (mm)				底面	調査技法		出土地位	登録番号	残存	備考	
			口径	底径	高さ	厚さ		外面						
								回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	
52	須恵器	环	136	72	39	6	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP141	ほぼ完形	縦密、底部外側「稍有瘤」、脚	
53	須恵器	环	(140)	(81)	51	6	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP125	1/3	縦砂目、底部外縁黒済	
54	須恵器	环	(140)	58	45	4.5	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP143	2/3	縦砂目、底部外縁「王」、海綿	
55	須恵器	环	(160)	(90)	45	5	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP155	1/4	縦砂目	
56	須恵器	环	(145)	(80)	43	4	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP154	1/3	縦砂目、体部正位「王」、海綿	
57	須恵器	环	141	67	41	5	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP124	完形	縦砂目、海綿骨針	
58	須恵器	环	(137)			4	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目、底部正位「今」、海綿骨針		
59	須恵器	环	(144)			4	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP119	1/4	縦密、海綿骨針		
60	須恵器	环	(146)			4	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦密、海綿骨針		
61	須恵器	环	(126)			3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦密、海綿骨針		
62	須恵器	环	(147)			4	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目、体部辺縁黒済		
63	須恵器	环	(138)			3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦密		
64	須恵器	环	(54)			6	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦密、底部外縁黒済、加工痕	
65	須恵器	环	(80)			3.5	ヘア切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP132	1/4以下	縦密	
66	須恵器	环	(70)			4.5	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP135	1/4以下	縦密	
67	須恵器	环	(54)			4	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP128	1/4以下	縦密、底部外縁黒済	
68	須恵器	环	(70)			6	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP149	1/4以下	縦砂目、底部外縁「王」カ	
69	須恵器	环	(84)			4.5	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目、底部外縁黒済	
70	須恵器	环	(81)			6	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目、底部外縁黒済	
71	須恵器	环	(58)			4	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目、底部外縁黒済	
72	須恵器	环	54			4.5	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP126	1/4以下	縦密	
73	須恵器	环	(60)			4	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目、海綿骨針	
74	須恵器	环	(60)			5	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目、底部外縁黒済、海綿骨針	
75	須恵器	环	(70)			5.5	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目、底部外縁黒済	
76	須恵器	环	(80)			7	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP147	1/4以下	縦砂目、黑色粒多い	
77	須恵器	环	116			4	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP150	1/2	縦密、海綿骨針	
78	須恵器	环	(56)			6	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP129	1/4以下	縦砂目、海綿骨針	
79	須恵器	环				3	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目、体部墨書き		
80	須恵器	环				3	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦密、体部墨書き		
81	須恵器	环				3	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目、体部墨書き		
82	須恵器	环				4	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦密、底部墨書き		
83	須恵器	环				3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦密、内面漆付着		
84	須恵器	有台环	64			5.5	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP119	2/3	縦密、底部外縁「古」、海綿骨針	
85	須恵器	有台环	63			5.5	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP136	1/3	縦砂目、生焼、体部辺縁「物」	
86	須恵器	有台环	78			5	ヘア切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP145	1/4以下	縦砂目	
87	須恵器	有台环	(74)			5	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP127	1/4以下	縦密	
88	須恵器	有台环	64			5	ヘア切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP134	1/4以下	縦砂目	
89	須恵器	有台环	82			6	回転赤切り	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP133	1/4以下	縦砂目	
90	須恵器	環	(156)			4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦密		
91	須恵器	環				8	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦密		
92	須恵器	環	(182)			4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦密		
93	須恵器	環	(154)			4	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目		
94	土器	甕				7.5	ハケ目→ナガリ	ナガリ	ナガリ	SD302		1/4以下	縦砂目	
95	須恵器	甕	(152)			11	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP153	1/4以下	縦砂目		
96	須恵器	甕				9	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目		
97	須恵器	甕	(90)			4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目		
98	須恵器	甕				10	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	EP135	1/4以下	縦砂目、加工痕有り		
99	須恵器	双耳环	(80)			7	回転赤切り	ロクロナデ・ヘラケツリ	ロクロナデ	SD302	EP152	1/3	縦密	
100	須恵器	双耳环				6	ヘラケツリ	ロクロナデ	ロクロナデ	SD302		1/4以下	縦砂目	

第3次調査

表-5 第3次調査出土遺物観察表(3)

遺物番号	種別	分類	計測値 (mm)			底部	調査方法		出土地点	登録番号	残存	備考	
			口径	底径	高さ		外面	内面					
101	須恵器	灰耳杯			7			ヘラケズリ	SD302	SP146	1/4以下	粗砂混	
102	漆塗土器	有台杯	(70)		6.5		ロクロナデ	ロクロナデ	SD302	SP138	2/3	粗砂混、生焼	
103	須恵器	灰	(150)	64	52	4	圓軸余切り	ロクロナデ	SD302	SP138	1/4以下	粗砂混、生焼、底部外側墨書き	
104	須恵器	灰	(44)			6	圓軸余切り	ロクロナデ	SD302				
105	漆塗土器	黒	(114)	60	20	5	圓軸余切り	ロクロナデ	SD302	SP139	1/3	粗密	
106	漆塗土器	灰	(58)			4	圓軸余切り	ロクロナデ	SD302	SP140	1/4以下	粗砂混、雪母混、内面漆付着	
107	土器	甕	(128)			4.5		ハケ目+ナデ	ハケ目+ナデ	SD302	SP141	1/4以下	粗砂混
108	土器	甕	有台杯	(70)		6		ナデ	ヘラミガキ	SD302	SP130	1/4以下	粗密、内面黑色処理
109	土器	甕	有台杯	(64)		5	圓軸余切り	ロクロ→ケズリ	SD302	SP131	1/4以下	粗密、内面黑色処理	
110	近世陶器	罐	(150)			7		薄胎	薄胎	SD302		1/4以下	粗密、内面暗い跡目
111	石製品	砾石	長82	幅47	厚32				SD302	SP137	欠損有り	3面使用痕、2面切り離し痕	
112	木製品	楓木大盤	長178	幅120	高16	厚6	ロクロ成形	ロクロ成形	SD302	SP142	2/3		
113	木製品	曲物	長径159	細径152		厚13			SE12	SP155	欠損ナシ	曲物輝光	
114	中世磁器	青磁碗			4.5		圓物	圓物	SD4	SP2	1/4以下	粗密、体部内面劃花文	
115	中世磁器	青磁碗			4.5		圓物	圓物	SD4	SP39	1/4以下	粗密、体部内面飛雲文	
116	須恵器	甕			15		タタキ目	アテ瓶	SD4	SP30	1/4以下	粗砂混	
117	土器	土鉢			6		ロクロナデ	ロクロナデ	SD4	SP79	1/3	粗密、墨色斑混	
118	須恵器	甕			15		タタキ目	アテ瓶	SD4	SP80	1/4以下	粗砂混、湖綿骨付、墨色斑混	
119	須恵器	甕			8		ロクロナデ	ロクロナデ	SD4	SP38	1/4以下	粗密	
120	須恵器	甕			16		タタキ目	アテ瓶	SD4	SP27	1/4以下	粗砂混	
121	石製品	砾石	長35	幅36	厚20				SD4		欠損有り	5面使用痕	
122	木製品	扇骨	長131	幅16	厚4.2				SD4	SP112	欠損有り	要に擬じ孔有り、基部	
123	木製品	扇骨	長130	幅16	厚3.5				SD4	SP112	欠損有り	要に擬じ孔有り、基部	
124	木製品	漆刷毛	長133	幅31.5	厚6				SD4	SP7	欠損ナシ	漆付材、擦れ有り	
125	木製品	刀鞘	長233	幅29	厚8				SD4	SP29	欠損有り	小刀の鞘、中央に穿孔	
126	木製品	下肢	長109	幅90	厚15				SD4	SP24	欠損有り	道筋下肢、台座連のみ	
127	木製品	曲物	長165	幅85	厚6				SG3		欠損有り	底板のみ、2箇所接合穴残存	
128	木製品	曲物	長245	幅80	厚10				SD302		欠損有り	底板のみ、2箇所接合穴残存	
129	木製品	楓木大盤	長150	幅85	厚23				SD4	SP18	欠損有り	1/2欠損	
130	木製品	寄せ	長263	幅39	厚3.5				SD4	SP45	欠損有り	上端主頭、下端尖頭状	
131	木製品	塔婆	長269	幅37.5	厚3.5				SD4	SP40	欠損有り	上端主頭、下端尖頭状	
132	木製品	塔婆	長273	幅33	厚3.5				SD4	SP41	欠損有り	上端主頭、下端尖頭状、墨斑有り	
133	木製品	塔婆	長94	幅20	厚10				SD4	SP4	欠損有り	断面丸尖形	
134	木製品	塔婆	長176	幅28	厚21				SX342	SP32	欠損有り	断面形丸尖形	
135	木製品	部材	長322	幅96	厚99				SD4	SP25	欠損有り	2方向のホツ穴	
136	動物遺体	馬骨	長88	幅26	厚28				SD4	SP9	欠損有り	齒根部欠損、歯根剥離材質	
137	動物遺体	馬骨	長86	幅27	厚25				SD4	SP13	欠損有り	齒根部欠損、歯根剥離材質	
138	土器	甕	(80)	7.5			ヤコボ、ハクジ、ナデ	ヘラケズリ	SX342	SP37	1/4以下	粗砂混	
139	漆塗漆器	甕			12		朱漆状タクタ	押圧痕	SX342	SP36	1/4以下	粗砂混	
140	土器	甕	高坪		12		ヘラミガキ	ハケ目	SP252	SP43	1/3	赤彩、墨斑	
141	土器	甕	高坪		8		ヘラミガキ、ハサウエ	ヘラミガキ	XO		1/3	内面墨色処理、墨斑	
142	須恵器	有台杯	64	6	圓軸余切り	ロクロナデ	ロクロナデ	トレンチ			1/3	内面墨色処理、墨斑	
143	須恵器	灰		6	ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	トレンチ	SP185		1/4以下	粗砂混	
144	土器	不明		6.2		ハケ目	ハケ目	SP362			1/4以下	粗砂混	
145	近世陶器	不明		5		施釉	施釉	トレンチ			1/4以下	粗砂混	
146	近世陶器	圓鉢			7.5		ロクロナデ	ロクロナデ	SD4		欠損有り	墨斑、内面御目	
147	土器	甕	有台杯	(60)	5	圓軸ナデ	ナデ	ミガキ	XO		1/4	内面墨色処理、墨斑	
148	近世磁器	施釉碗			5		薄胎	薄胎	SP269		1/4以下	肥厚部、墨斑	

VI まとめと考察

1 調査のまとめ

今回の調査は、東北中央自動車道相馬・尾花沢線(上山～東根間)建設工事に係る緊急発掘調査である。調査結果を要約すると、以下のようなになる。

- ① 志戸田縄遺跡は、山形県山形市大字陣馬字志戸田縄に所在し、西流する馬見ヶ崎川の前縁部に立地している。今回の発掘調査は平成10年度に北西側側道部分1,150m²、平成11年度に本線・東側側道部分4,550m²を対象として実施した。遺跡の性格は、古墳時代前期の河川跡と奈良・平安時代の溝状遺構、中世鎌倉時代の屋敷跡とそれを区画する溝状遺構と考えられる。なお、当地域は、旧市街地の郊外の飛地をまとめて縄張りした地域から志戸田縄と名付けられた。
- ② 遺構の分布は、北側の溝により区画された掘立柱建物跡を中心とした中世域、中央～南側にかけて東西に貫流している河川跡を中心とした古墳時代域、南側に東西に走る溝状遺構を中心とした奈良・平安時代域に大別される。北側建物跡群は、やや計画性に欠ける配置をしているが、中心の方向軸が南北軸にあるものと東西軸にあるものとに分けられる。それら建物跡の周辺に深さ1m程の井戸跡を検出できた。
- ③ 出土した遺物は、中世域で少なく、古墳時代の河川跡や奈良・平安時代の溝状遺構で多量に出土した。古墳時代では、古墳時代前期の塙釜式期最終段階周辺の様相を示す古式土師器が出土した。器種が多様で、壺、器台、高壺、鉢、壺、甕がある。丁寧にミガキ調整をする器台や直口壺がある反面、中実脚をもつ高壺や調整にヘラ削りを施す甕や胎土が悪く粗雑になる器種なども見られる。奈良・平安時代では、底部切り離しがヘラ切りのものもあるが、9世紀半ば頃にあたる器形が主体になる。墨書き土器が21点確認され、すべてSD302から出土したものである。訛読可能な文字については、「福有南」・「王」・「古」・「物」・「今」が確認されている。中世では、SD4から12世紀後半代の青磁碗小片2点をはじめ扇骨や漆刷毛などの木製品が出土している。区画された建物跡の時期もその頃に想定できる。
- ④ 特筆される遺構・遺物は、調査区北側に展開する掘立柱建物跡群とそれを区画する溝状遺構、調査区南側に東西に走る溝状遺構SD302から出土した9世紀半ばの須恵器壺の底部に書かれた「福有南」である。掘立柱建物跡は7棟検出され、その内身舎2間×3間の建物が3棟と多い。また総柱建物ではなく、小規模な側柱建物が区画溝北側に展開する。井戸跡は、建物域南側に展開し、北側には存在しない。陽のささない空間には水場を設けない傾向が窺える。井戸跡は、確認面からの深さが1m内外で、開口部の径も1m以下の小規模なものが多い。「福有」は、『和名類聚抄』(高山寺本)にある8郷ある最上郡の郷名にあたる。『角川日本地名大辞典』などでも村山郡徳有郷にひかれた誤りと言っていたが、今回の調査で出土した墨書き土器により古写本の高山寺本の正当性が立証された。山形市西部付近が比定されている。

2 古墳時代の土器様相

古式土師器の器種は壺(A)・器台(B)・高壺(C)・鉢(D)・壺(E)・甕(F)の5種である。主に完形に近いもののみであるが類型化をしてみたい。壺(A)は、体部上半で口縁部が屈曲するもの(A 1)、やや膨らむ体部に短い口縁部がつくもの(A 2)、体部がやや内弯して延びる手づくね成形のもの(A 3)がある。A 1は、(II-1)・(4I-1)・(19-60)が該当し、今塚遺跡に器形的に類似するものがあるが、同遺跡では口縁部に陵をもつ有段壺も出土しており、本遺跡とは違う様相もある。A 2は(II-2)でA 3は(II-4)が該当する。

器台(B)は、小型で裾部に円孔を穿ち、口縁部が外反するもの(B 1)、口縁部が内弯するもの(B 2)がある。また、口縁部が内弯し、受け部中央に貫通孔の無いもの(B 2 a)がある。B 2 a以外は、受け部中央に貫通孔があり、器面に丁寧なミガキ調整を施す。B 1は(II-7・4I-6)、B 2は(4I-7)、B 2 aは(4I-5)が該当する。物見台遺跡7号住居でも脚部のみのものだがB 1・2類に属すると思われるものが多く出土している。本遺跡出土のものは脚部下端まで直線的に延びるもののが、若干反る器形もあるようである。

高壺(C)は、中実棒状脚にハの字に開く裾部をもつもの(C 1)、中空棒状脚のもの(C 2)がある。C 1は(4I-3)、C 2は(56-140)が該当する。

鉢(D)は、口縁部がやや内弯し、身が深いもの(D 1)、小型で半球状の体部をもち、口縁部が開くもの(D 2)がある。D 1は(4I-9)、D 2は(I2-19)が該当する。

壺(E)は、体部中位から屈曲外反する口頸部をもち、球形の体部がつくもの(E 1)、口頸部がやや短く、縦長な体部がつくもの(E 2)、やや外反する複合口縁をもつもの(E 3)、頸部に突帯を巡らすもの(E 4)、頸部がやや狭く、なで肩の器形(E 5)がある。該当する器形として、(E 1)は(4I-10)、(E 2)は(II-11・12・17)、(E 3)は(13-24・42-13)、(E 4)は(19-63)、(E 5)は(I2-20)があたる。全般的に丁寧なミガキ調整を行い、外面に赤彩を施すものもある。また、宮町遺跡、山形西高遺跡、今塚遺跡にみるような口縁部に棒状浮文をもつ大型の器形のものは出土しなかった。

甕(F)は、口縁部が外傾し、球胴形の体部がつくもの(F 1)、口縁部がやや直立し、体部中位に最大径があるもの(F 2)、頸部がやや狭く、なで肩の器形(F 3)、口縁部が外反し、なで肩のもの(F 4)、体部上半に最大径があり、口縁部が短く外反するもの(F 4)、口縁部が外傾・外反し体部中位に最大径があるもの(F 5)がある。(F 1)は(I2-21)、(F 2)は(I2-18・14-34-35)、(F 3)は(14-31・43-20・24)、(F 4)は(43-23)、(F 5)は(42-17・18・43-25)が該当する。調整にハケ目だけではなくヘラ削りが施されることがある。

以上が遺構出土の古式土師器分類であるが、傾向を概観・補足すると次のようになる。

- ・ 壺A 1の外面調整はミガキで、ケズリ・ハケ目による調整がみられない。
- ・ 器台のはほとんどがB 1・2の器形であるが、B 2 aのような貫通孔がないものもある。器面調整は丁寧なミガキあるいはハケ目を施す。
- ・ 高壺B 1の中空棒状脚からB 2 中実棒状脚への変化がみられる。
- ・ 直口壺の体部で球形のものが出現し、器高に占める体部の割合が大きくなる。

以上のことから本遺跡の古墳時代土器の様相は辻編年(辻 1995)のⅢ—3～4期に当たると思われる。また、住居跡が検出されなかつたため、河川跡出土遺物を中心にしての検討であるが、今後、周辺のほか同時期の今塚遺跡、陣馬遺跡、七浦遺跡、横手遺跡、西里遺跡(以上山形市)、下慎遺跡(河北町)、廻屋遺跡(白鷹町)などの遺跡出土品との比較検討などをしながら塙釜式期終末期周辺の当地区における研究の成果に期待したい。

《引用・参考文献》

- | | |
|------------|--|
| 青山博樹 | 1998 「土器①東北南部」第3回東北・関東前方後円墳研究大会シンポジウム資料 |
| 阿部明彦 | 1994 「升川遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第9集 |
| 石川県考古学研究会 | 1997 「石川県考古資料調査・集成事業報告書[祭祀具Ⅱ]」 |
| 伊藤邦弘 | 1988 「大橋遺跡第1次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財報告書第121集 |
| 上田秀夫 | 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」貿易陶磁研究No.2 |
| 宇野隆夫 | 1982 「井戸考」史林65—5 |
| 小野正敏 | 1982 「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」貿易陶磁研究No.2 |
| 齋藤 健他 | 1998 「上高田遺跡第2・3次調査報告書」山形県埋蔵文化財センター第57集 |
| 佐藤庄一他 | 1998 「平野山古窯跡群第12地点遠跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集 |
| 須賀井新人他 | 1994 「今塚遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第7集 |
| | 1997 「荒川2遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第43集 |
| 水戸弘美他 | 1997 「塔の腰遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第50集 |
| 高橋敏他 | 1998 「植木場1遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第59集 |
| 高橋誠明他 | 1999 「留沼遺跡」宮城県古川市文化財調査報告書第25集 |
| | 1999 「宮城県における古墳時代中期の土器様相」東国土器研究第5号 |
| 中世土器研究会 | 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社 |
| 辻 秀人 | 1994 「東北南部における古墳出現の土器編年—その1会津盆地—」東北学院大学論集歴史・地理学第26号 |
| | 1995 「東北南部における古墳出現の土器編年—その2会津盆地—」東北学院大学論集歴史・地理学第27号 |
| 野川主計他 | 1981 「畠中(一の坪)遺跡発掘調査報告書」河北町埋蔵文化財調査報告書第2集 |
| 北陸中世土器研究会 | 1993 「中世北陸の家・屋敷・暮らしそぶり」第6回北陸中世土器研究会 |
| | 1996 「飾る・遊ぶ・祈るの木製用具」第9回北陸中世土器研究会 |
| 森田 勉 | 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」貿易陶磁研究No.2 |
| 山形県 | |
| 埋蔵文化財センター | 1994 「山形県内出土の古式土器について」第1回課内学習会資料 |
| 山形県考古学会 | 2000 「山形考古学会第54回研究大会資料」 |
| 山形市史編さん委員会 | 1973 「山形市史上巻 原始・古代・中世編」 |
| 山形市金井公民館 | |
| 青年教室 | 1977 「金井むかしむかし」 |

ふりがな	しとだなわいせきだい2・3じはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	志戸田縄遺跡第2・3次発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第92集							
編著者名	渡部利之							
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301							
発行年月日	2001年10月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しとだなわいせきだい2次 志戸田縄遺跡	山形県山形市 大字陣馬 字志戸田	6210	平成10年度登録	38度 16分 30秒	140度 18分 00秒	19991027 ～ 19991127	1,150	東北中央自動車道相馬・尾花沢線(上山～東根間)
						20000419 ～ 20000722	4,550	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
志戸田遺跡 2次	集落跡	古墳時代	河川跡 土杭	1 8	古式土器類(壺・器台・高环鉢・壺・甕)	調査区を東西に横切る古墳時代の河川跡とそれを南北に切る中世の溝跡を検出した。		
		中世	溝	1	木製品(漆器皿・下駄) 金属製品(刀子)			
志戸田遺跡 3次	集落跡	古墳時代	河川跡 墳墓 土杭	2 1	古式土器類(壺・器台・高环鉢・壺・甕・甕)	2次調査で検出した河川跡の続きを確認。		
		奈良・平安時代	溝跡	1	須恵器(壺・有台杯・双耳壺 蓋・壺・甕) 赤焼土器(有台壺・甕) 木製品(挽物大盤)	調査区南側を東西に走る溝あとを検出した。		
	屋敷跡	中世	掘立柱建物 棚列柱建物 井戸跡 溝跡 土杭	7 2 8 1	輸入磁器(青磁碗) 国産陶器(須恵器系陶器) 木製品(扇骨・漆刷毛・曲物 刀鞘・下駄・塔婆)	調査区北側にコの字に区画する溝と建物群を検出した。 (總出土箱数:53)		

図 版



調査区設定概観(北から)



重機による表土除去状況(西から)



調査区表土除去終了状況(南から)



面整理作業風景(南西から)



遺構検出状況(南西から)



SG3河川跡T1 トレンチ土層断面(西から)



SG3河川跡T2(深掘トレンチ)土層断面(南から)



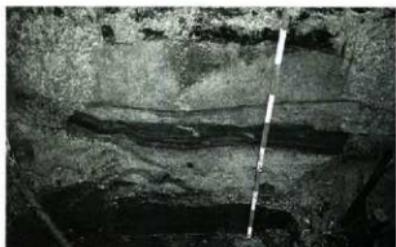
SG3河川跡T2(深掘トレンチ)土層断面(北から)

第2次調査

図版2



SG 3 河川跡 T 2 トレンチ深掘り作業状況(南西から)



SG 3 河川跡 T 2 トレンチ深掘り(約2m)断面状況(東から)



SG 3 河川跡 T 3 トレンチ土層断面(北東から)



SD 2 溝跡③ベルト南側断面(南西から)



SD 2 溝跡⑧ベルト断面(南から)



SD 2 溝跡①ベルト断面およびSX 1断面(北から)



SK 12 土坑跡土層断面(南西から)



SK 17 土坑跡土層断面(南西から)



SD 2溝跡⑦ベルト断面(南から)



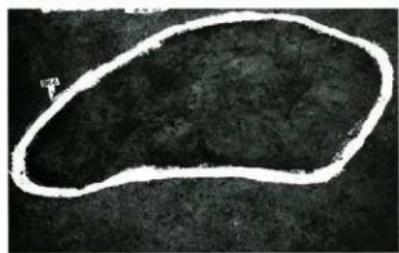
SD 2溝跡④ベルト断面(南西から)



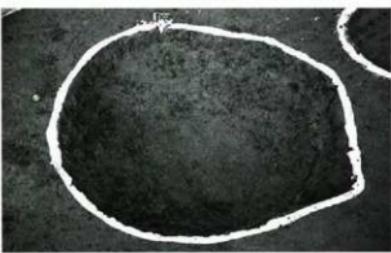
SK 5土坑跡(半截)遺物出土状況(東から)



SK 25土坑跡土層断面(南から)



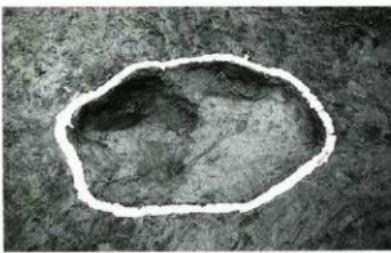
SK 4土坑跡完掘状況(東から)



SK 12土坑跡完掘状況(南から)



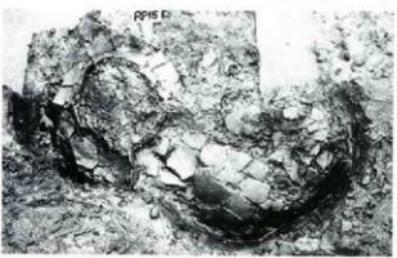
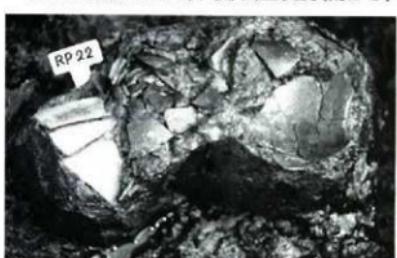
SK 17土坑跡(完掘)遺物出土状況(南西から)



SK 25土坑跡完掘状況(南から)

第2次調査

図版4





SG 3 河川跡 土師器 木出土状況(東から)



SB 28掘立柱建物跡完掘状況(西から)



SD 2 溝跡完掘状況(北から)



SD 2 溝跡完掘状況(南から)



SK 5 土坑跡完掘状況(南から)



SG 3 河川跡完掘状況(東から)



SD 2 溝跡・SG 3 河川跡完掘状況(南西から)



第2次調査区精査終了全景(上空から)

図版 6



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16

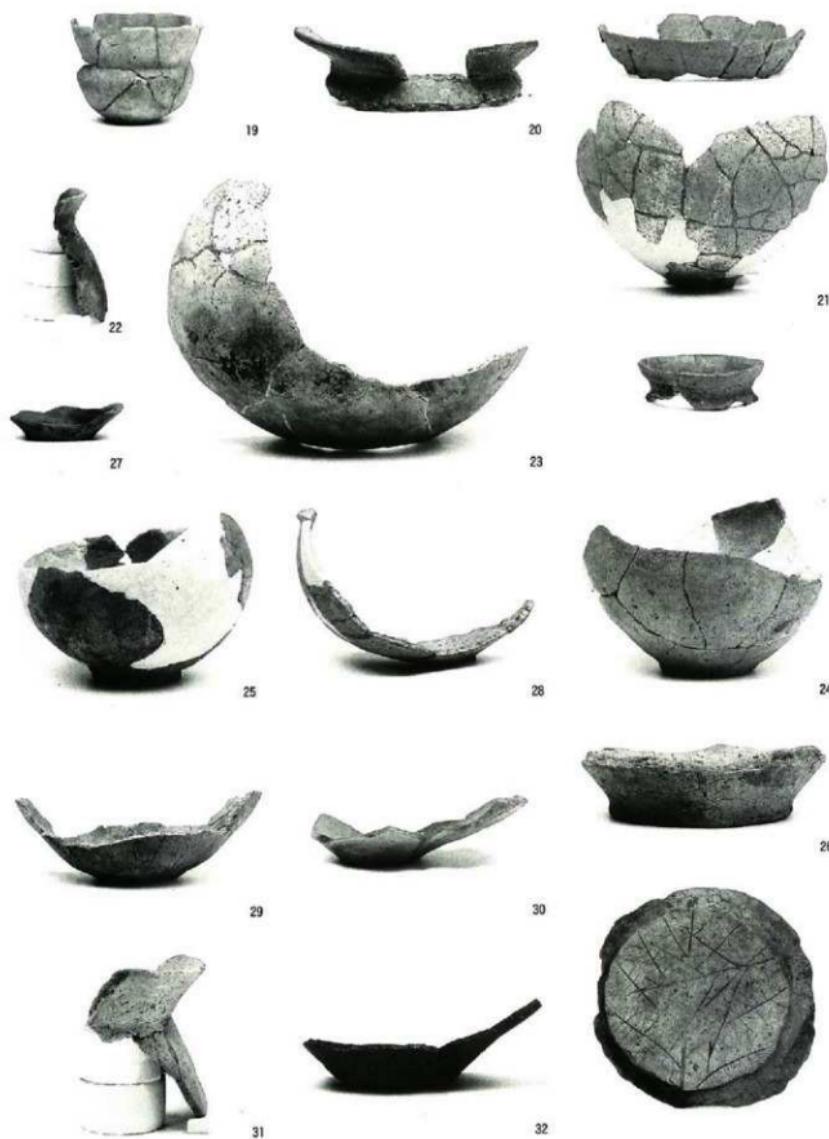


17



18

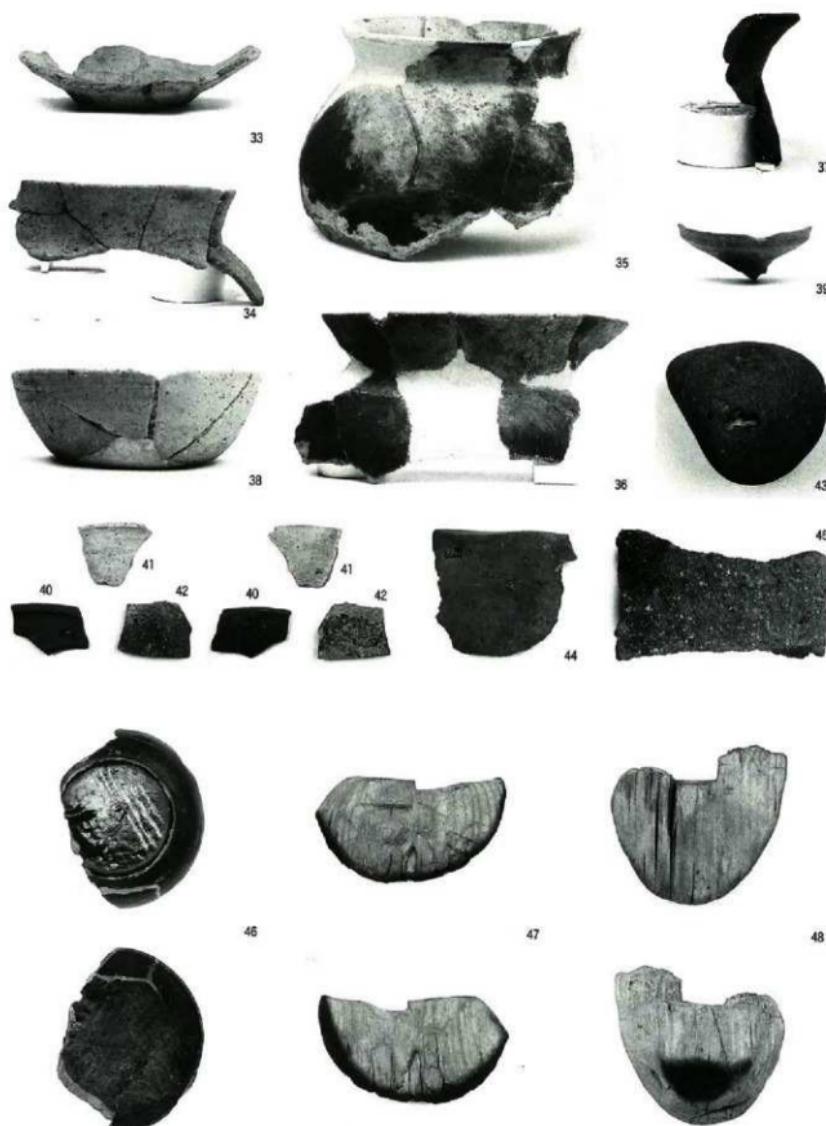
出土遺物 (1)



出土遺物（2）

第2次調査

図版8



出土遺物（3）



49

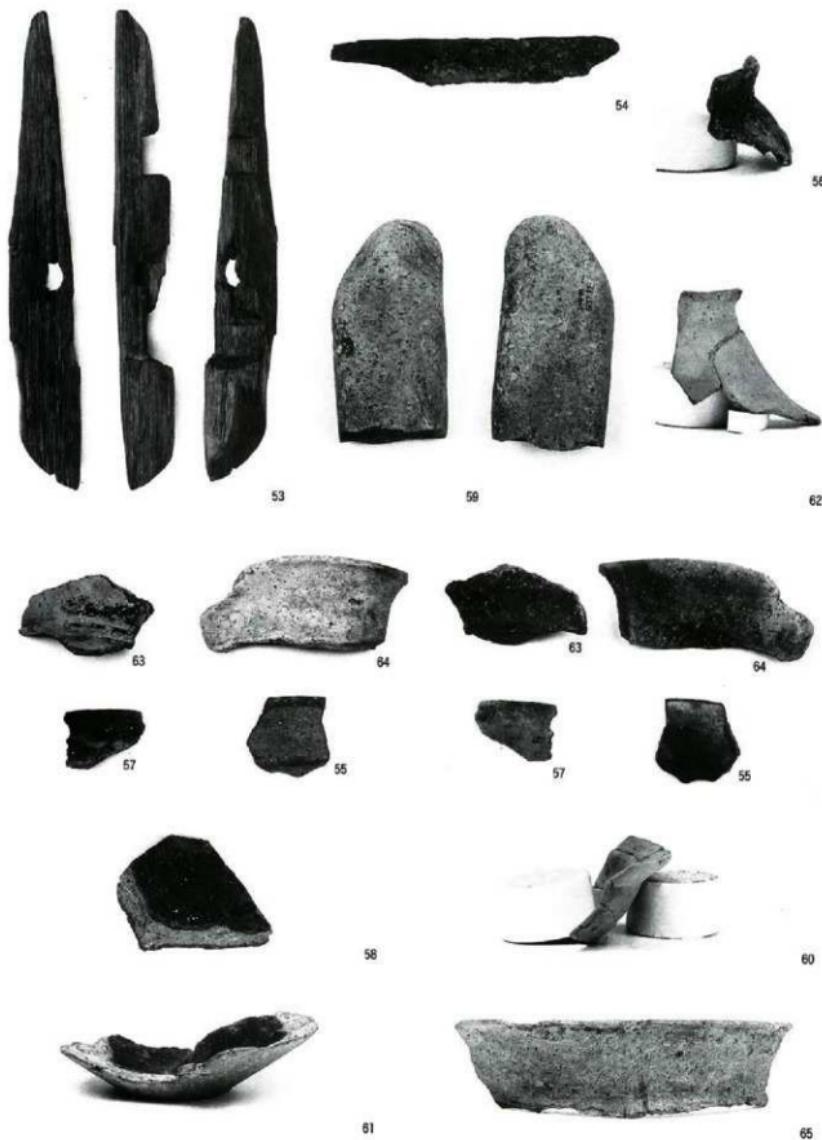
50



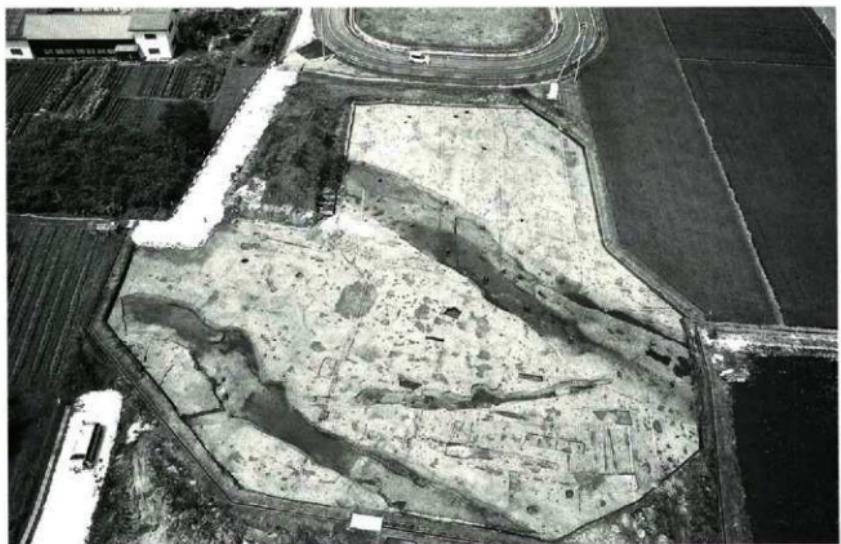
51

52

出土遺物（4）



出土遺物（5）



調査区空中写真(南から)



調査区遠景(南から)



重機稼働状況(東から)



作業状況(東から)



作業状況(南から)

第3次調査

図版12



基本層序D(南から)



S G 2 精査状況(東から)



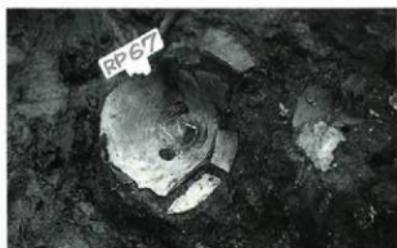
S G 2 土層断面(北東から)



S G 2 完掘状況(南東から)



S G 3 西側出土状況(北から)



SG 3 器台出土状況(北から)



SG 3 板状木製品出土状況(北から)



SG 3 東側出土状況(西から)



SG 3 農具出土状況(南から)



SG 3 土層断面(西から)



SG 3・SD 302 土層断面(西から)



SG 3 検出状況(西から)



SG 3 完掘状況(南東から)

第3次調査

図版14



S K 329土層断面(南から)



S K 329土師器出土状況(南から)



S K 330土層断面(南から)



S H410土層断面(東から)



S H410完掘状況(東から)



S D 302 土層断面(東から)



S D 302 精査状況(東から)



S D 302 出土状況(西から)



S D 302 須恵器坏出土状況(北から)



S D 302 挣物大盤・須恵器坏出土状況(西から)



S D 302 墨書き土器①出土状況(西から)



S D 302 墨書き土器「古」出土状況(北から)



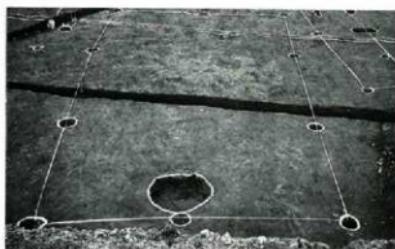
S D 302 完掘状況(南から)

第3次調査

図版16



北側掘立柱建物跡群(北東から)



S B14完掘状況(西から)



S B32完掘状況(西から)



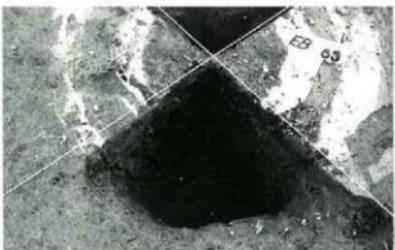
E B31土層断面(南から)



E B35北西断面(北西から)



S B 81検出状況(南から)



E B 83北西土層断面(北西から)



S B 116・125完掘状況(東から)



E B 129・130南東土層断面(南東から)



S B 170・181完掘状況(東から)



E B 178土層断面(西から)



SK 7土層断面(西から)



SK 8土層断面(東から)

第3次調査

図版18



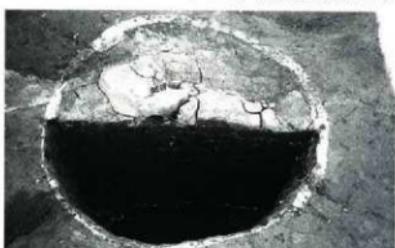
S E 11完掘状況(東から)



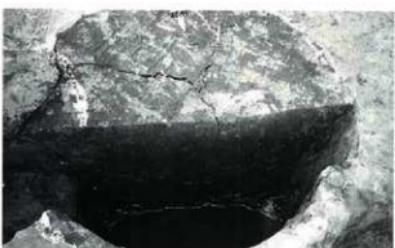
S E 12土層断面(東から)



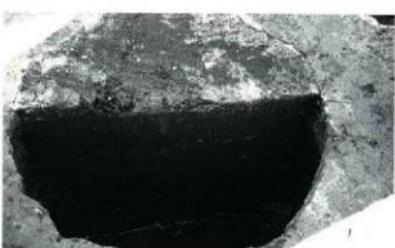
S E 12曲物底板出土状況(東から)



S E 59土層断面(南から)



S E 199土層断面(南から)



S E 208土層断面(南から)



S E 209土層断面(南から)



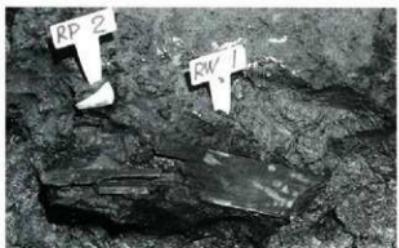
SK336断面(西から)



SD 4 a - a' 土層断面(東から)



SD 4 c - c' 土層断面(南から)



SD 4 青磁碗破片出土状況(南から)



SD 4 扇骨出土状況(西から)



SD 4 漆刷毛出土状況(西から)



SD 4 刀鞘出土状況(南西から)



SD 4 青磁碗破片出土状況(北東から)



SD 4 出土状況(北から)

第3次調査

図版20



S X 342(南から)



S X 342東西土層断面(南から)



S X 342完掘状況(東から)



S X 342人骨出土状況(東から)

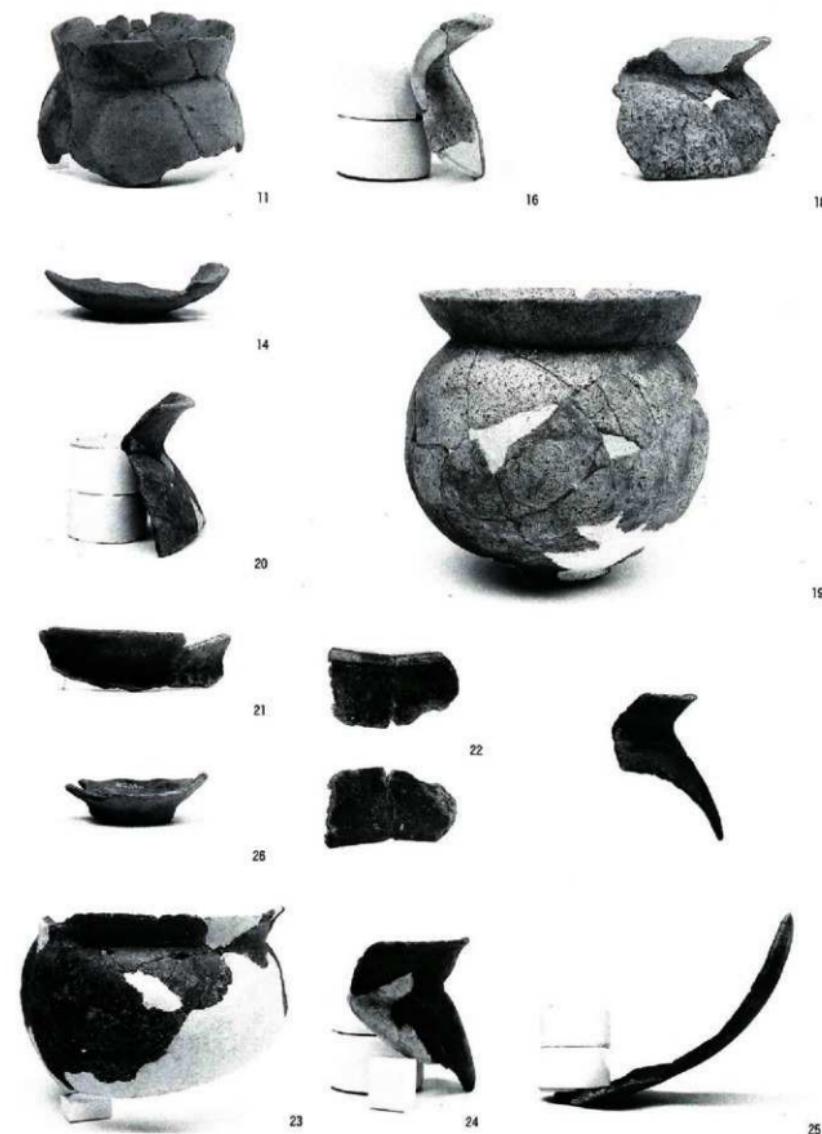


S X 195土層断面(西から)



出土遺物（1）

図版22



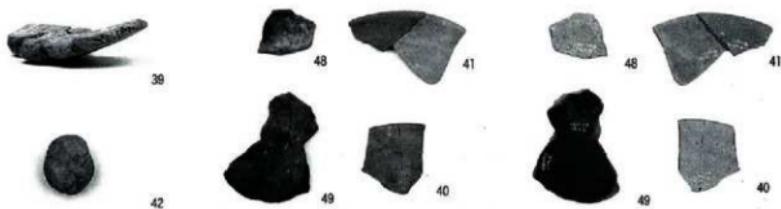
出土遺物（2）



出土遺物（3）

第3次調査

図版24



55

出土遺物 (4)



53



54



58



59



60



61



62



63



64



65



66



67



68



69

出土遺物（5）



65



66



67



68



69



70



71



72



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87

出土遺物（6）



74



77



84



75



76



85



89



86



89



86



92



91



90



92



91



90



88



93



94

出土遺物（7）



出土遺物 (8)



107



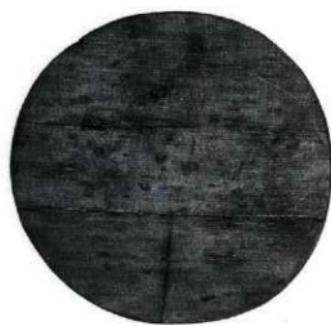
112



110



111



113

出土遺物（9）



129

130



131

132

出土遺物 (12)



133



134



135



137



136



137



136



137



136

出土遺物 (13)

第3次調査

図版34



138



140



141



142



144



145



143



146



139



147



144



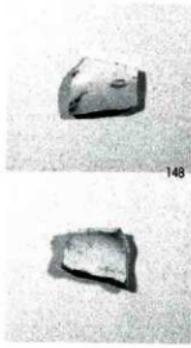
145



143



146



148



139

出土遺物 (14)

付 編

志戸田縄遺跡から出土した骨の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

志戸田縄遺跡では、鎌倉時代の集落跡が検出されている。このうち、性格不明遺構(3次調査SX342)からは、焼骨片が出土している。これらの焼骨片は、火葬人骨か食用残渣の獸骨である可能性が考えられている。

今回は、これらの焼骨の種類や部位を明らかにし、遺構の性格に関わる情報を得ることにした。

1. 試料

試料は、性格不明遺構(SX342)から出土した焼骨片4点である。各試料の詳細は、同定結果とともに表1に記した。

2. 方法

ルーペなどを用いて、試料の形態的特徴を観察し、種類を同定する。同定は、早稲田大学金子宏昌先生にお願いした。

3. 結果

同定結果を表1に示す。焼骨片は全てヒトで、確認された部位は大腿骨、桡骨または尺骨、および四肢骨片である。いずれも破片化が著しいため、性別、年齢などの詳細は不明である。

表1 SX342から出土した骨の種類・部位

番号	種名	部 位	左 右	備 考
1	ヒト	桡骨or尺骨	不明	破片、焼骨
2	ヒト	桡骨or尺骨	不明	破片、焼骨
3	ヒト	大 騰 骨	不明	破片、焼骨
なし	ヒト	不明(四肢骨)	不明	破片(2点)、焼骨

4.まとめ

今回同定を行った焼骨片は、いずれも人骨であった。したがって、これらの骨が出土したSX342は、埋葬に関連した施設の可能性がある。ただし、今回の同定試料はいずれも破片で数が少なく、また確認された部位が限られていることから、別の場所で火葬された人骨の一部がこの遺構内に埋葬されたことや、この遺構内で火葬された人骨のうち大部分が別の場所に移されたことなどが想定される。この点については、遺構覆土の堆積状況や含有物(焼土・炭化物等)に関する情報を加え、改めて検討したい。

山形県志戸田縄遺跡出土木製品の樹種調査結果（1）

柳吉田生物研究所 汐見 真
京都造形芸術大学 岡田 文男

1. 試料

試料は志戸田縄遺跡から出土した工具1点、農具2点、武器1点、服飾具8点、容器3点、祭祀具5点、部材1点、不明1点の合計22点である。ただし服飾具の下駄については本体と歯の両方を調査した。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を探取し、プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹1種、広葉樹3種）の表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

（遺物NO. 133, 130, 124, 122, 135, 125, 134, 131, 132, 36, 113）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) ブナ科ブナ属 (*Fagus* sp.)

（遺物NO. 46）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（ $\sim 110\mu\text{m}$ ）がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2～3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2～3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1～3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道（南部）、本州、四国、九州に分布する。

3) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)

（遺物NO. 126, 112, 49, 52, 53）

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（ $\sim 270\mu\text{m}$ ）が1列で孔圈部を形成してい

る。孔圈外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圈部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は1～数列で多数のすじとして見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1～3列のものと大部分を占める6～7細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下の端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

4) モクレン科モクレン属 (*Magnolia* sp.)

(遺物NO. 37, 49, 50, 13, 52, 53)

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～110 μm ）が単独ないし2～4個複合して多数分布する。軸方向柔細胞は1～2層の幅で年輪界に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなる流同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～700 μm となっている。モクレン属はモクレン、ホオノキ、コブシ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

- 島地 謙・伊東 隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地 謙・伊東 隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
島地 謙・須藤 彰司・原田 浩「木材の組織」森北出版株式会社（1982）
伊東 隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～IV」京都大学木質科学研究所（1995～）
北村 四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）

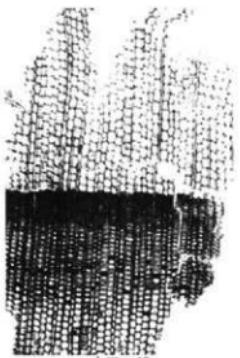
◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

山形県志戸田縄遺跡出土木製品樹種同定表

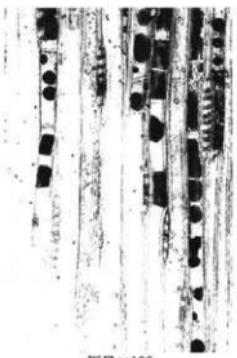
	No.	品名	樹種
第3次調査	133	塔婆	スギ科スギ属スギ
	130	塔婆	スギ科スギ属スギ
	124	漆刷毛	スギ科スギ属スギ
	122	檢扇	スギ科スギ属スギ
	126	下駄	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
	135	部材	スギ科スギ属スギ
	125	刀鞘	スギ科スギ属スギ
	134	塔婆	スギ科スギ属スギ
	131	塔婆	スギ科スギ属スギ
	132	塔婆	スギ科スギ属スギ
	36	板状製品	スギ科スギ属スギ
	113	曲物の底	スギ科スギ属スギ
	37	農具	モクレン科モクレン属
	37	農具	モクレン科モクレン属
	112	大盤	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
第2次調査	46	漆器椀	ブナ科ブナ属
	49	下駄（本体）	モクレン科モクレン属
	49	下駄（歯）	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
	50	下駄	モクレン科モクレン属
	13	下駄	モクレン科モクレン属
	52	下駄（本体）	モクレン科モクレン属
	52	下駄（歯）	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
	48	下駄（本体）	モクレン科モクレン属
	53	下駄（歯）	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
	53	下駄	モクレン科モクレン属



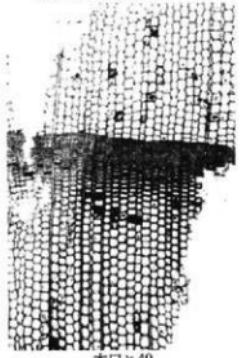
木口×40
No-133スギ科スギ属スギ



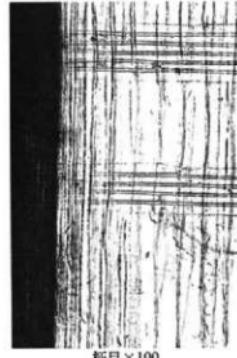
径目×100



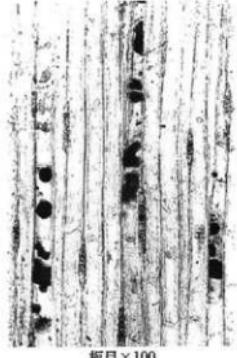
板目×100



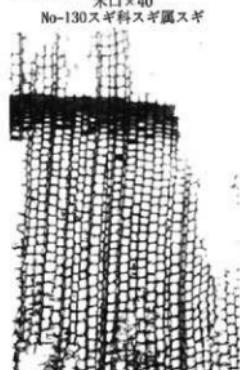
木口×40
No-130スギ科スギ属スギ



径目×100



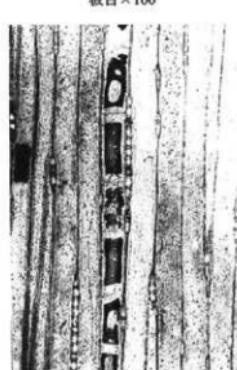
板目×100



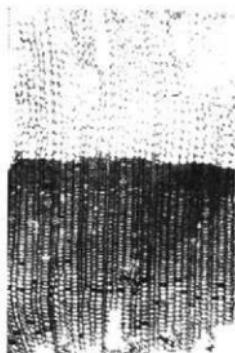
木口×40
No-124スギ科スギ属スギ



径目×100



板目×100



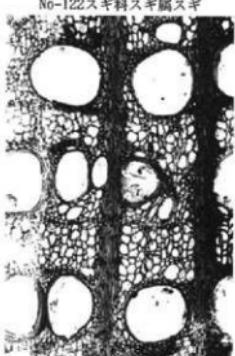
木口×40
No-122スギ科スギ属スギ



柾目×100



板目×100



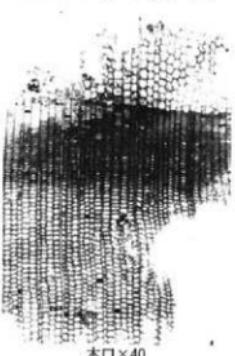
木口×40
No-126ニレ科ケヤキ属ケヤキ



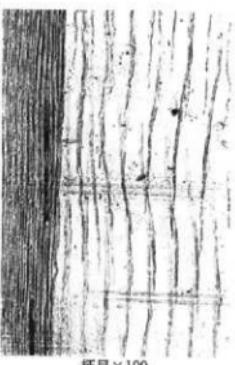
柾目×40



板目×40



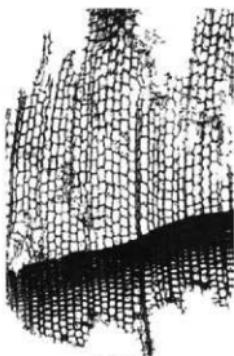
木口×40
No-135スギ科スギ属スギ



柾目×100



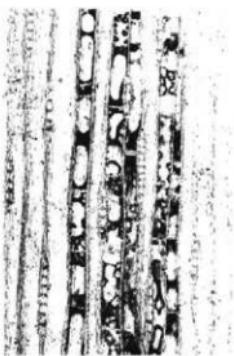
板目×40



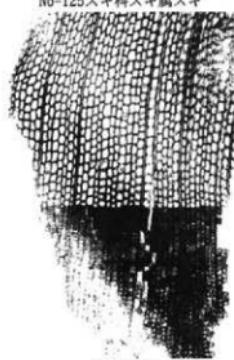
木口×40
No-125スギ科スギ属スギ



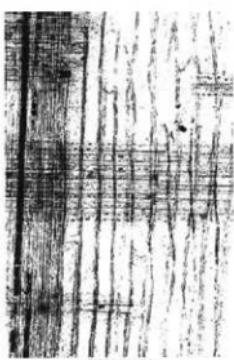
径目×100



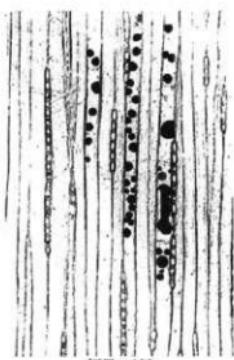
板目×100



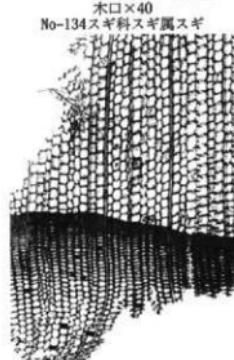
木口×40
No-134スギ科スギ属スギ



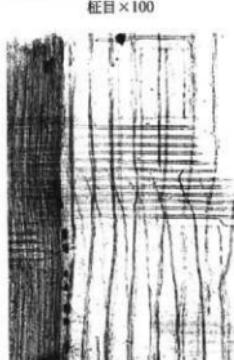
径目×100



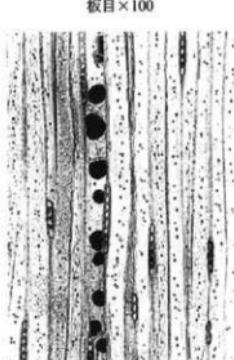
板目×100



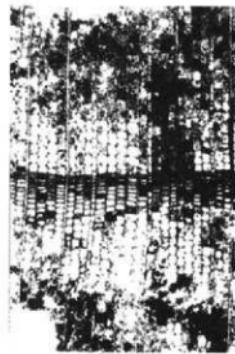
木口×40
No-131スギ科スギ属スギ



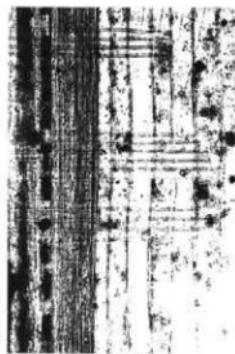
径目×100



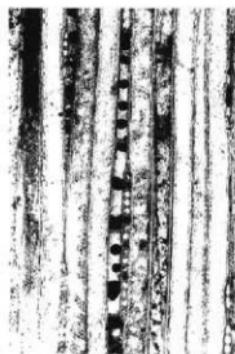
板目×100



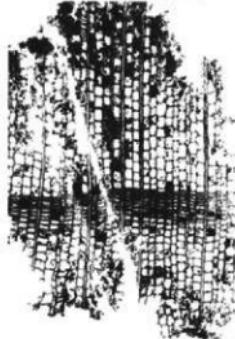
木口×40
No-132スギ科スギ属スギ



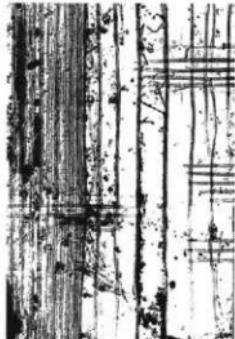
柾目×100



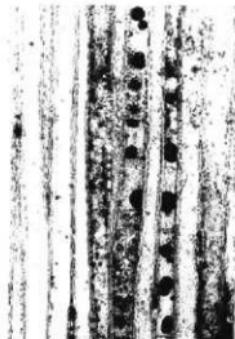
板目×100



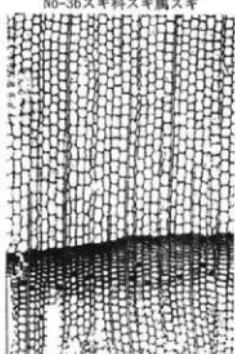
木口×40
No-36スギ科スギ属スギ



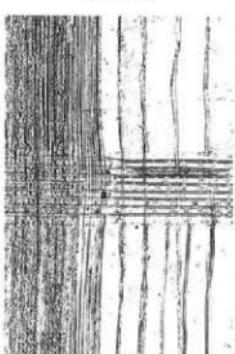
柾目×100



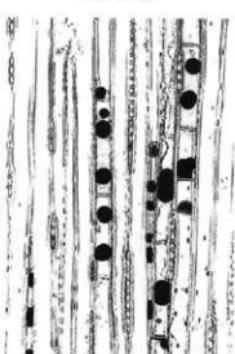
板目×100



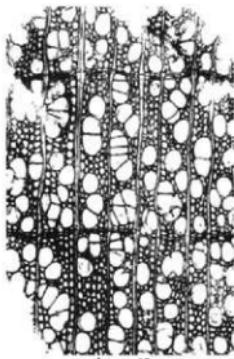
木口×40
No-113スギ科スギ属スギ



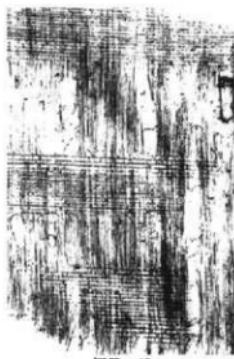
柾目×100



板目×100



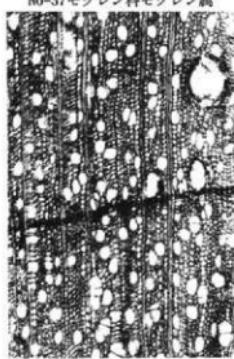
木口×40
No-37モクレン科モクレン属



径目×40



板目×40



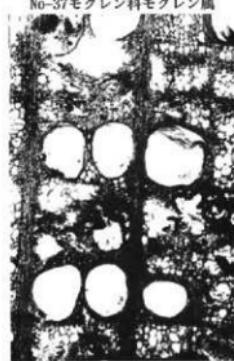
木口×40
No-37モクレン科モクレン属



径目×40



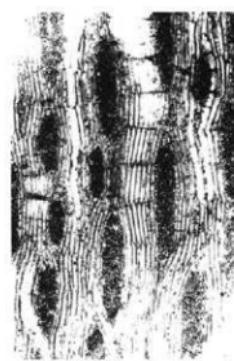
板目×40



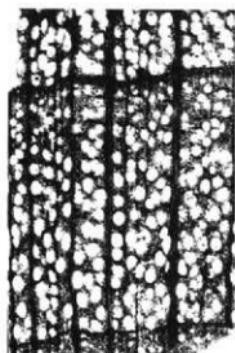
木口×40
No-112ニレ科ケヤキ属ケヤキ



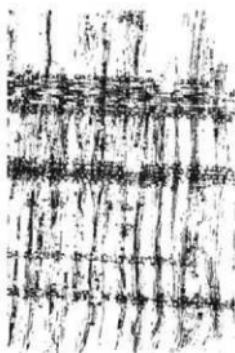
径目×40



板目×40



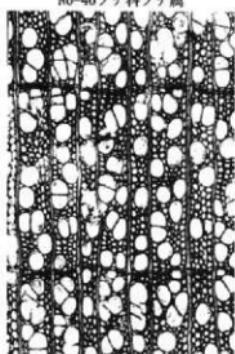
木口×40
No-46 ブナ科ブナ属



径目×40



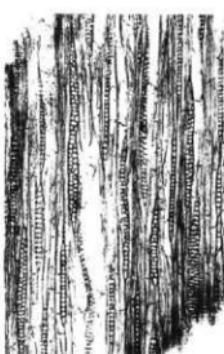
板目×40



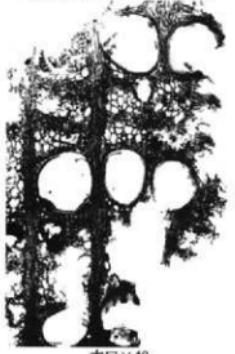
木口×40
No-49 モクレン科モクレン属



径目×40



板目×40



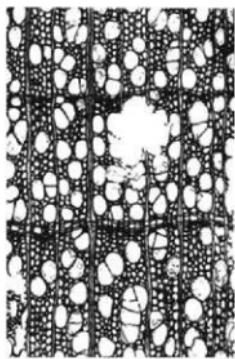
木口×40
No-49 ニレ科ケヤキ属ケヤキ



径目×40



板目×40



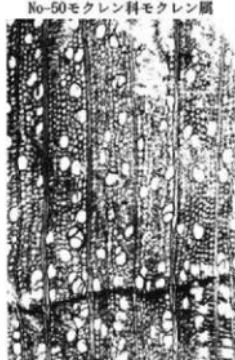
木口×40
No-50モクレン科モクレン属



径目×40



板目×40



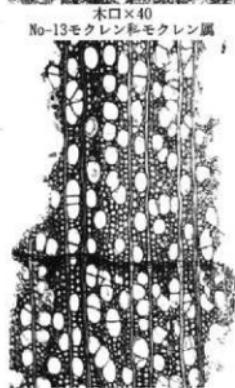
木口×40
No-13モクレン科モクレン属



径目×40



板目×40



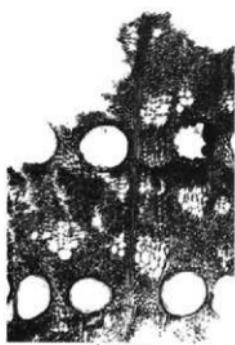
木口×40
No-52モクレン科モクレン属



径目×40



板目×40



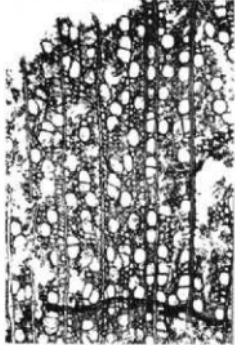
木口×40
No-52ニレ科ケヤキ属ケヤキ



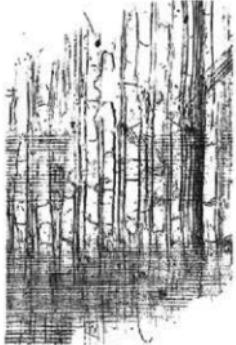
径目×40



板目×40



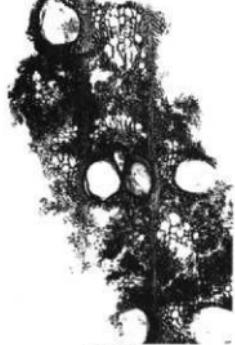
木口×40
No-48モクレン科モクレン属



径目×40



板目×40



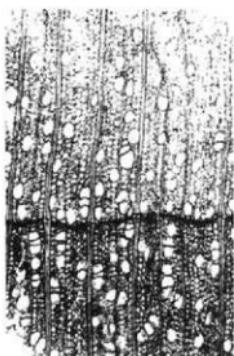
木口×40
No-53ニレ科ケヤキ属ケヤキ



径目×40



板目×40



木口×40
No-53モクレン科モクレン属



径目×40



板目×40

山形県志戸田繩遺跡出土木製品の樹種調査結果（2）

（株）吉田生物研究所 汐見 真
京都造形芸術大学 岡田 文男

1. 試料

試料は志戸田繩遺跡から出土した農具1点、容器2点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹2種、広葉樹1種）の顕微鏡写真と表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

（遺物No. 127）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) ヒノキ科クロベ属クロベ (*Thuja standishii* Carr.)

（遺物No. 128）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部に偏って接線状に存在する。柾目では放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に2～6個ある。放射柔細胞の水平壁が接線壁と接する際に水平壁は山形に厚くなり、接線壁との間に溝のような構造（インデンチャー）ができ、よく発達しているのが認められる。板目では放射組織は全て単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。クロベは本州、四国に分布する。

3) ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect *Prinus* sp.)

（遺物No. 129）

環孔材である。木口では大道管（ $\sim 380\mu\text{m}$ ）が年輪界にそって1～3列並んで孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは2～3個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は單穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組

織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

- 島地 謙・伊東 隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地 謙・伊東 隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
伊東 隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅳ」京都大学木質科学研究所（1995～）
北村 四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
深澤 和三「樹体の解剖」海青社（1997）

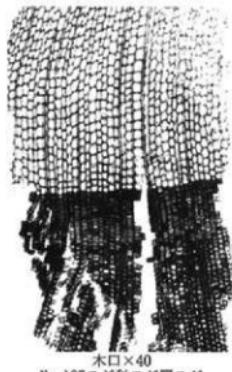
◆使用顕微鏡◆

Nikon

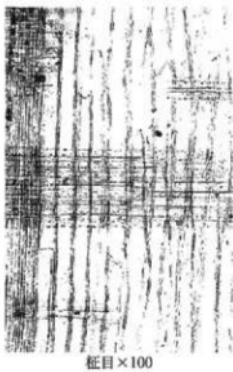
MICROFLEEX UFX-DX Type 115

志戸田縄遺跡出土木製品樹種同定表

第3次調査	No.	品名	樹種
	127	底板	スギ科スギ属スギ
	128	底板	ヒノキ科クロベ属クロベ
	129	鍍状木製品	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節



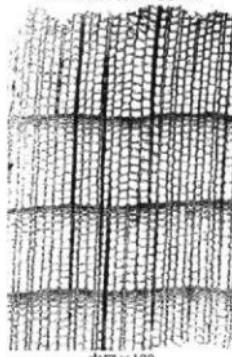
木口×40
No-127スギ科スギ属スギ



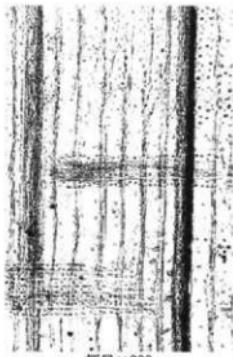
径目×100



板目×100



木口×100
No-128ヒノキ科クロベ属クロベ



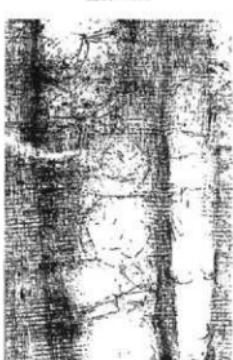
径目×200



板目×100



木口×40
No-129ブナ科コナラ属コナラ亞属コナラ節



径目×40



板目×40

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第92集

しとだかわ
志戸田縄遺跡第2・3次発掘調査報告書

2001年10月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161

山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 藤庄印刷株式会社
